

オバロで練習作

きやすたー (7 m g)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

練習作を独立させました。お手数ですが、お気に入り登録を元の掲載ページからこちらへ変更をお願いいたします。

投稿間隔は基本的に気が向いたら。

注意事項

TS要素あり。

タグの使い方に関する練習作なのでごちゃごちゃしてます。

吸血鬼要素？あいつは死んだよ。

ちよいとエロな場面あり。

オリジナル要素、捏造設定多数。

これらの点について了承いただけましたらお進みください。
以下、あらすじです。

朝倉悠里は34歳を迎える、さびれた小さな博物館の職員である。

朝起きて出勤して夜に帰宅してゲームをし、週末の夜は親戚の営むバーで入りびたる。休日はゲーム三昧で過ごし、再び朝がやってくる。

そんな日常は彼がプレイしていたDMMO-RPG「ユグドラシル」のサービス終了のお知らせと共に崩れ去った。

目次

序章 這いつくばる者たち

終わりゆく世界

黄昏

夜明け前

人物紹介：序章

第一章 リバイバル

パラダイム・シフト

Turbulence

会議は踊る

エ・ペスペルへ

293 234 184 143 138 96 59 1

序章 這いつくばる者たち

終わりゆく世界

「時が来た——そして彼らがついに動き出す！」

「キックオフだ！ 突入開始！ ゴーゴーゴー！」

占拠されたビルにばたばたと急ぎ足で突入していく強化外骨格装備の兵士たち。最新式のエネルギーライフルを装備し、真空状態や高温低温にも対応したアーマーを纏い、車程度は引きずれるほどのパワーアシストと超人的な反応速度を得る人体改造を受けた、まさに戦うための存在。

「手にするのは2133年に採用されたエネルギーブラスターライフル！ 粒子ビーム方式を採用した強力なライフルが、反乱軍の旧式のアーマーを次々と撃ち貫いていくう！」

「ええ〜……こんなに簡単に貫通できるんですか!?!」

「これなら反乱軍もイチコロですよね！」

スクリーンにデカデカと効果付きで映し出されるのは出演者たちの「これは驚きです！」と言わんばかりの嘘くさい感想を映したセリフの字幕。ナレーションの女性が

煽り立てるその画面では兵士たちが旧式のアーマーとアサルトライフルを装備した反乱軍の兵士たちを次々と撃ち殺し、赤い血がビルの中に流れていく様子が映し出されている。

「そして突入開始から僅かに十分……残された人質たちは無事に解放され、反乱軍は壊滅したのであつた！」

しかし彼らの到着までに数十人の人質が殺され多くの市民が負傷した。その殺された方は現場の兵士たちをしても、*“惨い”*と言わしめるものだったという……」

「VTRをご覧になっていただけたと思うのですが……これは酷いものですねえ！ 反乱軍ってこんなこと、よく平気でやれるもんですねえ！」

「本当ですよねー！ 私もう途中から殺された人たちが可哀そうで……涙が出そうになつて……！」

繁華街の夜だというのにスクリーンに映し出されるテレビの番組の内容はひどいものだ。果たして何人の人質が反乱軍諸共に撃ち殺されたのだろうか。その事実を知りもせず、スクリーンに映る芸能人や著名人はPMCを褒めちぎり、反乱軍の行いを悪しきものとして刷り込んでいく言葉を選んで印象付けていくのだから上手いものだと素直に感心してしまいそうになる。

あの地区を担当するPMC……*“Autunite 2.5”*は企業の重役の天下

り先としてその筋では有名な民間軍事会社だ。カネがあり、コネがあり、装備は潤沢で人材も多い。メディア全般も同じ系列会社の運営だから不祥事は報道されることもない。

クソツタレな世界の空——背後に立つアーコロジのドームを見上げてみれば暗雲で覆われた空が見えるだけだ。星の輝きは最早見えることもなく、重金属と放射線を含んだ雲が覆い隠すだけだ。

アーコロジー内では今頃ワインやビールをあげて、肉料理や魚料理などが振舞われていることだろう。他の多くの人々は配給されたエナジーバーと合成のビール風飲料と、ちよつと贅沢して買った「サラミンクローン培養の謎の肉やソーセージ」をつまむ程度だろう。

一つの世界が終わる。それを知ったのは偶々だった。新作ゲームのレビューをつらつらと流し読みしていた中で不意に目に留まった一つの広告のことだ。

『DMMO—RPG “Yggdrasil”へユグドラシル” サービス終了が決定』という見出しに目を奪われた。

この薄汚れた、いや……病巣が至る所に蔓延り余命幾許もない死に体のような地球に生きる俺たちにとっての安らぎ。かつて二人してのめりこんでいたゲームが終わるという事実。それがほんの少しの侘しさを俺に齎したのだ。

気づけば埃を被っていたコンソールを引っ張り出して掃除し、コンセントに電源ケー

ブルを挿入。システムを起動し、数年分にもなるOSのアップデートを開始していた。無性にイライラするのを抑えようとして電子タバコを一口。まだ終わらない、二三口。もつと早くしろよ、と三口。……………更新が終わったところには、帰宅してすぐ封を開けたばかりのカートリッジが半分も減っていた。

即座にヘッドギアを被り運営会社のホームページにアクセスしてログイン。最新版クライアントをダウンロードしてインストール。起動してアップデート。……………そしてゲームにログインした。

暗転する視界。真っ白な光が広がり、見えてきたのは最後にログアウトした地点——自身の住居ホームの姿だ。鬱蒼と生い茂る森の中にぼつんと空いた土地に建てられた一軒の邸宅。ゴシック・リヴァイヴアル建築のカントリー・ハウスはストリベリー・ヒル・ハウスを思わせる純白の壁をしていて、よく観察すると細やかな彫刻がさりげなく施されている。ほんの気まぐれで依頼しただけなのに、とんでもないクオリティの拠点が手に入って二人して驚いたのも懐かしい。

そうして次に始まったのが土地探し。比較的辺境の、というか敵MOBのレベル帯が低いワールドの中で更に低レベル帯、つまるところ初心者向けのフィールドを何か月もかけて駆けずり回った。そして落ち着いたのが平均レベル30以下、ヨトウンヘイムの山脈地帯の麓に広がるこの森林地帯だった。野ウサギや野鳥、少数のオオカミなどが居

る以外には脅威が無く、薬草系アイテムやキノコ系アイテムの採集地として初心者がたまに来る程度の静かな世界だ。

……高難度ダンジョンが発見されて一時期は廃人^{ハイレベル}クラスや上位^ヤランクギルド^勢が出入りするようにもなつてPKなんかもされたりやつたりしていたが、運営の計らいで所有者以外は邸宅や周囲の敷地内に入れなくなる措置が施されたんだったか。

そういうえばユグドラシルの運営は凝り性というか、頭のネジが外れてるといふか、大雪山おろしから空中スクリューパイロドライバーをキメたようなブツ飛んだことをしでかす奴等だった。ならこれくらいはまだ控えめなほうなのかもしれない。別次元に通じるゲートがあつてそこからしか邸宅に入れない、なんていうような大仰なギミックでないだけマシだろう。

壁と同じ真っ白なドアも懐かしい。真鍮製のシンプルなドアノッカーは見た目こそ質素だが、ハンドルの部分は月桂冠（酒ではない）を模したもので葉脈の文様まで刻まれている気合の入りのようだ。

コン、コン、コン。

もう叩くこともないと思つていた。けども、ああ、やっぱり俺は棄てきれないんだ。俺たちは遠く離れ離れになって会うことも難しくなり、それでも声が聞きたくて会いたくて、唯一得られた二人きりの時間をここで過ごして思い出を作り上げてきた。子ども

を作れなくなった彼女はどうしても諦めきれなくて、このユグドラシルにソレを求めたことも覚えている。

「——ただいま」

ひとりでに開く真つ白なドア。その向こうに——小学校にあがるかというくらいの子いさな、太陽のような輝きを帯びた黄金の髪の毛、黒いセーラーワンピースを身にまとった少女の姿があった。

「パパー！ おかえりなさいーい！」

あどけない笑みを浮かべ、搾りたての真つ赤な鮮血を光に透かしたような瞳で俺を見る少女。俺たちの娘——という設定のNPCは、定められた通りの行動を定められた通りに実行し、定められた一定の声色で俺を迎え入れてくれた。

思わず笑みが浮かぶ。いや、ゲーム内だから表情が変わるわけではないのだけど、この子に再び会えた喜びを感じている自分が居ることは確かだ。……………ここにいても居れば——いや、それは過ぎた願いだ。

「ふう」

パタパタと駆け足で付いてくる娘（NPCだけど）と共にヴィクトリア朝時代を思わせる書齋に入ってソファに腰かける。娘も同じようにソファにぼふつと勢いよく座るものの……そこから先は微動だにしない。当然だ。プログラムされていない行動はと

れないのだ。あの子のように俺の膝の上に飛び込んできたりなど……できないのだ。

ふと思いついて、スクリーンショットのフォルダを開くとページをめくる。二人して様々なワールドを駆け巡った思い出が脳裏を過って、ちくりと刺すような痛みが胸を貫いた。

ユグドラシルに存在する山の最高峰へ登った。湖のほとりで開かれたイベントに参加して惜しくも優勝を逃した。海辺で魚釣りをした。ワールドエネミーにたつた二人で挑んだ。未だ見ぬストーリーイベントやダンジョンを探してワールド内を駆け巡った。桜並木と一緒に歩いたり、PKされたり、クリスマスツリーを二人で眺めたり、すべては電子の海の中で起こったことで、ゼロとイチの生み出す光景でしかないけれど、俺と彼女と一緒にこのユグドラシルで思い出を作ってきたことは決して虚構などではない。

俺と彼女が流れ星の指輪シューティングスターに願って生み出されたこの子が、両親から何の思い出も与えられないことなくただ消えていくだけになる。そんな空虚な、ただ寂しいだけの終わりなんて迎えてほしくない。自分の中の何かが「無駄なことをしているな」と思いながら、「やるべきだ」と後押ししている。

「——よし、決めた。旅行しよう」

だからなのか、消えてしまう前に一つでも新しい思い出が欲しかった。無性に、衝動

的に、この子連れて世界を巡^{ワールド}ってみたいとなった。

この子はレベルにして僅か一桁、それも種族レベルくらいしか持っていない非力な存在だ。一度でも刃が通れば死あるのみ……即ち消滅だ。さすがに最難関ダンジョンを無傷で連れ歩くなどできやしないが、駆け出しが居るようなフィールドであれば出歩くこともできるだろう。

「まだ半年あるんだ。それまでにいろいろと——うん？」

ピロン、と聞こえた通知音に気付いてコンソールを開くと……軒並みオフライン状態のフレンドの中で唯一オンラインになっているフレンド名があることに気付いた。奇しくも、かつて彼女と二人で世界を巡っていたときに出会ったかの悪名高いギルドの主人の名が、そこに記されていた。

「モモンガさん、か」

ふとあのオーバーロードの顔を思い出した俺が彼にメッセージを送るのにそう時間はかからなかった。

「ルイス・ローデンバツハさん、か」

十分前に送られてきた突然のメッセージ。三年越しに聞いた声はどこか疲れた様子で、嫁自慢をしていた頃——彼のユグドラシル全盛期を知っているだけに不安な気分に

なっていました。

とはいえ三年前に最愛の人を失った直後に比べれば雲泥の差だ。あの時の彼は最早生きながらにして死んでいるかのような陰鬱な気配をまとっていた。

今日声を聴いた限りでだけど、精神面は比較的安定しているようだった。まさかワールドツアー世界旅行のスタート地点にナザリック大墳墓をチョイスするとは思ってもみなかったけれど。

「でも、スタート地点に選んでくれるっていうのも……ふふつ、なんていうか、嬉しいもんだなあ」

サービス終了まであと半年。それまでに精一杯遊び倒すつもりなのかもしれない。レベル5のNPCを連れてモンスターの跋扈する世界旅行をやり遂げるっていうのは無茶な気がするけど。

「よっし！ 気合入れてロールプレイするぞお！ 伊達でオーバーロードやってんじやないんだ！ あつちが吸血鬼の皇帝ならこっちは死者の王なんだ！」

よし、そうと決まればまずはナザリックの陣容を見せつけなきゃな！ メイドに執事、それに領域守護者を第一から第三層まで待機させて、案内先は円形闘技場にしよう！ 階層守護者を勢ぞろいさせ、観客席にモブモンスターを大量に配置して……歓迎しようじゃないか、盛大に！

「よく参られた。我が盟友……ルイス・ローデンバツハ殿。ユグドラシルワールド遊行の出立地として、我らアインズ・ウール・ゴウンが誇るナザリック大墳墓を選んでいただけしたこと、どれほどの言葉を尽くそうとも感謝の念に堪えぬというもの」

堂に入ったロールプレイだなと改めて感心する。ただ拠点の入り口の前に立つてセリフを言ったただけだというのに、立ち振る舞いはまさしく支配者のそれとしか言いようがない。中身は普通の会社員なのに。

「気合入りすぎじゃね、モモさん」

「ムフン、どうです？ こう見えて実はこっそりと練習してみたんですよ！ せっかくですしルイさんもロールプレイしてみてもどうですか？」

「いやいや！ 俺には似合わないって。できないわけじゃないけど堅苦しいのは正直苦手なんだしさ」

「やってみなきゃわかりませんって。こう、ほんのちよつと胸張って声のトーン落とせばいいんですよ。リアルでもいい声してたじやないですか」

「ま、まあ、声は、良いと言われるけどさ……」

エモーションで「グッド！」とアイコンを出したモモンガさんが急かすようにどうぞどうぞと待ち構えている。ウキウキしながらエモ出しするオーバードの姿に

は先ほどの威厳が微塵とも感じられない。

「久方ぶりだな、我が朋友。かつての動乱期の貴公を想起させる良い覇気を感じたぞ。時の流れは残酷にして無常の音の響きにも似たものだが、どうやら貴公には無縁であったようだな。壮健で何よりだ」

「貴殿もな。……いや、普通にカツコイイと思いますよ。これでもっと早くロールプレイしてればタブラさんとウルベルトさんも加えて四人で魔王ロールプレイできたのに……」

「それ〴〵ヤツは四天王の中でも最弱……」ってなるパターンじゃない?」

「ワールド相手に善戦できるやつが何言ってるんですか」

「守勢だから! 思いつきり守り固めてどうか! だからな!」

嫌なものを思い出した。ワールドチャンピオンのたっち・みーさん相手に戦わされる羽目になって必死に^{ワールドプレイク}“次元断切”を“刹那の見切り”でカウンターしまくって受け流ししてたら本気出したたっち・みーさんが他の火力スキルを使って疾風怒濤と言わんばかりにゴリゴリ攻め寄せて押し切られたんだったか。チャンピオンだけあってプレイヤースキルも頭おかしい。

「思ってたんですけど、この子ってNPCですよね?」

「ああ、そうだけど?」

「……レベル5のNPC連れていくんですか？」

「そうだ」

「アホかアンタはーっ!!? 危険地帯にろくなAI設定もしていないNPCを！ しかもレベル一桁！ 連れて行ったら一撃で消し飛びかねないじゃないですか！」

「そうだな」

「わかつてるならなんで——!?!」

「思い出作りです。せめて、思い出だけでもと、そんな感じですよ」

ぷんすかと怒っていたモモンガさんの動きがピタツと止まる。ああ、彼も俺が何をしようとしているのかは察したらしい。あと半年で終わるユグドラシルだが、だからこそやるべきことなのだ。

ふと、隣に居るNPC……俺たちの娘と設定された彼女、レーナの姿を眺める。少なくとも、嫁はこの子を本物の娘のように大切にしていた。服や装備を揃え、家の中とれるモーションを設定したり、過去にサンプリングされた声優の声を古いデータベースから引つ張ってきて与えたり。

対して、俺は何を与えられただろう。せいぜい素材を用意したりコックのスキルで作った料理アイテムを与えたりした程度だ。そんなもので終わってはいけないと、俺は心の底で思ったから行動に出たのだろう。

「それに俺はこう見えて防衛や支援に関しちやそこそ自信あるんですよ。死なせはしません。この身を盾としてでも守り通しますよ。ま、俺が気づくより召喚した眷属が庇うのが早いかもしれないけどね」

「なんか不安ですね」

「低レベル帯のマップだからいけるいける」

「余計不安になった」

「なんで!？」

「ま、せめて中でゆっくり話しましょうよ。突っ立って長話するのもいいですけど、せっかく来たんだから中を見て楽しんでもらわないと」

「そうだな。モモさん自慢のナザリックだ。楽しませてもらうよ」

「つと、パーティ設定しなくちゃ。とりあえず作りますね」

いざ入室というところでパーティを作り忘れていることに気付いたモモンガさんがパーティー編成を持ち掛けてきた。……のだがうんうんと唸るだけでお誘いのポップが出ない。

「……よしっ! コレだ!」

へ モモンガ さんから パーティ名 “子連れ吸血鬼―骸骨街道―” への参加要請が届きました!」

「ひつでえネーミングセンス」

「……そうですか？」

「だってモロにパクリじゃん」

「『ナザリック・ウィズ・ヴァンパイア』のほうがよかったですか？」

「モモさん、子連れ狼といいなんでそんな21世紀前後の映画知ってるの」

「以前ウルベルトさんたちと一緒に上映会やっただけですよ。昔の廃墟から映画のディスプレイが出てきたらしくて、全員に配信したんです。いやーアレは爆笑しましたよ！」

映画か。最後に見た映画はなんだったか。確か嫁が大興奮していたのは覚えているんだけどな。

「じゃあ行きましようか！ さあまずは第一層ですよ！ あ、ちゃんとギミック切っておかないと……エフェクトで見えづらくなりますし、NPCが敵対行動に出る可能性がありますから」

「マジ？」

「ええ。基本的にNPCは拠点への侵入者に対して即座に攻撃行動に出ますから。その点ギルドメンバーがリーダーのパーティを組んでいけば襲われることがないんです。ただし拠点内でパーティや同盟から離脱すると即座に拠点外に転送されるので、組みなおすには拠点外に一度出ないといけなくなります」

「そりやそうか。突然抜けられて背後からドスツツてのはなあ」

まあ、上位ギルドには上位ギルドなりの苦勞があるということだ。その中でもたった41人とはいえ最盛期にはランキング一桁にもあつたギルドの盟主なのだから、その辺の知識も豊富なのだろう。

ナザリックの中へ入るとまず出迎えたのは無数のアンデッドの軍勢。しかし彼らが立ち並ぶ姿は整然として規律正しく、一列になつて無骨な片手半劍バスタードソードの柄を右手に持ち、刀身の峰を胸にあてるように袈裟懸けで保持した様子はまるで儀仗兵のようだ。

実際、ただのスケルトンではなくその骨身に纏う鎧や籠アーマーガントレット、手は伝説級に近い聖遺物級レリックはあろうというものだ。拠点に配置するモンスターとはいえそこその数が配置できるMOBその他大勢にわざわざ装備させているあたりナザリックの財力と積み上げてきたモノがわかるというものだ。

石造りの壁面に均一に配された松明の明かり。その微かな光で照らし出される古代文字や絵画は経年劣化による風化具合まで再現されたエフエクトがかかっていて、陰影が効いたスケルトンの儀仗兵たちと相まって威圧感すら感じる。

「よくこれだけ揃えられましたね。軽く見ても伝説級一步手前の装備じゃないですか？」

「あ、そういえば知らないんでしたっけ。二年ほど前に過疎化対策でレア武器ピック

アップガチャとかカムバックキャンペーンがあつたんですよ。その中に特定モンスター限定ドロップ神器級装備ゴッスが含まれているっていうのがあつてですね——」

「買いまくったわけだ。で、余つたと」

「……お恥ずかしながら」

「あの時よりも装備が豪華になつてるもんだからどれだけ頑張つて稼いだのかと思つたら……結果として何人で回したんです？」

「5、6人つてとこですかね」

「それで、何回ほど回した？」

「……300連ほどですかね」

「そうか。じゃあ聞くけど——お求めだった品は？」

「……あなたのような勘のいいヒトは嫌いですよ」

「オーケー、俺が悪かつたよモモさん」

やはり知るべきではない、思い出したくない出来事だつたらしい。俺も1500人の討伐部隊の波状攻撃なんて思い出したくもない。いきなりメツセージで救援を求められたかと思えば嫁に引つ張られ、ナザリック外縁部で他の異形種ギルドのメンバーと即席のパーティーを結成して侵入阻止のための防衛戦をさせられる羽目になった。へ号令のスキルでひたすらに火力部隊の強化と足りない手数を補うための眷属召喚を繰り返

返したんだったか。結局第四波の迎撃のとき初手ワールドアイテム「アフラマズダー 光輪の善神」でメチャクチャデバフくらったところに号令料理その他スキルバフマシマシ「フォールンダウン 失墜する天空」。ブツパで半壊して……悲惨だったなあ。

「これだけ装備を整えたとしてもあの時みたいな場外乱闘には打つ手なしなんですけどね。拠点外で起こる戦闘となると……」

「奇遇ですねモモさん。俺もあの日のことを思い出してました。アフラマズダーはいやだ……！ アフラマズダーはいやだ……！ ああ！ 光が！ 広がってっ……！」

「……嫌な事件でしたね……」

なんやかんやとモモンガさんと会話しながらスケルトンの儀仗兵が立ち並ぶ中を歩いて進むと、第四層への入り口の前で立つ一体の影が目に入る。

一言で言えば宮廷に住まう貴族のような印象を受けるNPC。上から下まで漆黒のボールガウンドレスにカーディガンもヘッドドレスも同じように漆黒。しかしながら真つ白なフリルやリボンもあしらわれていて、深窓の令嬢という雰囲気纏っている。

「このNPCは？」

「シャルティアといいます。ペロンチーノさんの作ったNPCですよ」

「あのエロゲーマニアの、か。……はてさてこの子はどういうエロを詰め込んだのやら。見かけからはさっぱりだ」

「聞いた限りではなんかいろいろ詰め込んだそうですよ。俺の嫁って自慢してましたから」

「きつと俺たちじゃ想像もつかないような設定なんだろうな」

「……ありえますね。私も一部は知ってますけど、詳しい全容までは。さて、とりあえず“付き従え”」

モモンガさんが指示コマンドを発すると、シャルティアと呼ばれた少女は優雅に一礼してモモンガさんの後ろに若干の距離をもって回り込んだ。

……簡単なものでもいいからレーナにも組み込んでみようか。お辞儀の仕方や挨拶の仕方程度は備えていてもいいかもしれない。エロスにすべてを捧げた彼、ペロロンチーノのNPCへのこだわりと作りこみようを見た俺はどうやら感化されてしまったらしい。

おかげでやりたいことが一つ増えたよ。ありがとう、我が同志よ。意気投合から5分で“ケモミミは頭の上派”と“人間の耳の位置派”で袂を分かつこととなったが以前の熱意は素晴らしいものだったと記憶している。

『バカヤロウ！ ケモミミは頭の上にあるからいいんだろ！ 獣の耳、つまり犬猫のように頭の上にあつて然るべきなんだよ！』

『ニワカ乙。人間的な要素と獣的な要素が融合してるからこそ“そそる”んじゃねー

か。頭の上にただ乗っただけの要素なんぞおっ立ちもしねーんだよ。脳みそまでカビたか?』

『アアンっ!? ケモミミって言えば大概は頭の上についてんだ! 人間の耳の位置派なんぞ21世紀の中頃には消滅したようなもんだろ! つまり世界の潮流は頭の上派なんだよ! 格が違うんだよ格が! 消えろ、イレギュラー!』

『……いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。マツハで蜂の巣にしてやんよ!』

『たつちさん相手に持ちこたえたって話だが、中近距離戦ビルドの指揮官型に純遠距離超火力ビルドが負けるわけねえだろオ! 行くぞおおおっ!』

あの時は引き分けたが……先に切り込んだのはこちらなのだ。カウンター気味に“ライジングサン天地儘滅の太陽”を食らったが、俺の剣のほうが先に届いたのだから俺の勝ちだ。つまり“人間の耳の位置派”の勝利なのだ。アイツは頑なに認めようとしなかったが事実
は事実だ。

表層部とはいえナザリックそのものにかけられた防御を貫いて、第一層から第二層の中ほどまでブチ抜くあのスキルを最後の最後で直撃させられたのは痛かった。あれさえなければ引き分けることはなかったのに。

「ヤ、ハ、ハ」です」

「……」りやあスゴイ。屋内に空とはなあ」

地底湖と氷河を抜けて出た先、鬱蒼と生い茂るジャングルが目の前に広がる。木々で少し見えづらいものの、空を見上げれば青い空が広がって白い雲が流れ、風の流れさえも再現されているのか木々がざわめく音が聞こえてくる。

「ブループラネットさんの努力のたまものですよ」

フン、と自慢げに胸を張っているあたりモモさんにとつても思い出深いものなのだろう。しかしこれほどの規模で、過去の記録映像で残る程度でしかないジャングルの景色を再現してしまうのだからブループラネットという人物の熱意は素晴らしいものだ。ペロロンチーノのエロスへの熱意すら足元にも及ばないだろう。

「こりゃあ……たまげたなあ」

「ようこそ！ アンファイアトルム 円形闘技場へ！」

「建築はローマ風か。コロッセオを参考にしたんだろうなこりゃ。階層ごとに装飾や建築様式が違うし、素材も古代式のコンクリート造りだ。地下にはやはり巻き上げ機や出入口を完備しているんですか？ 水道橋から水を引いて模擬海戦ができるようなプールになったりする機能も？」

「えっ？ えー、そ、そこまでは、ちよつと……わからないですね」

「……そうでしたか」

「しかし、コロッセオって水が入っても大丈夫なんですか？」

「ああ、コロッセオは水道橋を利用して水を溜め込んでプールのように使うことができただ。模擬海戦が競技の一つとして行われていたらしいし。もう二千年以上前の話なんだけどな」

「そりゃあスゴイ！　というかさすがの知識ですぬレイさん。そんな知識を持つてる人なんてそうは居ないですよ」

「俺の家柄故だな。……人々が今みたいに知識と思考能力を奪われるよりも前に作り出された知識の蔵。それがあるからこそ今の俺がある。といつてもいかががわしい雑誌から学術書まで見境なしに集められたから整理すら終わってないんだけどな」

「確か……本でしたよね。あのすぐ破れるクセに傷みやすい、クツソ高い値段がする紙でできたやつ」

「今でこそ本と言えばデータだが、昔は紙媒体の本ばかりだったのさ。でも本はかさばるし重いから、次第にデータ化されたものが主流になっていったわけだ。その結果、第三次大戦後の世界では企業が世界中のネットワークとデータを掌握し、アーコロジー外に住む人々には知識という財産が分け与えられることがなくなった。

代わりに何が与えられた？　クソマズイと評判のエンジーバーと基本無料で楽しめるプロパガンダ付きのゲームと映画に、格安で受けられる病院くらいなものだ。時間が経つにつれ民衆から知性は失われ、先ほどの三つで生活するのが『当たり前』になり、

それが「普遍にして不変のもの」として新しい世代の「常識」になっていった。

地球の自然環境こそ人類にとって最大の財産だというのに、企業を牛耳る輩がそれを破壊してまで自身の豊かさの追求と保身に努めた結果が今のこの世界さ。

まあ、いずれ等しく地球上の生命も死に絶えるだろうさ。そのとき奴らは宇宙に進出して火星あたりをテラフォーミングして王様きどりでふんぞりかえつてるんだらうけど」

「ルイさん、そのへんで……」

「つと、そうだな……目先に釣らされたニンジンを追いかける馬どもが躍起になる前にやめておこう」

「真っ向から喧嘩売っていくスタイルやめい」

衆愚政治はクソだが愚民政策なぞもつとクソだ。何も考えない国民というのは扱いやすい駒ではあるが、それは国家にとっては害悪でしかない。治安は乱れ、教育はままならず、学問が発達することもなく、感情のままに行動するだけの国民を統制するなどできるわけがない。

だが巨大な複合企業であればどうだろう。食を支配し、エネルギーを支配し、メディアを支配し、医療を支配し、ネットワークを支配し、教育を支配し、そして最後には感情すらも支配し……そうやってヒトが生きる上で必要となるあらゆるものの根元を抑

えてしまえばどうなるか。

最早知識層以外はただの家畜同然だ。反抗する力などなく、知識も技術も奪われ、生きる力さえ奪われる。考えてもみれば、地球環境の悪化は彼ら企業にとつてはむしろ追い風なのだろう。食うため生きるためには企業にすがらざるを得ず、逆らえば死だ。

地球環境の改善を行う事業のほうが長く太く儲けられる事業だと俺は感じるのだが、企業は自然を……地球を食らいつくすことを決めたのが事実だ。いずれ尽きて儲けられなくなることがわかりきっている方策に投資する心理は俺にはわからないが、企業のトップはそうではないと判断したのだろう。完全にルビコン川を越えては引き返すなどできないと理解しているのだろうか？ あるいはそれすらも儲けに変える方法があるのか。

そのうち非知識層はロボット——それも人間以上の性能で人間より安い「維持費」で動く彼らに取って代わられる日が来るのかもしれない。要らなくなったら、その先にあるのは廃棄場だろう。大量の非知識層はグラインダーに放り込まれて家畜や動物園の肉食獣のエサとして駆逐され、一部の上流階級とそれを支える無数のロボットたちがこの星の主役となるのだろうか。

いずれにせよ死に絶える運命にある従属なぞ俺は御免被る。彼女と我が子の未来のためにと企業内で革新派の主要メンバーになるまで歩んできたのだ。……娘を爆破テ

口で失い、彼女が病で他界するまでは。

ふと、リアルでの娘にそっくりなNPCであるレーナに目が行く。俺はまたしても失うことになるのだろうか、それでも残すべきもの、残せるものがあるはずだ。そう確信している。

「——というわけで。聞いてました？」

「——大丈夫だ。行こうか、モモさん」

「ん？　じゃあ行きますか」

ギギギと軋んだ音を上げて闘技場の門が開かれる。目の前に広がる圧倒的な数のモンスターを観衆たち。観客席の下から上まで埋め尽くす大量のモンスターと、だだっ広い闘技場の真ん中に立つ数体の影が目に入る。

「さっきのおさらいです。ロールプレイしてみしましょう。それじゃー！」

「え？　ちよ、まつ」

即座に〈飛行〉^{フライ}を唱えて飛び立つと、後ろについていたシャルティアも続いてモモンガさんと飛び立ち、中央で待つ影の下へと向かっていった。後に残されたのは俺とレーナだけだ。

「諸君！　長らく待たせてしまつてすまなかつたな。此度は久々に我らがナザリックへの訪問者が現れた！」

んでもっていきなりの演説が始まった。おい俺にどうしろってんだよモモンガア！

「とはいえ侵入者ではない。諸君らをここに招集したのは彼に我らがナザリックの威容を誇示するためである！ 彼は我ら至高の四十一と対等の素晴らしい男だ。この私がぜひと我らがナザリックへ——アインズ・ウール・ゴウンへと望むほどの強者である！ 紹介しよう！」

突如、晴れ渡っていた青空が夜空へと切り替わる。どこからかスポットライトに照らされ、浮かび上がるのは俺とレーナだけになった。観客がモモンガさんだけとはいえぶつちやけ羞恥プレイじゃねーか！

「彼は——我が盟友！」

彼は——紅の帝王！
あか

彼は——吸血鬼の支配者！

彼は——彼こそは、かの高名なるギルド「紅き館」の第二席に座す者、ルイス・ローデンバツハである！」

いやそれ過去形だからな！ かつて在籍してたってだけだから！

『ほら、もうすぐ暗転とけますからエフェクトいっぱいスキル使ってください！』
『いきなりやれと言われてできるか！ ロールプレイってこんな面倒なのかよ！』

『いいからほら！ 暗転とけちやいますから！』

次第に暗黒の帳は鳴りを潜め、明るさを増す空とゆつくりと弱まっていくスポットライトの中でとりあえず武器の効果で使用可能になる、エフエクト付きスキルを選択。左腰の剣を抜き放つて地に突き刺すと同時に発動する。

へスキル 紅の湖^{ナトロン} 発動

空から明るい光が差し込むと同時に、剣先からジワリと溶けだすように赤い水が円形闘技場に広がる。外壁を蝕むように静かに侵食する水に触れる寸前、モモンガさんが貴賓席にまで飛びのくのわずかに遅れて、彼の後ろに居た数体のNPC——おそらくモモンガさんが言っていた守護者だろう——も続いて飛びのいた。

「なるほど……これが噂に聞くナトロン……触れば周囲のあらゆるものを無慈悲に石化させるという……」

「然り。この紅き湖上に立つ者は須らくその動きを止め、やがて石となり果て彫像と化す。そこに動くものは、ただ我が身一つのみ」

「フフ、ナザリック内にすら自身の領域を作り出してしまおうとは。流石は我が盟友……味な真似をしてくれる。叶うものなら貴公を従えてみたいものだが……」

「抜かせ阿呆^{あほう}が。従属なぞ御免被る！ 我が道を阻むならば万象悉く石と変え、粉微塵すら比較にならぬほどに打ち砕くのみよ！」

「クハッ！ で、あるな。やはり貴公は『我が友』だ！ 従属するなぞ貴公らしくない！ それでこそ我が友だ！ やはり対等の関係というのは心地よい！」

思いのほか言葉がするすると飛び出してくる。いや、俺は中二病なんぞかかっちゃいないんだぞ。ほんのちよっぴりノッてきたただけだ。所謂酔っ払いのやつてることと同じだ。

モモンガさんはなんかオーラ系のスキルまで発動して気合を入れ始めた。声のトーンは低いままだというのに、高揚した感じを含ませ手にしていた杖を掲げ始め——つておいまさかPVPやろうつてんじゃないだろうな。

「ん？ アイエエエエーッ!? いきなり石化食らってる！ ナンデ!? ナンデエ!」

「は?」

「えっ?」

「ちよっ！ この変な赤い水何なの!? 完全耐性貫通して時間経過で石化とか鬼畜じゃねーか!」

円形闘技場の片隅に目を向けると、もぞもぞとうごめく真つ黒なスライム的なナニカが赤い水を滴らせてのたうち回っていた。

「へ、へ口へ口さん！ あっ、スキル解除して！ ルイさん、スキルスキル!」

「あっ、ちよいまち」

「モ、モモンガさん！ ヤバイ！ 助けて！ 石化す——!？」

〈スキル 紅ナトロの湖 解除〉

「へロへロさあああーん!？」

「……その、すまん」

解除——するよりも早く真つ黒なスライム的なナニカが石像と化した。とりあえず状態異常解除の魔法ですぐ回復したが、中の人^{ナニカ}が落ち着くまでには十分の時間を要した。

「するとモモンガさんのフレンドさんだったわけですか」

「いやはや、驚かせてすみませんね。ルイス・ローデンバッハです。モモさんにはルイスさんって呼ばれてます」

「これはどうも。へロへロです。特に短くしてもあんまり意味がないのでそのまま呼んでください。

「いやでもマジで最初はビックリしましたよ。すわ討伐隊の再来か、と思いましたもの」

「すわ?」

「大変なことになったときに使う古語……だったはずですよ」

「感動詞っていうやつで、正確に言えば驚いたときや大事件でビックリしたときにつく

言葉ですよ。小説とか字面で使うことが多いから普通は言わない」

「なんでそんなの知ってるんですかへロへロさん。というかもっと詳しいルイさん……は知識層だったなそういえば」

「知識層じゃない。知識人だ」

「何か違うんですか？」

「大いに違う。けど……説明し始めたらしまらなさそうだからやめとく」

なんやかんやあつたものの、モモンガさんが懇切丁寧な説明をしてくれたお陰でへロさんからの誤解は解けた。防衛用のNPCなんかは解散させ、今では円形闘技場の外の木々の根っこに腰かけて雑談している程度には仲良くなれた。

お陰でいろいろとお互いについて知ることができたのは言うまでもない。彼がブラック企業勤めでデスマーチしていたこととか、つい昨日それが終わってログインしたとか。しかしまた二日後からデスマーチらしい。

「そういえば、そのNPCはルイさんのですか？」

「ええ。といってもレベル5ですけど」

「うーん……どこかで見たような気がするんですけどね……まあ可愛いNPCはいっぱい居るけど、その中でも特にレベル高い……」

「そりゃあウチの娘は最高にかわいいからな。つまり最力ワだ」

「ルイさん、その子娘設定してたんですか……」

モモンガさんがこちらを見る視線がやけに冷たい。いいじゃないか。失った娘の代わりなのだとしても、たとえあと半年で消える運命なのだとしても、この子は俺にとつて……彼女にとつて確かに娘だったんだから。

「なんだモモさん！ 可愛い娘を可愛いと言つても何も悪くないだろ！ 可愛いは正義だぞー！」

「そうですよ！ 可愛いは正義なんです！」

「黙つてろロリコンども」

「でも、可愛いだろ？」

「……かわいい」

ほらみるろ！ やはり俺たちの娘は世界一可愛いのだ。俺の膝の上に飛び込んでくる姿も、大好きなおもちやで遊んでいる姿も、嫁と一緒に本を読んでいる姿も……本当に可愛らしかった。ああ、とても可愛い娘だった。

「ルイさん、この子動かしてみてくださいよ」

「え？ あー、この子のAIつてそんなに弄つてないからあんまりとれる動きがないんですよ。基本的なモーシヨンくらいならできるんですけど——」

「もつたない！ それはもつたないですよルイさん！」

「お、おう」

「いいですか!? 今でこそユグドラシル以上の精巧なAIやモーションがあるゲームは多数ありますけど、このユグドラシルのモーション機能は手足の運びから重心移動まで自由にカスタマイズできるんです!」

しかもレベル100のNPCに施せばビルドの相性もあるとはいえプレイヤー相手に完封することだって不可能じゃないんです! それを生かさないまま死蔵させておくなんてもつたいたいにも程がある!」

「アツ、ハイ」

「よっし、私がやります。この子に見合うモーションを考えてAIである程度自由に行動できるように組み上げてみせます!」

俺はなんか勢いのままに押されていたが、へろへろさんは燃え上がるようなエモーションを出して立ち上がった。(?) 宣言しはじめた。大丈夫なのかコイツ。デスマーチ明けのテンションのまま居るんじゃないよな?」

「あの、大丈夫なんですかへろへろさん? 健康診断がレッド通り越してるなんて言っていたのに」

「……大丈夫かって言われるとちよつとキツイです。でも昔作った基本的なプログラムがありますし、それを流用して少し弄るだけで使えるようになりますよ。それに戦闘は

しないんですから、女の子らしいちよつとあざと可愛い動きとか純真純朴な子どもっぽ
い動きをいくつか考えるくらいですよ。そう大した負担にはなりませんって」

彼のその言葉が所謂「フラグ」であるということ、この時のモモンガさんも俺も氣
づいていなかった。

なんやかんやと慌ただしいナザリック訪問を終え、ユグドラシルワールドめぐりが幕
を開けた。最初に初心者向けのフィールドを選び、その中でもあまり人が寄り付かない
マップ……所謂過疎マップをピックアップした。

過疎というのは珍しいものではなく、経験値効率やマップ上に出現するエネミーの強
さやドロップアイテムなど原因は多岐にわたるが、それ故にあまりマップの探索がされ
ていなかったりする。ワールドサーチャーズというギルドがユグドラシルの探索を進
めてきているため多くの情報が網羅されているもの、知識で知っているのと実際に
マップを歩いたのではまったく印象が違うのだ。

そう、ユグドラシルはVRを用いた体感型ゲームなのだ。なればこそ本来の在り方に
立ち戻る意味も兼ねて、俺たちが「冒険」を選択するのは必然のことでもあったのだ。

「いやあ、解説ページを見る限りではほんとなんにも見どころが無いと思っちゃいたけ
ど、意外と発見が多いですよ。フィールドごとに鳥の種類が違ったり、花が咲いてた

り、湧き水なんかもありましたし。

ワールドサーチャーズが最初期に調べたきりのマップとはいえそこそこ解説に乗ってないものもありましたね。更新のときにしれつといろいろ追加されてるんでしょうか？」

「初心者向けのフィールドとはいえいろいろ凝ってましたね。それにこうやって狩りや稼ぎ関係なしでフィールドを歩くのは久々ですよねえ……ああ……VRとはいえ青空はいいものです……」

「俺なんて三年ぶりですよ。しかもこんな初心者フィールドを歩くのなんてそれこそ十年ぶりくらいじゃないですか？」

VRとはいえ天気は快晴。雲一つない空を背にした丘陵地に馬車が通れる程度には踏み鳴らされた街道が一本、延々と丘の上まで続いている。

このマップのエネミーの平均レベルはたったの15でしかないが、念のためにレーナには状態異常完全耐性装備セットにHPマシマシ装備を与えておいた。装備レベル制限にかからないように一般装備にエンチャントを施したりレベル制限無しの装備をかき集めて二日で作ってしまった。パーティーで狩るのは久々だったが、付け焼刃の連携とはいえ上級ダンジョンを踏破できたのはうれいことだ。

うちの可愛い娘、レーナは後ろをとととついでくる。手にはモモンガさんが持た

せてくれた余り物の身代わり人形（テディベアバージョン）がおさまっていて、背中には小物が取められるインベントリ系の拡張アイテムを装備することで収納量が低いNPCにありがちな「持ち物がいっぱいです」という状況が頻発するのを回避している。もちろん拠点に戻れば整理するが、何時間かフィールドを探索するだけなのでそこまで荷物が増えることもないだろう。

「そういうえげゲーム内の時間帯は昼間ですけど、ルイさんやレーナちゃんの種族ペナルティは大丈夫なんですか？」

「ええ。ただの吸血鬼ならへろへろさんの懸念通りに能力が低下するんですけど、俺は種族こそ異形種扱いですが吸血種のクラスを取ってるので亜人種に近い性能なんですよ。」

人間用装備や職業が使える代わりに異形種の耐性とか本来の形態なんか犠牲になってますけど、異形種ならではのデメリットも打ち消されてるんですよ。なので日光に当たろうがどうってことないんですよね」

「……もしかして、流れ星の指輪使ったんですか？ 吸血種って亜人種用の種族でしたよね？」

「使っちゃいました。……なのでシステム上は異形種扱いだけど内部的には人間種の近似値っていう不可解なことになってます。人間種ベースで異形要素をくつつけたみた

いなポジションになってるみたいで、回復は人間種同様、一部の耐性は異形種、装備は人間種と亜人種と一部の異形種っていうカオスぶりですよ」

「うっわー、プログラマーとしては考えたくもない！ バグの温床になっててもおかしくないじゃないですかそれ。運営——っていうか開発側に同情しますよ……」

くわばらくわばら、と真つ黒なスライム——へろへろさんはぶるりと体を波打たせて縮こまる。恐ろしい見かけの骨といい不定形の粘液といい、種族が種族だというのにそのモーシオンはいちいち愛嬌がある。

そんな他愛のないおしゃべりと共に歩き続け、だだっ広い草原が眼下に広がる丘陵地の頂上へとたどり着いた。敵がいるわけでもなく、ただ平穏が広がる山頂ににぼつんと佇む三つの石碑が目に残る。

「ん?」

「お?」

「むむ?」

三者三様のクエスチョンマーク。赤いハテナと緑のハテナに黒いハテナのエモーションのアイコンが同時に並んだ様子はきつと見る人が見ればツツコミをすることだろう。

「なんですかねこれ?」

「さあ？ モモンガさん、解説ページに載ってます？」

「んー……それっぽいのは見当たりませんね。更新日が5年前なので……何かのパッチで新しく追加されたんですかね？」

「ふーん。とりあえず調べますか。どうせ初心者用フィールドだからダンジョンってことはないでしょ」

特に警戒もなく近づいて石碑の字面を眺めてみると、「アーキオロジスト 考古学者」のパツシブスキルである〈言語解読〉が発動して象形文字の字面が漢字かな交じり文に形を変える。

「えー、狩人のオリオン、この地より魔犬の親子を走らせる。魔犬の親子は二手に分かれ野ウサギを追い立て、オリオンが弓矢を射るも一角獣に此れを阻まれた。野ウサギはアルデバランの導きによってエリダヌスへ無事に逃げ込んだ」

「つまり……！ どういうことなんですかへ口へ口さん？」

「いや、わかんないです。ルイさんはどうです？」

「推測でいいのであれば一応あります。まず最初の文は簡単だと思います。ここにオリオン座の三連星になぞらえた石碑があるのですから、スタート地点であることです」

「どう考えてもその通りですよ。というか石碑がある時点でそう思います」

「ここから先がいくつか解釈によって違う可能性があります。言葉通りに解釈して天体になぞらえて考えると、ここから空を見上げてオリオン座、こいぬ座、おおいぬ座、う

さぎ座、エリダヌス座と星を追って進むことでゴールにたどり着くんだと考えられます。もしくはエリダヌス座のほうを目指して進むだけでいいかもしれません。

二つ目にこれがクエストである場合。このフィールドを前もって調べたところ、フィールドのボスにオオカミ系のボスがいるエリアがあるのはわかっています。その地点と今いるこの場所を星図に当てはめて、エリダヌス座が位置するだろう方角、あるいはさぎ座がある場所へ進む場合です。

三つ目ですが、この付近にある川をエリダヌス座として当ててうさぎ座との位置関係をはじき出してアルデバランが位置するだろう方向へ進むパターンです。まあ、魔犬に追い立てられたという一文とエリダヌスへ無事に逃げ込んだという一文があるあたり二番目が一番可能性としては高いんじゃないでしょうか。

真ん中の一角獣のくだりはフレーバー的なものでしょう。一角獣座はあまり目立たない星座ですから、そこまで重要視しなくても大丈夫です」

ポカーンという様子でこちらを見る(?)異形が二つ。顎を半開きにして中空に目線を飛ばす骸骨と、もぞもぞと波打つだけのスライムがクエスチョンマークを浮かべているだけだ。まあスモッグと分厚い放射能雲のせいで綺麗に晴れ渡った空を見上げるなぞでできやしないし、興味を持たなければ知ることもないのだから仕方がない。

「あー、つまり空に浮かぶ星々に従って進む方法と、天体図とフィールドの地形やエネ

ミーの配置を当てはめて割り出す方法と二種類あります」

「……なるほど、テンタイズっていうのと照らし合わせるんですね」

「セイズ、って何かよくわからないですけどとりあえずやり方はわかりました」

……まあ興味がない人は知らない単語であるのは違いはないだろう。特に情報というものが統制されている今の社会では知る人は少ないだろうし、この反応はある意味では普通のことだ。

とそんなことを考えているとピンク色のフレームに草花をあしらったポップでかわいらしいメッセージボックスが表示された。見たところクエストの通知らしく、tipsまで表示されているあたりかなり親切だ。

〈探索クエスト “ちいさきもの” 参加メンバー 4/8人 制限時間：なし

ミッション進行度 1/5 探索目標：ウサギとオオカミを探しだせ！

tips：丘のふもとから西側はオオカミの狩り場だ！

「おお、すつごい親切。上級のフィールドじゃまず見ないですよこれ」

「へロへロさん、あくまで初心者用のクエストですからクエスト関連のシステムについてのチュートリアルみたいな感じなんですよきつと」

「なるほど、このヒントのお陰で絞り込めた。おそらく順を追わないとたどり着けないタイプです」

「それじゃ早速行きましょう！ 簡単とはいえ未知のクエストですよ！ おそらく発見者名が残るはずですよ！」

意気揚々と駆け出すオーバーロードを追いかけて丘を下ると少し開けた雑木林が待っていた。針葉樹の木々が立ち並び、苔むした岩や倒木が時たま目につく様子は林というよりも原野と呼ぶべきだろう。

ちよど中央付近まで来たところで、前を進んでいた骸骨がピタリと足を止めたのを見て剣を抜く。

「いた！ 6匹ほどのうさぎの群れですけど……なんですかねアレ？」

「何かのモンスターみたいだ……一角獣……ユニコーンっぽい見た目ですね」

「とりあえず行きましょう。ユニコーンなら問題ないですし」

少し開けた木々がまばらな場所まで横たわるユニコーンらしい真っ白な獣。その近くに行こうとして不意にアバターの動きがとまり視界が暗転する。

苔むした岩場を乗り越えて真っ白な獣へ飛び掛かる大小二つの灰色の影。一目散に逃げ出したうさぎたち。気づいたユニコーンが立ち上がり角を向けた——その直後に喉元へ大きなオオカミが食らいつき、小さなオオカミがユニコーンの足をかみ砕いた。

息絶えたユニコーンからこちらへと向き直る二体のオオカミ。その姿がパンアウトして、元のアバターからの視点に戻ったところでモモンガさんが声を発した。

「ムービー付きですか。ということは一——」

「ええ。クエストが進行しました。内容が二体のボスの撃破になってます」

「二人とも来ますよ！」

〈スキル アナライズ “解析” 発動〉

「調教師^{テイマー}」のスキルでエネミーの情報を取得。職業レベルが低いせいで大した情報はないが、基本的な部分なら丸見えだ。それぞれ独立しているらしく、HPは大きいほうが高く小さいほうが低い。攻撃力や防御力も同じ感じだ。しかし小さいほうは回避力バフと毒・疫病デバフを付与する通常攻撃を持つらしい。

「大きいほうがタフですがこれといって難しいことはありません。レベルも30なのである程度の初心者のパーツィーなら倒せます。小さいほうは柔らかいですが毒や疫病のデバフ持ちです。しかも回避バフでなかなかの回避率になりますよ」

「了解です。じゃあいつちよ行きますか！ とりあえず魔法〈集団標的^{マス・ターゲット}〉か——の——

……魔法〈火球^{ファイヤーボール}〉！

モモンガさんが鼻息荒げに無慈悲にも「集団標的^{マス・ターゲット}」まで使つて低位階の魔法をぶっぱする。そこそこの速度で飛んで行った火炎の玉が、前に出てきた大きいオオカミに直撃し敵を消滅させる。同じように小さいほうへ同じ火球が飛んでいくが——あつさり岩を足場に飛び越えられて火球は苔むした岩を消滅させるに終わった。

「フアツ!?」

「よっ、避けられてやんのー! レベル30にマルチロツク使つてんのに魔法を避けられるオーバードとか草ア! ヒヒツ、お、お腹がよじれるう!」

「ひっ、必中効果なしとはいえ……ぷぷっ、これはひどっ、ククツ!」

「だまらっしやい吸血鬼モドキとオイリースライム! たまたまです! こんなのためただだから!」

大爆笑する漆黒の粘液とあたふたしながら〈魔法の矢〉で小さいほうを仕留めるオーバード。かくいう俺自身笑いをこらえるのに必死で腹が痛い。

片手間で消えていった二体のボスモンスターのドロップアイテムを笑いをこらえながら回収し、次のクエストを確認する。

「えーと、次はうさぎを追いかけみたいですね。モモさん、魔法の矢は撃たないでくださいね。うさぎが死んだら失敗扱いされるかもしれないんで……ぷぷっ」

「おっし、ルイさんフボールン失墜食らわせるからちよつと動かないで。動くなア!」

「まあまあモモンガさん。渾身のドヤ顔ファイヤーボールはかつこよかったですよ。ファイヤーボールは……ぶふっ!」

チクチクとモモンガさんをイジリつつ追跡対象となつたうさぎを探し出すと、ぴよんぴよんと走って逃げていくうさぎを追いかけて、青空の広がる野原をピクニツク気分

歩きながら川べりにまでたどり着いた。

「んん？ 姿が消えましたよモモンガさん。魔法の矢使いました？」

「へロへロさん、〈魔法最強化〉からの〈内部爆発〉か〈現 断〉あたりがお望みですか？」

「冗談ですよ冗談！ というかマジで見失ったみたいなんですよ。ちよつと上流のほう見えます」

「そういうわけなんでそのへん探してみてくださいよモモさん。俺は下流のほうを探してみます」

「……わかりました」

ちよつといじけつつも探し物をし始めたオーバーロードの背中はどこか哀愁を帯びたような寂しさを感じさせるが、〃回避率バフがある〃と言ったのに必中ではない〈火 球〉を撃つたのだから仕方がない。

「あ……へロへロさん！ ルイさん！ 見つけましたよ！ ここに穴があります！」

そうこうしているうちに何やら見つけたらしい。モモンガさんの喜ぶ声が聞こえたほうへ向かっていくと、モモンガさんが興奮した様子で手招きしていた。傍目から見れば死地へ呼び込む亡霊の王という具合だが、エモーションはガッツポーズなものだから喜び舞い踊る骸骨が居るといふ不思議な光景だ。

モモンガさんが見つけたのは小さめの、子どもが一人入れるかどうかという小さな木の洞だった。もしかしてホビットやドワーフ系が居ないと入れないとか……だったりするのか？

「どうします？ 入れそうにないですよこれ。へろへろさんは不定形だから入れそうですね」

「ですね。以前不定形種族なのを生かして狭い通路を潜り抜けてトラップを解除するギミックがありましたからそういう感じのチュートリアルなんでしょう」

「ダウン・ザ・ラビットホールならぬスライム・イン・ザ・ツリーケイヴか」

「……なんでですかそれ」

「へろへろさん、不思議の国アリスって童話ですよ。元気いっぱいの子のアリスちゃんは服を着た白うさぎを追いかけて穴の中へ落っこちたつてくだりのアレです。ちなみに我が社の文学作品アータバंक内で無料で読めるので暇つぶしにどうぞ」

「ちやつかり実家の宣伝してやんの」

「うっさいぞ骨。19世紀の挿絵付きをスキャンしたレアものなんだから宣伝して当然だろ。我が社の収集能力なめんなよ」

「こんな狭い穴に入れるってことは……つまりアリスちゃんはスライム種だった……むむむっ？」

「いいから入った入った。どうせエンカウントしても低レベルなんだから、レベル100なら余裕でしょ」

「なんか納得いかない」

ぶつぶつと呟きながら、じゆるじゆるというなまめかしい効果音と共にへろへろさんが木の洞へ入り込んでいく。へろへろさんが無色透明じゃなくて黒色でよかった。ペロロンチーノあたりなら “まるでオ○○に入っていく○○○ヨンみたい” とか言いそうだ。

「んー、結構奥行きが……いやスイッチがありますね。起動しますよー」

へろへろさんの言葉が聞こえた数秒後、青白い光を放つ幾何学模様の円陣が浮かび上がる。直径にして5メートル近くはあろう六芒星^{ヘキサグラム}がゆつくりと回転しながら佇む光景を目にしたモモンガさんが呟く。

「フム、別の場所への転送装置^{ポータル}でしょうか」

「かもしれないね。へろへろさん、戻ってきてくださーい！」

「りよーかーい！」

「今のうちに装備チェックしちやいましょう。いきなりボス戦つてこともありえますし」

「おっし。それじゃコレでいくか」

普段使いの装備品から汎用の対ボス用装備へ切り替える。見た目にはボロい軽装の鎧一式に見えるものの、隠密性を高めるために金属同士が干渉して音を鳴らさないように間隔をとり、つや消しや隙間に革鎧と布を巻き付けるなどして光を反射しないように視認性も下げられている。そこに属性耐性を向上させるフード付きのローブを纏えば気分はVRダークソールドだ。

武器は刀身にフラーが入った大振りのツーハンドソード。刀身だけでも自らの背丈ほどもあり、柄や鏝も実用一辺倒の無骨な一品だが、破壊不可のエンチャントを持ち、炎属性の補助魔法が付与された際に攻撃力と防御力にボーナスが発生するエンチャントを備えた逸品だ。普段使いの神器級武器であるロングソードに比べれば格落ちするレジェンド伝説級だが、高い基礎攻撃力と防御スキルを突破する性質のある大剣として重宝している。

「……それ、本気装備ですか?」

「そうだけど?」

「なんていうか、地味ですよね」

「わかんないかなあ、この実用一辺倒で無骨なすばらしさ。使い込まれ補修され、歴戦を経てなお健在という傷だらけのカッコよさ!」

「んしよつと……おお、なんかカッコイイ剣士がいる!」

「ほら！　へろへろさんも理解してくれてる！」

「流石はフ○ム監修の装備品つてところですよ。消えかかって最早見るのも難しい彫金の細工なんかまで再現されてるんですから、これほど作りこまれた装備品というのは頭が下がる思いですよ」

「そんなもんですかねえ……伝説や神器ならもうちよつと派手でもいいと思うんですけど」

「いやいやモモンガさん、パツと見た感じの印象と性能のギャップがいいんですよ！

どこにでもありそうないかにも古臭い使い込まれたボロ剣が実はエクスカリバー級のトンデモ武器っていうこの落差がいいんですよ！」

「見た目がアレっていうなら外装がラ○トセー○ー風のなんかもありますよ。中身は木刀ですけど」

「それは別の意味でギャップありすぎイ！」

しばらく装備品についてのアツい語りが入ったものの、装備を整えると三人でポータルに向き直る。先ほどまでのコミカルさは鳴りを潜め、モモンガさんもへろへろさんも初心者用のクエストとはいえボスに臨む際の姿は歴戦のそれだ。

「では戦闘の指示は僭越ながら私モモンガが務めます。まずルイさんが突入し、転移先の安全を確認をしてください。低レベル帯ですから出現地点付近に少数の敵がいる場

合は敵を殲滅してください。数が多い場合は私が入って安全地帯を作ります。確保したら連絡しますので、ヘロヘロさんはレーナちゃんを連れて入ってください」

「モモさん、万一ヤバいのが居たら？」

「その時は敵を誘引して出現地点から引きはがしてください。三人同時に突入しますので、ヘロヘロさんはまずルイさんのサポートに回ってください。しばらく耐えてもらうことになりますけど、即座に広域化と最強化させた^{リアリティ・スラッシュ}へ現断を叩きこみます」

「了解した」

「了解ですよー」

意を決してポータルに向かって飛び込む。視界が真っ白に染まり、それが収まったころには草原などどこにもなく、ただ暗雲が立ち込め落雷が降り注ぐ荒野が目に見え込んできた。左右を見渡してみても地平の果てまで続く荒野と雷雲があるばかりで他には何も——!?

『二人とも』

『はいはい』

『どうしましたルイさん?』

『今いる場所は安全だ。でもいいか、何も言わず聞いてくれ。……特大級のやべーのがある』

遠目に見えるのは馬のようなモンスター。青白い体色に一本角の個体。そして遠く離れた位置からでも目に見える電光との煌めきが畏怖を想起させる。

『とりあえず入ってみてくれ。……そうすりやわかる』

『……了解。いきましようへ口へ口さん』

光の粒子が集まるようなエフェクトを伴って三人が姿を現す。キョロキョロと見渡したかと思えば俺が言っていたものが目に留まったのか二人の動きが固まった。

「ふっ、ふざけんな……！ よ、よりにもよって『麒麟』相手なんて初心者クエストどころか最上級クエストじゃないですか！ 誰だよ一角獣の影が薄いつて言ったの！」

「アア、オワツタ……！」

麒麟、といえど何が思い浮かぶか。伝説上の存在で、所謂『龍』に属する存在だ。ユグドラシルでは『麒麟降誕』というイベントで出てきたエネミーボスで後に常設化されたが、当時はソロプレイヤーの壁となったヤベーやつというのが我々の認識だ。

超広域に麻痺の状態異常をばら撒き、圧倒的な速度でフィールドを駆け巡りつつ高火力かつ耐性貫通の雷系スキルと魔法で攻撃を行ってくる相手だ。龍に属するせいで状態異常への耐性がべらぼうに高く、こちらの雷耐性と状態異常耐性を万全にして速度低下デバフを累積させないと当てることさえ難しい。物理防御力こそ並みのものしかないが、火力と速度に振り切ったステータスは麻痺で動けなくなった相手に無慈悲の雷撃

を叩きこみ、耐えられても雷属性の持つ多人数へのチェイン属性とヒットストップの重さで足を止められて間合いを取ってくるなど戦い方が非常にいやらしいのも多人数PT討伐が推奨された理由でもある。

そんなヤツ相手に一人で挑めばどうなるか。属性耐性と麻痺対策は必須な上に相手が速すぎて攻撃は当てられず、近寄りたくても遠距離の魔法やスキルで動きを止められた間に高速で回避されて距離は開く一方。しかもその距離から運よく近寄れたとしてもフィールドに効果を及ぼすスキルで時間経過のダメージと防御デバフをもらい続け、ヒットストップをもらおうものなら一瞬で懐に飛び込んできて放たれるボス用スキル「聖龍剣」で一刀両断される恐怖が常に付き纏う。

これが複数人による討伐なら遠距離物理火力——主に弓アーチャー手系の火力で押し込み、前衛は盾として必死に耐え続け、後衛が回復とバフを撒き続けるだけでそこそこの線までいけるのだが、ソロプレイヤーにとっては地獄絵図だろう。やはり数は力だ。囲んで棒で叩くのは最強の戦術なのだ。実際腕利きぞろいのアインズ・ウール・ゴウンでさえ1500人を前に壊滅寸前にまで陥ったのだ。これが3000人となれば陥落は間違いないだろう。

「……どうします。野良で援軍募りますか？ 正直私やルイスさんみたいな中近距離職じゃ踏み込むのはマジの危険域ですよ」

「それですよね。耐性装備とヘロヘロさんのデバフで速度を落とすことはできませんけど、如何せん火力が足りません。前に出るにしても、ルイさんのビルドじゃ長時間は耐えきれませんし」

「だよな……募集するのが一番早いかな」

見た目には先ほどのユニコーンのように見えるが体表には龍らしく青白いウロコが見え、特徴的な一本角には逆るように電光が煌めいている。輝きを放つ鬣たてがみは真つ白で嵐の中でも輝いていて幻想的ではあるが、それを持つのは圧倒的な暴力の権化と言える存在だ。

「……………」

何かおかしい。距離があるはずなのにどうしてこうまでハッキリと麒麟だとわかったんだ？ 電撃を纏うモンスターなんて他にも居るし、なんならユニコーンだって電撃系の魔法を使える。落雷が発生するフィールドで視界が少しばかり悪いものの、ここまですべて正確に視認できるということはそんなに距離は開いていないはずではないか。

「……モモさん、ヘロヘロさん、俺が少し前に出ます」

「何言ってるんだこいつ」

「ルイスさん、それは流石に無謀すぎますよ」

「何か変だと思いませんか？ 麒麟との距離はそこそこあるはずなのに、俺たちはハッ

キリと目の前のヤツを「麒麟だ」と断定できた。細かなディテールさえ見えるほどにくつきりと見えてるんです」

「……そう言われると確かに何か変ですね。普通なら遠距離のエネミーやオブジェクトはボヤけが入るものですし、何かしらのギミックが働いてるんでしようか？」

「モモンガさん、一度探知系スキルや魔法で探ってみましょう。何かしらのギミックが働いているのなら原因が特定できるかもしれません。転移して目の前に最上級クラスのエネミーとなると焦るのは当然です。もしかしたらこの麒麟そのものがブラフである可能性もあります」

「へロへロさん……そうですね。そういう可能性もあり得ますね。〈感知増幅〉センサーブーストパラノーマルイントウイションセンスエネミー〈超常直観〉シースルー〈敵感知〉ディテクトマジック〈看破〉〈魔法探知〉……やっぱりおかしいですねこれ」

「どうでした？」

「へロへロさんの懸念通りです。目の前の麒麟アレは実体がありません。おそらくただの幻影です」

「つてことは他にこの状況を作り出してるヤツが居るわけだ」

「ええ。あちらの方角です」

モモンガさんが指差した先にはひととき大きな岩塊が佇んでいた。十階建てのビルはありそうな岩塊の頂上には雷雲が蠢いて時々落雷を発生させているのが見えた。

「あの頂上付近で反応がありました」

「なるほど。んじやま偵察に行ってみるか……（フライ）へ飛行」

真つ黒な雷雲に飛び込むとチクチクと刺すようにHPが削れる。吸血鬼の回復能力ですぐに満タンに回復するものの、雷属性への耐性を高めていてなお貫通してくるのだからフィールド魔法はいやらしいものだ。

「よつと……さて、敵は……っ!？」

着地、と同時に眼前に迫る蒼白の閃光。光を放つ一本角を振りかぶった麒麟がその一撃を振り下ろし——パリン、という軽い音と共に弾かれた。

「ええ……」

とりあえずコレをどう説明しようか。そう考えているうちにもパリン、パリン、と攻撃が行われる。しかしその度に麒麟は弾かれて吹き飛ばされ、なおも立ち上がって攻撃を加えてくるのをしり目にメツセージを送る。

『あー、モモさん、ヘロヘロさん……上にあがってください』

『大丈夫なんですか?』

『ハイ、もう、危険ではありませんでした』

『……そうですか?』

しばらくして雷雲を突き抜けてやってきた二人は目の前の麒麟を見て呟いた。

「……ちっさー！」

「……かわいい！」

「ですよー！」

今俺に向かつて角を振りかぶって叩きつけているのは麒麟だ。ぺちぺちと叩きつける度に俺の〈上位物理無効化Ⅲ〉で弾かれてはいるが、こいつは麒麟だ。——ただし小さなめのポニーサイズである。

数が増えたことでスキルを発動したのか、咆哮（「ぎやうー！」）という可愛らしささえ感じるヤツ）をあげて挑んでくるがそれでも突破できずにいる。なんだこの癒し。

「まあ、本来の麒麟がレベル100の複数人PT推奨なのを考えてレベル帯に当てはめればこうもなる……なるのか？」

「モモンガさん、この子すっごいじゃれついてきますよー！」

「いやそれ攻撃ですからねへロへロさん」

へロへロさんへ標的を変えたのか、麒麟はその牙の生えそろった顎あごで以って噛み砕かんとしているが、へロへロさんのプニプニスライムボディの前に噛む砕けずにいる。噛むたびにうのようによと形が変わるへロへロさんはなんでもないうようにウキウキとしているが、麒麟のほうは必死だ。

「……とりあえず情報は要るな。〈解析アナライズ〉つと」

見たところ体力も攻撃力も速度もレベル30相応というところだろう。スキルがどうなのかはわからないがフィールドやクエストに見合う弱体化はなされているらしい。

「……捕獲可能、だと……?」

「——マジ?」

表示されたステータス画面に映し出された驚愕の文字。イベントで出てきたモンスター（ただし大幅に弱体化済み）をタイムできるというのは非常に珍しい。クエスト欄を見ると情報がいくつか更新されていて、tipsには「体力を一定以下にする」というヒントが出ていた。どうやらマジでタイムできてしまうらしい。モモさんまで素のトーンで問い返すほどだ。

「となると逆に困る。オーバークルもいいとこだぞ俺たち」

「そうですよねえ」

「魔法詠唱者の私でもワンパンできるレベル帯ですもんね。今時こんな低レベル帯のPCなんて居ないでしょうし……あつ」

「……モモンガさん、まさか」

「レーナちゃんに装備を持たせてしばらく殴ってもらおうという方法が」

「オイイモモンガア!? 娘を危険なヤツに当てられるワケねーだろオ!」

「で、できないワケではないですよ! 幸いにも耐性バッチリだしHPも十分あります

し！ 武器さえあればあとは私たち三人のバフをフルに使えば！」

「だ、大丈夫ですよ！ ルイスさんが挑発スキルで常にタゲ取りしてれば流れ弾はいきませんから！ それに身代わり人形だって装備してますから！」

「……や、やるしかないのか……」

愛しい娘レーナとミニマムサイズの麒麟との不毛な戦いが始まった。相手はレベル30という、レベル5のレーナにとつては空の上の存在だ。ただしその差を埋めるべくモモさんからはありつたバフと装備レベル制限や職業制限のない杖でそこその攻撃力があるものを拝借し、ヘロヘロさんの全力のデバフ（ダメージを与えないものに限る）を麒麟に付与し、俺がタゲを常に取りつつ眷属のコウモリでレーナを護衛し、それらの愛を一身に受けたレーナがひたすらぺちぺちと殴るといってもない接待塩試合になった。

「……減ってる……減ってる……」

「あ、バフ撒きますね」

「カワイイ……レーナ、カワイイ……」

「モモンガさん、ルイスさんのSAN値って回復できますか？」

「無理です」

「アハハ……カワイイナア……ナデナデシタイナア……」

精神をすり減らしながら耐えること十数分。どうにかしてHPがボーダーラインにまで減ってきたのを見て即座にスキルを発動する。

「^{テイミンク}調教」

今まで必死に俺を殴り続けていた麒麟の動きがピタリと止まる。それと同時にティム成功のメッセージボックスが表示され、麒麟のステータスの全容が表示された。

「お、おわった……」

「お疲れ様でした」

「おつおつですー」

「お疲れ様です。レーナも本当によく頑張ったなあ……ご褒美のプリンを用意しなくちゃ」

「クエストクリア！ おめでとうございます。」

「あなたたちはクエストの第一発見者としてクリア条件を達成しました！」

さらにメッセージボックスが表示され、初回クリアが達成された通知が送られてきた。どうやら本当にモモさんが言った通り、俺たちがクエスト発見者で初のクリアだったらしい。

「クエスト発見者にあなたたちのパーティが記録されます！」

発見者パーティ名 “骸骨の粘液煮込み吸血鬼添え”

「ひつでえパーティー名」

「もうちよつとマシなのにすればよかつたかな……」

「考えたのお前だろ！　ここで後悔すんなよ！」

「まあまあ、ルイスさんもモモンガさんもスクシヨ取りましょうよスクシヨ！　せつかくの初クリアなんですから！」

いそいそと麒麟の背にまたがった（？）ヘロヘロさんに促されて、麒麟を囲むようにして集合する。真ん中には今回のMVPであるレーナを立たせ、分厚い雷雲が薄れて陽射しが差し込む荒野を背景にスクリーンショットを撮る。

「んじゃヘロヘロさんもモモさんも、準備はいい？」

「いつでも！」

「オツケーイ！」

「んじゃ……さん、にー、いち……ピース！」

「スキル〈絶望のオーラV〉！」

「スキル〈闘気解放〉！」

パシヤリ、と切り取られたスクリーンショット。晴れ間の射す荒野をバックにちつこい麒麟の上に乗ったスライムがとぐろを巻いて明鏡止水の如く黄金の輝きを放ち、その傍らでは豪華なローブ姿の骸骨がムンクの叫びのように顎を目いっぱい開いて真っ黒

なオーラをまき散らしながら両頬骨に骨の手を添えてのけぞっている。そんな違和感丸出しの中に俺とレーナが普通に中央で映っている様子はさながら出来の悪い心霊写真かB級映画のワンシーンのようですらある。

「つぶぶ、くつそ！ これは卑怯だろモモさん！」

「へろへろさんのほうがアウトでしょ！ これはどう考えてもアレじゃないですか！」

「いやあ、一度やってみたら面白そうだと思ってたんですよコレ」

「後光を受けて光り輝くアレとかもうわけわかんないんですけど」

「神々しいはずなのに……どう見ても感動できない！」

新しい思い出がまた一つ。例え泡沫と消えるのだとしても、これは俺たちが作り上げた思い出だ。ゲームの中で生まれたものだけけれど、これは確かに俺の、レーナの、モモさんの、へろへろさんの、大切な思い出なのだ。

黄昏

「お疲れ様でしたーっ！」

「おつですー」

「お疲れ様でした」

ナザリック地下大墳墓へ帰還すると、最近ようやく見慣れてきたナザリックのNPCたちが今日も頭を下げて我々を迎え入れてくれた。その傍らには我が娘、レーナの姿もあるのだが彼女は彼女で淑女然としたカーテシーを披露してくれる。もちろんモモさんとヘロヘロさんに対してであって、それが済めば駆け足で俺の右隣、いつものレーナの立ち位置に収まるのが恒例になっていた。

ワールド散策をせずに高難度ダンジョンを攻略することになったのはひとえにモモさんやヘロヘロさんへの感謝と拠点代わりに使わせてもらっているナザリックの維持費を稼ぐためであるのだが、実際のところヘロヘロさんと俺のプレイヤースキルの錆落としても兼ねた修練にもなっている。

ナザリックは既存のダンジョンを攻略したことでギルド拠点として使用可能になったものらしい。それを41人で大幅な改造を施し、1500人の侵攻を食い止める堅固

な要塞へと仕立て上げたその労力は大変なものだろうことは想像するに難くない。

ギルド拠点を維持するというのは思いのほか大変なものであるが、ナザリックはその巨大さと仕掛けられた機能や設備故に維持費が嵩む。つまりユグドラシル金貨を大量に消費するわけである。

設備の維持や修繕というのは往々にしてカネがかかるものだが、大量の金貨を集める労苦に見合う見返りも大きいものである。例えば拠点内で武器や防具の製造ができるようになったりする、或いは拠点内でいくつかのアイテムや希少な素材が生産出来たりするなど、ユグドラシルをプレイするにあたって大きなメリットがもたらされる。他には俺の自宅——白の館のように居住空間としての機能やアイテムを保管する倉庫機能を持つていたり、コックなどの職業がある者は調理場を設置することなどできるようになる。

その利便性故にユグドラシル最盛期にはギルド拠点や資源を得られるダンジョンの争奪戦など、ギルド間抗争が日常茶飯事にして一大イベントのような時期もあったわけだ。

「さーて、それじゃ清算しちやいましょうか。今回はレアドロップもありますし期待できますよ！」

「久々にアルフヘイムの天空回廊に行きましたけど、まさか神器級の刀が落ちるとは

ゴッズ

ラッキーでしたねモモンガさん。これで少し維持費に余裕ができそうです」

「しっかりと買い取らせていただきますよオ、うえっへっへっ」

「……相変わらず刀剣マニアですぬルイさん」

俺が居なかった三年間の間に行われたアップデートで実装された新しいドロップ装備を一回の攻略で手に入れられたのは僥倖と言わざるを得ない。鑑定したところ基礎攻撃力の高さに加えてクリティカル時のダメージ量アップとカウンタースキルでのダメージアップとそこに攻撃速度上昇が効果として付属している。具体的に言えば3割マシで。

しかも非実体存在……所謂霊的存在に対してカルマ値に依らない特殊強化スキルが付与されていて、物理攻撃が命中しない霊的種族に対して近接物理を仕掛けられるのはうれしい点だ。

「コイツの外装、ラ〇ト〇ーバーにしてもいいですかね？」

「9700万支払ってから振ってください」

「えっ、モモさんこれってマジでそんなするの？」

「相場は億越えです。過去のオークション出品ログを見えますけど、出回ってる本数自体はそこそこあるみたいなんです。が攻撃速度上昇付きは軒並み億越えしてますね」

やべーのが出た。何が何でも欲しいのは確かだが億越えしてくるとお財布が厳しく

てハード。

「ちなみにダメージ量アップがついてるとさらに2から3千万プラスらしいです」

「ヒャー」

「ひゃー」

やべえ。手が出せない。っていうかへろへろさんまで驚いてるんだけど。……やむを得ない。万一作りたい刀ができたときに使おうとおもっていたアレでいこう。

「……コレじゃダメっすかね」

「おおっ！ ヒヒイロカネ！ しかも5個もー！」

「ヒヒイロなら最悪エクステンジボックスに入れば金貨2千万枚が保証されますから妥当なラインですね。これで受けましょう」

「っしやあ！ 早速振るか！」

「ちよつ、素のまままで装備してみてくださいよ。スクシヨくらいとっておきたいですし」
「了解。じゃ装備するぞ」

モモさんから受け取った刀を手にし、朱色の漆塗りの鞘からすらり、と抜き放った刀身の刃文はもんはシンプルすくはな直刃で長さがおよそ80センチと大太刀ほどはある。華美な藤の花を象った鰐うしほといいいい装飾すくはといいいいその佇まいは見事なもので、観賞用としてもいい見栄えをしている。

「『暁』……これは良い。良いんだけどなあ……」

剣を掲げ上段で構える。切っ先を地に向けて下段に構える。正面に剣を立てるようになった八双の構え、そして脇構え、正眼の構え。さらに目線の高さで刃を水平にした霞の構え。

いずれの構えをとつても美しい。だが、俺の好む感じとは違うという感触がぬぐえない。やはり実用を意識した見栄えのほうが好きだ。

「うーん、いいんだけどやっぱ派手に感じるんだよなあ」

「いやあ神器級ならこれくらい見栄えがよくないと。やっぱリアリティ相応の感じがいいですよ」

「私としてはモモンガさんよりルイスさんの意見のほうに納得ですね。実用、だからこそその美しさっていうのは好きですよ」

「正直『素敵性能』^{ステキ}に振り切った装備もいいんですけど、そういうのって往々にして性能が微妙だったりするんです。こいつは性能もいいんですけど……うーん……普段使いたとやっぱり目立ちすぎるかなコレ」

「変えるとしたらどれにするんですか？」

「量産品の刀のビジュアルにするか、拵えをつや消しの黒で統一して派手さを消します。それかある種の極まったビジュアルにしますね。例えばコレとか分類はロングソード

ですよ」

コンソールを操作してアイテムボックス内に保管してあった二線級のロングソードを取り出して装備する。手に現れたのは「ロングソード」という一般的なイメージとはかけ離れた見た目で、ヘロヘロさんもモモさんも啞然としている。

「……………釘バットじゃないですか!」

「うわ。普通のロングソードより威圧感がすごい……」

ところどころが赤黒く変色し、釘は若干の赤錆びた鈍い輝きを放つソレを見た二人は若干あきれたように感想を漏らした。どうにも不評らしいことははっきりわかる。

「じゃあコレは?」

「これはすごい、どうみてもラ〇トセー〇ーですね」

「やりますねえ!」

ヴウウン……と青白い光が伸びると二人からも感嘆の声上がる。どうやらお気に召したらしいのだが、中身は木刀のステータスなのでダメージは大したものではない。所謂見た目装備というかお遊び用装備というやつだ。

もちろん本気で作った赤いら〇トセー〇ーも存在する。中身は神器級のレアリティを持つ剣に分類されるもので、「スヴァログ」という火神の名を与えられた剣だ。炎属性の強化とスキルの再使用可能待機時間短縮に使用後のデイレイ時間短縮というメ

リットがある。ただしデメリットのスリップダメージが少ないながらも存在するのだが、そこは吸血鬼という種族の持つ再生能力でカバーしている。

「他のとなるとこんなのとか」

「おお、バスターソード！」

「超級……なんとか斬って使えたりします？」

「使えません。乱打系スキルで真似するのが精々ですね」

太くデカくゴツイ例の大剣。まさに鉄塊と表現して差し支えない大剣はやはり男子の興味を惹くものらしく食いつきがいい。俺はペロロンチーノではないが、ちっちゃな少女やメイドに大剣や巨大な銃器を装備させるのも素晴らしいことだと思う。両手持ち前提の大剣、自身の身長よりも長い狙撃銃、振り回すなど到底できそうにない突撃槍ランスなどからたやすく放たれる、大重量やパワーこそ正義と言わんばかりの一撃は素晴らしいギヤツプ萌えだろう。

無論ナイフや棒術、それに暗器使いなどもビビツとくるものがある。冷徹さやスマートさを印象付けるには最高の要素だろう。手にしたモツプを巧みに駆使して障害を軽々と「お掃除」していくメイドさんとかグツとくる。

「あとはこんなのとか」

「シヨートルにエストック……中国風の双剣まで……」

「こっちはパタに七支刀ですよ。どんだけ集めたんですか……」

「実家が収集家の集まりですからこういう資料はいっぱいあるんですよ。ついでに立体化してくれて頼みこんでデータ作ってもらいました。」

「ま、ビジュアルは今度良さそうなのを見繕ってきますよ」

「んじや清算しちゃいましょう。ヒビイロカネは今度売りさばくとして、残ったドロップや他のをボックスに放り込んで換金すれば………合計154万9918枚です。いやーやっぱり三人居ると効率上がるって実感があります」

「おー。三人で稼いだ割にそこそこありますね」

「ですね。あ、分配は俺は少なめでいいですよ。ナザリックの設備を使わせてもらってますし、維持費に充ててください」

「じゃあありがたく設備費に充てさせてもらいますね。とりあえず50万は設備費にして、40万が二人と残りはルイさんでいいですかね？」

「どうぞ。俺は構いませんよ」

「私も大丈夫ですよ」

「エクステンジボックスから出てきた金貨を一度収納し、受け渡し用のウィンドウを経由してユグドラシル金貨が手渡され、そのまま俺のアイテムボックス内に収納される。へろへろさんも受け取ったらしくサムズアップのエモーションを出している。」

「さて、そろそろ寝よ……ゲホツ、ああ、喉渇いたかな」

「気を付けてくださいねへロへロさん。今年の冬は冷えるみたいですから」

「了解ですよモモンガさん。それじゃお疲れ様でしたー」

「へロへロさん、お疲れ様です」

「お大事にー」

へロへロさんのアバターが光の粒子となつて消えていくのを確認してからモモンガさんが席を立つ。

「さて、それじゃ金貨を宝物殿に入れてきますね。私も後ですぐに寝るので今日はここまでですね」

「おっと、もうー時か。お疲れ様、モモンガさん。パーティでのダンジョンが久々だから迷惑かけちゃいましたね」

「三年もブランクがあつてあれだけやれるんですから上等ですよ。まあ細かい高等技術はこれからさび落としていきましよう。っと、あとはコレ持ってみてください」

「……なんですこれ？ 擬・月読？」

月の輝きに似た色合いの刀身を持つ短剣を半ば勢いのままに押し付けられる。しかもなかなかの攻撃力にエンチャントまで施されていて、出来上がりをみるだけでも神器級はすることがわかる。

「引退したギルドメンバーが昔に作った試作品……というか失敗作なんです。もちろん失敗作とはいえ攻撃力は一線級の武器ですけど、異形種が装備するとそこそこ大きなスリッパダメージやデメリットが発生しちゃうらしくて使っていないんですよ。」

で、ルイさんは形式上異形種ですけど扱いは亜人種や人間種みたいな感じと聞いたのでもしかしたららって思ったんです」

「ふーん……まあ試してみましよう」

装備画面を開いて月明りを帯びたような短剣を装備する。左手に現れた短剣は脇差に似た趣きのもので飾り気は一切ないが、先ほど装備した『暁』と同時に装備すれば見た目の性能はアツプすること間違いなしだ。

「……どうです?」

「スリッパダメージはなし。ステータスの低下もないみたいだ」

「おお! 大成功ですね! ぜひそのまま使ってください。どの道失敗作なので使い道が無いんですよ」

「コレで失敗作……製作者はワールドアイテムでも作ろうとしてたとか?」

「……正確に言えば神器級ゴツクス以上、世界級ワールド未満ってことですね」

「凄まじい執念を見た気がする。じゃ、ありがたく使わせてもらいます」

「それじゃお疲れ様でした」

「お疲れ様ー」

へろへろさんに次いでモモンガさんが指輪の効果で転移して姿を消した。夜も遅いし、へろへろさんもモモさんも明日は出勤日だろう。俺は幸いにも明日は休館日で仕事も無い、となればやることは一つだ。

「……稼ぎにいらおう」

失ったものは大きいが得たものも大きい。ひと先ずは新しい剣の使い心地を確かめるついでに、支払ったヒイロカネの分を補填するために金策に走らなければいけない。ダンジョンソロでレアドロップがあることを祈るしかないだろう。

そしてまた三人とNPC一体が揃ってフィールド散策をして円形闘技場に帰還する。もう二か月にもなろうとしているが、全員が揃って回れたフィールドの数はそう多いものではない。三人の休みがかみ合う日は少なく、特にへろへろさんはブラック企業勤めな上に休みが不定なのだ。

休日定まっている俺やモモさんはまだマシなほうで、ただの歯車のごとく使い捨ての企業なんて平然と存在しているのだ。以前の企業よりはマシらしいが、それでも過酷なことには変わらない。

「今日のフィールドはすごかったですね……荒野に湖、熱帯雨林に砂丘まで……」

「ブループラネットさんだったらきつと何日も、ゲホツ、そのまま居ついちゃうでしょうね」

「へロへロさん、やつぱ体調悪いんじゃないですか。病院いったんですか？」

「いやいや、喉痛めちやっただ、ゴホツ、だけで……………ああ、でもルイスさんの言う通りですね。やつぱ病院いつてきます」

「そのほうがいいですよ。モモさんもこう見えて内心じゃ心配なんですよ。骨しかないけど」

「え？ 誰が骨だけだった？」

「ふふ、皆さんが心配してくれているのが骨身に沁みてわかりますよ」

「スライムに骨…………？」

「ほらほら。体調悪いのならさっさと寝たほうがいいですよへロへロさん。そんなでもって病院行ってください」

「はい」

そんなやりとりから二週間。へロへロさんは一度もログインすることなく、モモさんとレーナの三人でユグドラシルを巡る日々が続いた。モモさんもメールを送るなどして見たらしいが、急に忙しくなってしばらくログインできないという返答があったそうだ。

分厚いスモッグと放射能雲に覆われた秋も終わりかけて寒さが日ごとに増してきたある日、散策から戻った俺たちをへろへろさんが迎えてくれた。ただどこか覇気がなく、返答も上の空な感じではあったが雑談は続いている。

「ああ、そういえば前に言ってたレーナちゃんのモーションですけど、ひとまず完成したのでメールで送っておきますね。後で動作確認して手直しが必要そうなところは直しますよ」

「ありがとうございます、へろへろさん。確認してきます………んん、添付されてくないですか？」

「えっ？ そんなまさか……つと、マジで添付してないや……ごめんなさい、再送しますね」

「へろへろさん疲れてますねー。私もたまにそういうのやつちやいますよ」

けらけらとモモンガさんが笑って言う、へろへろさんも苦笑して返す。ただやはりというべきかそこにかつての覇気は無く、心ここに在らずという様子だ。

「オツケー。受け取りました。んじや解凍してA I関連のフォルダに入れてと……再起動してきますね」

「はい」

一度クライアントを落として再起動。再度ログインしてデータを読み込むと先ほど

と同じように二人が居るナザリックの円形闘技場に降り立った。

「よし、これがコマンドで……こつちがAIプログラムか。これを適用すれば……よし、いきますよ。『挨拶』だ」

「はじめまして、レーナ・ローデンバツハです！」

「おお……！ 可愛いですねルイさん」

「やっぱ俺の娘が最強かあ」

「……もう少し調整が要るかな？」

子どもらしい可愛さを感じる声。デフォルトで設定されていたものよりもさらに細かな動作が組み込まれたカーテシーだったが、へろへろさんにはもう一歩というところだったらしい。

表情の変化や重心の移動、衣服の揺れに髪の毛の流れ方まで調整されているコレを見ただけでどれだけの労力をかけたのかがわかる。

「しかしすごい作りこみです。素人目で見てもかなり細かいところまで調整してますよね。……へろへろさん、ただでさえ忙しいのに無理して作ったりしてないですよね？」

「……そんなことないですよモモンガさん。1日8時間でしつかりと休憩しつつ作りましたから」

「えっ、し、仕事は!？」

「切られました。なので無職です」

「……次の仕事は？ さすがにずっと無職なんて無理ですよ？」

「次……次ですか……その時が来るかどうか……」

「——へロへロさん。一体何があったんですか？」

「ふ、……はははっ……あつたといえはありましたけど。無いといえは無いですよねこれが」

モモさんも何かがおかしいと気づいたらしい。問いただすように尋ねたものの、へロへロさんは力なく笑ってしばらく押し黙ったままになった。

「二週間前に——余命を、宣告されちゃいました」

思わず息を呑んだ。モモさんも同じらしく、言葉も出ないまま茫然としている。

「人工臓器にね、体が拒絶反応を起こしてるんです。かといって人工臓器無しには生きられないじゃないですか。ハイエンドモデルなんて私たちがじゃ手も出せない金額だし施術だけでも大金がかかります。」

それで退職金とローンでそこそこのランクの人工臓器に換えてもらうことができる可能性があつたので、退職すると会社に伝えたくてです。

………。そしたら超過してる残業の未払い分と僅かな退職金だけで放り出されましてよ。高い金を払って弁護士にかけあつてみましたけど成果は無い。例え裁判を起こ

したとしても判決が出るころには私はすでに灰になって埋められてる。……残ったのはせいぜい質素に一年過ごせる程度の貯蓄と、死に体の我が身のみですよ」

酷いという言葉さえ陳腐に聞こえる所業だ。企業の独裁という支配体制が持つ闇を、ヘロヘロさんはその身に受けることになってしまったというのか。

「ふっ、ふざけやがって！ クソツタレの企業どもめ！」

「落ち着いてモモさん。吠えても喚いても企業どもにとっては聞こえないし聞こえてても黙殺されるだけだ」

「だからって！ こんな理不尽な仕打ちに納得しろっていうんですか!?!」

「俺だって納得しちやいない！」

「だったらー！」

「だから、やれることを探すんだ。有名な人工臓器の製造元とのコネでもいいし、マイナーな製造会社でもいい。俺たちの伝手を使ってヘロヘロさんに適合する人工臓器を探すんだ。あとは施術代をどうにか確保できれば……」

「で、でもどうやって……!?! 高精度の人工臓器の開発企業なんてアークロジュー内の企業くらいしか……!」

「モモンガさん！ 考えることをやめるな！」

そうだ。思考することは人間が獲得した生存のための能力だ！ 生存競争の中でキ

リンの首が長いものが生き残っていったのと同じように、高いところにある果物を得るために人間は知恵を使って道具を使うことで他の動物よりも繁栄してきたのだ。人間にとって思考することは即ち適応であり生存のための能力の発露なのだ。

企業によって運動能力や知識を削られたって人間の本質までもを奪えるわけではないのだ！

「いいかいモモンガさん。企業が恐れているのは民衆が知識を得ることじゃない。知識を得て思考し、それを知恵へと発展させることを恐れているんだ。そして今の俺たちにこそ必要なのは知恵なんだ。

思考を回し、知恵を絞り、ありったけの知識を活用するんだ。こういう一部の人間にとつて都合のいい社会の仕組みには何かしらの矛盾や穴が必ずある」

「ルイさん……そう、ですね。まだ、やれることがあるなら……」

「ゴホッ、モモンガさん、ルイさん！ お二人の……お気持ちは嬉しいんですが……ゲホッ、コホッ、それは上層部から目を付けられかねません。やめておくべき、です……事実として私も、ゲホッ弁護士のところへ一回行っただけで、公安に目をつけられましたから。」

この会話ログだつて見られている可能性があります。だから、何もしないでください……！ お二人自身のためにも……！」

「……クソッ！ どうすればいい……どうすれば……!?」

ヘロヘロさんの懸念はもつともだ。インターネットを介してすべてが監視されている状態に等しいのが今のこの世界であり、企業の支配体系でもあるのだから。

家電の稼働状況、電力消費量の増減、データ通信量、家から出る家庭ごみの重量、ありとあらゆるサービスや家電製品、通信機器がAIによって管理され、情報が逐一企業のサーバーへ送信されているのだ。端末を持っていなければIDによる認証がされないため公共機関は利用できず扉一つさえ開けない。自動車のエンジンさえかからず、家の照明さえオンにすることができないのだ。その状態で出歩けば警備ドローンに警告を受け、無視しようものなら攻撃型ドローンに問答無用で蜂の巣にされるだろう。

ましてやこのユグドラシルはインターネットを使うゲームだ。会話内容や通信ログは運営企業のサーバーに残り、さらに上層の企業……特に治安維持や社会システム管理維持を担う企業は無条件で閲覧することができる。そんな完全管理社会なのだ。

しかしそんな社会でも反乱を起こす人間や反体制派の人間は少なからず存在する。国際的なテロ組織も居るし、なんなら企業の上層部にだって現状の社会システムに反発する人間が存在している。事実として俺はかつて企業上層部の改革派の一人でもあった。だからと言ってテロ組織と手を結ぶなどありえないが。

そうだ、そんなことありえない。娘の命を奪い、妻が死ぬ遠因を作り出したテロリス

トどもなんぞ消えてしまえばいい。改革だの解放だのと宣っている陰でどれだけの一般人が巻き込まれているか自覚していないクソツタレどもなど死に絶えればいい。

巻き込まれた人たちには家族がいる。友人がいて、仲間がいるのだ。1000人が巻き込まれたならば、1000人分の家族と友人と仲間が悲しむのだ。それを必要な犠牲と断じたあいつらが正義だなどと、俺は決して認めない。

企業の支配体制は悪だ。人々から知性と自由を奪い盲目とし、ただひたすら搾取するだけの存在など害悪でしかない。

テロリストは愚者だ。民衆に盲目的な信奉に等しいイデオロギーを吹きこみ、犠牲を善しとするなど断じて正義ではない。

であるならば何が正しいのか。……そこに己なりの答えを持ち合わせていない時点で正義を語ることはできないし、これから先も悪にすらなりきれない愚物で終わることだろう。ただ己の身勝手な理想論と断じられて終わるだけの子どもものがままでしかない。

理想を振り翳す力も無く、理想を共にする仲間がいるでもなく、ただ「コレがいい！コレじゃなきゃダメ！」と駄々をこねる子どもでしかないのだ。

ああ、そうだ。ハッキリ言つて絶望してる。生半可な知識があったが故に、俺はすべてに絶望しているのだ。そのくせ諦めきれなくてこんな風にモモンガさんに偉そうに

講釈をたれている自分に腹が立つ。

「やつぱり……何度考えてもこれを受け入れるなんて無理だ。諦めたくない。俺もへ口さんが必死で働いてきたのを知っていますし、それに対する報いがこんなものだなんて認めたくない。」

「ここで俺が諦めるっていうのはきつとへ口さんの頑張りを、人生の一部を無価値にしてしまう。……そんな気がするんです」

「モモンガさん……でも、こういうのは危険ですよ……」

「はっはっは！ マスク無しで外出すれば死ぬような世界ですよ？ 外の空気と銃弾、どっちも、お、おお、同じっようなもっんですよ？」

「ははっ、ゲホッ、ああ、声震えてますよモモンガさん。もう、締まらないですよそれじゃ」

「……モモンガさんがギルドマスターを務める理由に納得がいった。きつと他の人たちはみんな、彼の仲間のために動こうとする姿に惹かれたのだろう。傍に立って共に立ち上がるうとしてくれる人がいるというのは素晴らしいことだ。俺が三年前に失ってしまったものを、モモンガさんは今も持ち続けているのか。」

「やれるだけやってみましょうよへ口へ口さん！ ユグドラシルが終わるのは確定してますけど、へ口へ口さんの人生はまだ未定なんですから！ もしかしたらいい方法が浮

かぶかもしれませんよ！」

「——そうですね……はははっ……なんか笑ってたらちよつと楽になりました。

ええ、諦めるのは死ぬ間にやったって遅くはないでもんね。いろいろ調べてみることにしますよ。昔の同僚に司法関係の管理AIプログラムに携わってた人がいるんで、そっち方面であたってみることにしますよ」

「じゃあ私は人工臓器のメーカー関連にあたります。安くて高精度、もしくは効率落ちても適合率の高い製品を調べるとしましょう。ルイさん、メーカーや司法関係の資料なんかあつたりします？」

「あ、ああ……あるとは思う、けど………あまり役には立てないかも——」

「何を言ってるんですか？ ルイさんみたいな知識を持った人って他に居ないんですよ！ 頼りにしてるんですよ、知識人さん」

“——やっぱりユウくんは頼れるお父さんだね”

不意に脳裏をよぎる懐かしい声。もう思い出せなくなっていたあの声。思い浮かべることも苦痛になっていた妻の笑顔。その光景は懐かしい思い出のはずなのに、いつものセピア色とは違うRGBの織り成す写真のように、はつきりと瞼の裏に蘇ってきた。

「——ああ、任せとけ」

なんでだろうか。俺の心情なんざ知ったこつちやないと言わんばかりに口が勝手に

動き出すのに、それが嫌とは思わないなんて。

アウターリング。所謂貧困層のためにアークロジの周辺に作られた都市が俺たちの住む町の一般的な呼び名だ。その中でも治安の悪い……というよりさらに貧困層が住まうエリアへ歩を進める。

かつ、かつ、と鳴り響く防護服の靴音は軽いが中の熱はひどい。あまり目立たないために旧式のスーツで出歩いているせいなのだが、性能は現行機並みであるとはいえ快適性に難がありすぎだろう。元が戦闘用だからそこそこ性能はマシだろうと甘く見ていた俺をぶん殴りたくなる。

「あらー！ その骨董品を着たお兄さん！ 今日可愛い子居ますよー！」

「すみません、飲み屋の予約が入っているので」

「ぞつかあ〜……じゃあ、もしよかったら二次会で来てくださいね。サービスしちやいますから！」

アウターリングの最外縁部というのは貧困層の中でもさらに貧しい人たちが暮らしている。そこにほど近い繁華街というのはこうした性産業も盛んに行われているのが常だが、中にはアークロジ内の住人とのコネクションや関係を持つ人間もいることがある。今から会う人間もその手の人間の一人だが、“彼女”も性産業の立場を利用してアークロジ内やアンダーグラウンド内に独自の情報網と関係を構築したタイプの人

間だ。

アーコロジ―内の住人の需要を聞いて男娼や娼婦を派遣する会社を経営し、自身もアーコロジ―に移り住むことができるというのに未だにアウトリーングで暮らしている偏屈でもある。ヤクザ者というものが企業の手で駆逐され、そこに複合企業の傘下企業が入り込んでなり替わる形で勢力を拡大したのがこの業界だが、“彼女”は自身の手で企業を起こしてこの界限を取り仕切っているのだから珍しいタイプの人種だとも言えるだろう。

繁華街の中心地、ネオンの輝きが彩るビルとビル——その隙間の細い路地を入り、ごみ箱や室外機が並ぶ通りで客を待つ娼婦の誘いを断りながら一軒のバーの扉を開く。

「いらっしやい！ 今日この日をずっと待ってたんだよ、ユウくん！」

「やめろ。はしゃぐな抱き着くな頬擦りするな。まだ除染もしてないんだぞ」

「ユウくんから貰えるものならボクはなんでも貰うよ！ 例えそれが汚染物質だろうがセーエキだろうが！」

「ヒビキ、お前ほんつとにブレねえな」

環境対応スーツのままだというのに抱き着いてくる一人の可憐な“少女”。艶のある黒髪をショートボブにした、切れ長の黒い瞳の見目麗しい顔立ちをした十代半ばほどに見える若い“少女”。性風俗とは無縁そうな清楚な雰囲気しながらも、身だしなみ

は露出の多い改造メイド服というギャップのある「少女」。

「ほらあ、ボク……もうガマンできなくなっちゃって朝からずっと勃っちゃってるんだよお！　ねえユウくん、今日こそっ！　今日こそシようよお！」

——だが男だ。

「やらねーよ。俺はノンケなの」

「じゃあシようよ！　ボク女の子なんだよ!?!」

高村ヒビキ。俺の叔母……この企業の経営者である高村ミサトの「三男」だ。見た目にはどこからどう見ても美少女そのものなのに、彼女の股間には男にしかないブツがぶらさがっているのだ。

「どこをどう見て女なんだよ！　股間に可愛らしいイチモツつけてんじゃねーか！」

「大丈夫だよ！　ちゃんとこの間オジサンに女の子として「教育」してもらったんだから！　使い心地がいいって褒めてくれたんだよ！」

「何やってんの!?!」

「何って、教育だよ！」

頭が痛い。ヒビキがこうして俺に言い寄ってくるのは以前から何度もあつたが今回のはひどすぎる。彼女が俺になついているのは昔からだが、以前に増して輪をかけて悪化している。

昔のヒビキは料理人を目指していた普通の子どもだったのだが、自身の家庭環境のせいか育った周辺の環境のせいかは知らないが、いつの間にか「目覚めて」しまったのだ。そう、自分が女だという認識に目覚めてしまったのだ。

それ以来俺が店に来るたびに猛烈なアプローチを仕掛けるようになり、あまつさえ叔母は「いいぞもつとやれ」状態なのだからたちが悪い。

「ほら二人とも。立ち話しないで座ってお話したら？」

「叔母さん。ここに居ていいのか？ 本社のほうは？」

「娘に任せてるわ。あの子もそろそろ経営者が板についてきたから私は裏ボスにまわろうかかって」

防護スーツを脱ぎ去ってカウンター席に座ると、ヒビキにそっくりの女性がグラスを用意して待っていた。ただ違う点を挙げるならばその豊かな胸部装甲とすらりと伸びた高身長が織り成すグラマラスで妖艶な大人の女性ということだ。

ヒビキとは対照的だ。ヒビキは体が男なのでぺったんこなのは当たり前だが、背丈は140センチにも届かない小柄さと子どもっぽさを振りまいていて、ミサトさんのような色香はまるで感じない。俺が脱いだ防護スーツをハンガーにセットするヒビキの表情も後ろ姿も完璧に女の子なのだが、纏う雰囲気というか気配と言うべきか、空気がどこか子どもっぽいのだ。

「今日はいつもの？」

「いえ、〃カネマラのロック〃、〃グラスはふたつ〃でお願いします」

「……ヒビキ、奥の蔵から取ってきてちょうだい」

「えーっ!? ボクもう今日はユウくんの横から離れたくない！」

「いいから」

「むうーっ……自分で行けばいいのに……」

ブーブーと文句を言いながら、あちこちを露出させた破廉恥なメイド服を着こんだ少女が小さなお尻を振りながら通路の奥へと消えていくのを確認して、思わずため息が出る。

「それで、何が必要なの？」

「人工臓器の情報。それも適合率の高さが88%以上のを最優先で」

「……メールで送る？」

「お願いします。現物を確保しなくてもいいです。情報だけで構いません」

「わかった。一覧を作って届けるわ。お代は——」

「コレで。新東京アークロジ―中央銀行の頭取の秘書の電話番号といきつけのカフェの

場所です」

「——ずいぶん太っ腹ね。この情報だけで儲けの幅が一つ広がるくらいよ？」

「いいんです。どうせ拾い物ですから——」

「ねえママー！ カネマラってうちのきれてるよー！」

「じゃあ適当なの持ってきてきてちょうだい！」

どうやらタイムアップらしい。叔母は電話番号と住所を書いた小さなメモ用紙を煽情的なチャイナドレスの裏側にしまうと、今時では高級品である「本物の酒」を出すときだけ使われるグラスと浄化済みの水を使った氷を用意しはじめた。

カラン、と音を立ててグラスに滑り込んだ氷は空気は一切入っていない無色透明で、向こう側にある叔母の胸元が透けて見える。

「おまたせ〜！ コレにしよつか？」

「レッドブレスト、いいセンスだ」

「んふふ〜そうでしょ？ ボクだつてちゃんとカレを悦ばせられる女の子になるためにいっぱい修行したんだよ？ ユウ君の好きそうなお酒の銘柄を教えてもらったり、吸ってるタバコは紙巻が好きだとか、あとは……その……好きな女の子の髪型とかも」

隣のカウンターチェアに座って自慢げにはにかむ様子はどう見ても女の子だ。……

いや、この子の人格は男ではなく女なのだから、あまり男扱いするのはよくないだろう。

嫌われ、奇異の眼差しで見られ、変人と思われ、人格破綻者や精神異常者と罵られる可能性さえ覚悟の上でヒビキは……彼女は自分らしくあることを、自分を貫くことを決

めたのだ。彼女の懸想する人にどう思われるのか、絶縁されるかもしれないし関わりた
くないと無視される可能性だつて考えたはずだ。

それでいて自身のあるがままを、己が男ではなく女であるとさらけ出すその勇氣と覺
悟は途轍もない決断だろう。

「……な、なに？ ボクの頭撫でないでよー！ 子ども扱いはヤダよおー！」

「ん？ 頑張つた子を褒めるのはダメなのか？」

「ダメじゃないけどっ！ けどおっ……！」

むむむ、と少し頬を膨れさせて拗ねてしまった。もじもじとしていたりする様子や
時々見せる女らしい素振りは一アコロジー上層に居る見てくれだけの売女ばいたや阿婆擦あばずれれ
など比較にならないほど健気で、どこか儂くも愛らしく見える。

——ただしツイてる。

この子は本当に、なんで男の体に生まれてきてしまったのだろうか。天の差配か、それ
とも神の思し召しか。死に果てた天と滅び去つた神々の名残があるだけのこの世の中
にそんな奇跡的なことが起こるとなれば宇宙うそくしやの意志おあそびとでもいうのだろうか。

「やあ、お邪魔するよ」

「これは——佐賀美さん。三日ぶりですごいます」

叔母の口調が変わつたということは、この男——恰幅のいい中年の男は相応の身分の

人物だということだ。しかし三日ぶりとはまた頻繁に来ているな。三日前と言えば月曜日だぞ。一体どれだけこの界限でお楽しみしてきたのか——

「お、おじさま……」

「やあヒビキくん、今日も『勉強』しようか」

「あつ、あの、ちよつと今日はボクはこの方の同伴で——」

「む、また『ボク』なんて言っているのかい？ ……いけないなあ、教えてあげただろう？」

「ダメですつ、それに今日はそつちの仕事じゃ——」

男の手がヒビキの肩に置かれると、ヒビキはやりわりとお断りを入れようとしているが男は手をどけるような仕草の一つどころか手をつかんで抵抗さえ封じようとしている。

「それに、彼がキミを買っているわけでもないのだろう？ なら問題あるまいに」

「だつ、ダメです！ ボク、今日はユウちゃんと先約が……！」

「彼は飲んでいるだけなんだろう？ だったら……」

「そ、そのつ、だから……」

……まったく懲りないオヤジだな。こんなヤツがヒビキと同禽するなんぞクソくらえだ。

「いくぞ、ヒビキ」

「あつ……ユ、ユウくんっ！」

グラスに注がれたレッドブレストを味わうこともせず一息で飲み干し、カードをミサトさんに渡すと同時に部屋のパスキーが差し出される。一瞥もせず受け取り、薄暗い通路の奥へ抜けて店舗から直通のラブホテルの一室へヒビキの手を引いて連れこみ、ロックをかけるなり天蓋付きのベッドの上へその軽い体を押し倒すと上着を脱ぎ捨て同じようにベッドに身を委ねる。

「……ユ、ユウくんっ！ あ、あああ、あの！ ボ、ボボっ、ボクはいつでもカラダの準備できるんだけど流石にこんなに突然だとココロの準備が追い付かなくてっというか！ いろんな女の人や男の人に散々いじられてきたからそっ、そう、そういうのはなかなか、慣れてるんだけどこ、こっ、こ、こういう大事なヒトといたしたりするのはさすがに……は、ハジメテなわけ！」

それにボクまだ、ままだお風呂入ってないしい！ お……おトイレ行った後だから！ せめてもうちよつと身だしなみに気をつかう時間っというか余裕を欲しいっというか……！

あつ！ でもでもセンパイからいっばいテクニクは教わってるし……！ 受けでも攻めでもどっちでもボクは対応しちやえるハイブリッドタイプだからユウくんが望

むほうがあるならいつでもオツケーなんだけど……!」

けど……ボ、ボクのカラダで……ユウくんを、き、気持ちよくさせられる……自信が、なんか、その、ボク……お客さん以外は、ハジメテだから不安で……ちよつと……ここ、こわい、かなって……」

「じゃ、俺寝てるから8時間したら起こしてくれ。添い寝くらいはしていいぞ」

良い感じで腹にアルコールが感じられる。ほどよく酔いつつ気持ちよくぐっすり眠れそうだ。

「……ざ……な」

「なんだ?」

「ぎっけんナー! なんで!? なんでなの!?! いきなり部屋に連れ込んでベッドにドーン! ってされてなんで襲われないワケえ!?!」

ガバツと起き上がったヒビキが破廉恥なメイド服のまま馬乗りになって罵詈雑言を浴びせてくる。頼むから寝させてくれ。文化財の修復作業でこちら2時間しか寝れてないんだぞ。

ヘソ出し腋チラにミニスカート黒ストメイドというのは素晴らしい恰好であるとは思うが、股座にアツイなにかが密着していて正直頭が痛い。どうしてこの子はこうなったのだ。

「おかしいじゃん！ ユウくん！ ここは襲うところですよ！」

そつと腕を回して抱き寄せてドロツツツドロになるくらいデイープにチューして服のボタンに手をかけていくシーンじゃん！ 抱きしめられたまま甘ったるくて溶け落ちそうなベタでキザなセリフ向けられて、ボクが思わず「キュン……」って顔を赤くして切なくなつちやう場面じゃんかフツツはさあ！」

「タマヒユンの間違いじゃねーの」

「ちいさいいっつつつつがあああーううっ！ わかつてる!? キミに惚れてる女の子を個室に連れ込んで無理矢理ベッドに投げ捨てる勢いで放り込んだんだよ!」

「他の男にはやらない。俺のモノにしてやる……」とか！ 「あのオツサンじゃ与えてくれないメスの歓びを刻んでやる……」とか！ 入店時と打って変わって清楚で純情でしおらしくなったボクに向かって超絶俺様モードで甘々トロトロに蕩けさせてケダモノのように激しい行為に持ち込んでいくシチュエーションだったでしょお!」

「モノマネが上手いのはわかったからそこどけ。ナニが当たってんだから」

「当てるんだよお！ なんでその気にならないの!?! ヤろうよ!」

「やらねーよ!」

こんな言葉が出る時点で清楚って言葉は因果地平に飛び去っているぞヒビキよ。とはいえこのペースじゃもうどうにも止まらないだろう。ここはやむを得まい。切り札

の一つを切るとしよう。

「なあヒビキ、俺はお前のことは女の子だと思ってる。けどそれと抱るか抱かないかは別だ。」

お前は俺にとって大切な「いところ」だし、叔母さん……ミサトさんにとつてもお前の生き方は見えていて不安や心配が尽きない生き方だ。俺やミサトさんもお前の生き方を受け入れてはいるけど、あくまでそれは大切な家族としての感情だ。男と女の関係や感情からくるものじゃないんだ」

「……………うん……………でも、でも……………ボクじゃ、ダメ、なの……………」

「今の俺が欲しいのは……………家族の温もりだ。娘の玲奈も妻の紗耶香も、もう居ない。ずつとどこかに穴が開いたようなままなんだ」

「……………ごめんなさい、ユウくん。結局……………ボクの独りよがりだったんだ……………」

「ヒビキが心配してくれていたのはわかってる。俺が少しでも前みたいに笑えるようになって元気に笑っていたのもわかる。でももう三年も経ったんだ……………どうにかやっついてくれるくらいにはなったさ。」

でも、今日は……………どうにも寂しくって仕方ないんだ。だから、隣で居てくれる人が欲しいんだ」

先ほどまでの澆漉さがウソのようにヒビキは黙りこくったまま、しおらしく俯いてい

た。

「……ぎゅっ、てしていい？」

「——ああ、いいぞ」

体にかかっていた軽い重みが消えたかと思えば俺の右隣に陣取るように寝転がったヒビキは俺の腕をとり、抱き着くように身を寄せてきた。見た目には一部を除いて完璧な女の子なのだが、やはり俺にとつて「いとこ」という認識が消えることはない。

「ん……今日はコレで許してあげる」

「ヒビキ、さりげなく股で挟もうとするんじゃないぞ」

「……ちっ」

コイツに「女の子」とやらを吹き込んだヤツは絶対にぬる。絶対にだ。

「と、いうわけでウチの「いとこ」のヒビキだ」

「ヒビキです、よろしくね〜！」

いつものごとくやってきたナザリック地下大墳墓。そこに一つ違う点があるとすれば女の子のアバターのプレイヤーが一人増えたというところだ。

生足へそ出しと肌色多めの忍者服が煽情的な、しかし着用者が小柄でぺったんこで子どもっぽいという微妙に残念さを感じるアバターだ。

もつとこう、くのいちっつていえばさあ、スタイルがよくて引き締まった感じのスレンダーな感じに豊満なお胸が似合うと思うんだよ。細身でしなやかなボディにありながら一際目を引く巨乳っつていうギャップを楽しむものだと思うんだ。

それがヒビキの場合は………中学生のコスプレみたいな感じかな？

「どうも、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターをします。モモンガです」
「メンバーのヘロヘロです。よろしく〜」

あの日は結局寝るまで駄弁つていたときにユグドラシルの話になり、俺がプレイしていることを知ったヒビキが「おまたせ」というメールをスクリーンショット付きで俺に送ってきたことに端を発している。

見た目にはほぼ現実のヒビキとそっくりなアバターのスクリーンショットが送られてきて合成茶を吹き出しそうになった。しかもちゃんと性別は女なのでアレがついていない……つまりヒビキにとっての理想の自分をアバターにしたわけだ。

目標としては課金アイテムなどでさらに細かい部分を調整していくと言っていたが……あと半年を過ぎた期間でアカウントなんて作ってどうするつもりなのだろうかと聞いてみたところ――

「アカウント？ 前からあったよ？ 二つ前の「カレ」と一緒にプレイしてたんだ」ということらしい。そこそこ大きいギルドに属していたらしく、ギルドランキングで

も上位500位に入る程には活発に活動していたそうだ。

「しかしルイさん、いとこがプレイしてるのに知らなかったんですか？」

「この五年ほどは旧大阪エリアか新大阪エリアに居たからなあ。新東京エリアに戻ってきたのなんて去年の冬だし。それに……いろいろありましたしね」

「——あ、そういうえばヒビキさんのビルドってどういうものなんですか？」

内心で「あつ」と思ったのかモモンガさんが言葉を失くしたのを察したヘロヘロさんがすかさずフオローするように話題を逸らす。どうも気を使わせてしまったらしい。

「ボクのビルドとしてはアサシン系構成かな。種族は吸血鬼だけだ」

「アサシンに吸血鬼って……どう考えてもシナジーがかみ合わないような……」

「アサシン系にレンジャー系や森祭司のスキルがある感じかな。速度と攻撃力に振つてるから守りはイマイチだけだ」

「……吸血鬼、いらなくない？」

「必要だよ！ 吸血鬼を失くしたらユウくんとお揃いじゃなくなっちゃうし！」

「アツ、ハイ」

相変わらずブレないヤツだ。この調子だとどうやっても変えることはないだろう。己を貫くと決めた信念はゲームのプレイスタイルにまで影響しているらしい。

そこへモモンガさんがひとつ手を叩いてサムズアップのエモーションを出して言う。

「さて、それじゃヒビキさんの性能確認とルイさんとヘロヘロさんの鎔落としも兼ねて
いっちょよひと狩り行きましょうか！どこか希望はありますか？」

「私は天空回廊ダンジョンを！ 限定ドロップ！」

「ボクは機甲戦線ダンジョン！ ゴーレム作成用アイテム！」

「俺はフィールドの魔界都市TOKYO！ 刀よこせオラァ！」

「ホントこいつら噛み合わせねーなチクショウ！ というわけで生命科学研究所ダンジ
ョンで」

「ひぎい！」

「らめえ！」

「いかんそいつには手を出すな！」

「何言ってるんですか！ 限定ドロップもゴーレム素材も刀も落ちる優良マップだぞオ
ラァー！」

「4人で行くダンジョンってレベルじゃねーぞ！ せめて8人態勢！ 後衛とヒーラー
と壁を！」

ダメー！ そこはトラウマ発症しちゃうからやめてえ！ ヤメロオ！

夜明け前

今日も今日とてナザリック。円形闘技場へやってくると既に待ち構えていたヒビキがさっそく手を振るエモーションでこちらを呼ぶ。

装備は忍者らしく「くの」スタイルだが、アニメやゲームに出るような露出が目を引くことからその手の人にとってはエロ系装備扱いされる。ショートボブの黒髪と幼い顔立ちの十代半ばのアバター姿で、肩を出した白い襟の赤い忍装束に紅白の帯を巻き、赤い手甲と赤黒の足袋を身に着けているがそれ以外はほぼ露出しっぱなし。しかも前垂れは前を隠す気があるのかと思うほど狭く、子どもっぽいほっそりとした健康的なふとももからくるぶしの部分までが完全露出し、下着が見えるのではないかと懸念するほど攻めた衣装だ。

……なのだが、残念ながら着用者は現実での姿と同じくぺったんこでちんまい背丈なものだから大人の色香はまったく感じられない。

「おはよう、ヒビキ」

「おっはよーユウくん！ 今日のおくはどうかな？ 少し古臭いけど大流行したエロゲのキャラクターみたいな装備にしてみたんだ！」

「あ、うん、みたい、だな……」

違うぞ。あれはエロゲーじゃなくて格闘対戦ゲームだぞ。旧時代のアーカイヴにあるのを見つけてプレイしたことがあるが、あのお胸とおみ足は素晴らしいものだった。

「で、残り5レベル分の振り分けは決まったか？」

「んふふ、ちゃんと決めてあるんだよねー」

こいつは何を思ったのか、俺が吸血鬼の種族を取っていると知ってからワールドアイテムである世界樹の種を使ってまで吸血鬼の種族へレベルを再分配したのだ。ところが元々取っていた分のレベルを再分配したはいいものの、俺が流れ星の指輪を使って吸血種の種族を取っていたことを忘れていたために5レベル分が余ってしまった。

「ジャジャーン！ シューティングスター 流れ星の指輪あ〜！」

「お前何してんの!？」

「コレでボクの望むがままなのさー！ シューティングスター 流れ星の指輪発動！」

高々と指輪を空に掲げて数秒すると、突然目の前に何者かが転移してきた。黒髪の間種の男、それも純白の衣装に金の刺繍や腕章などゲーム内でお目にかかることはまず無い装備をしている。

「えーと、うおつ、ここナザリックじゃん！ まさかまたしてもあの人たちを担当しなきゃならないなんて……」

「……あの、ゲームマスターさん？」

「ああ、すみません！ あなたが流れ星の指輪を使った方ですね？ 所属は……あれ、アインズ・ウール・ゴウンじゃない？」

自身の現在地を確認した彼、ゲームマスター……GMはコンソールを開いて深いため息をついた。

「……というか『またしても』って……モモンガさん、あんたら一体何やったんだ。」

「はい、ボクはアインズ・ウール・ゴウンに所属してないですよ」

「そうでしたか。オホン、では改めて、今回のご要望をお伺い致しましょう」

「あの、ボクの種族に『吸血種』の種族レベルを追加してください！」

「……し、承知致しました。えーと……残り5レベル分を全てでよろしいですね？」

「はい、お願いします！」

GMがヒビキに向かって手をかざすと、円形闘技場の空から光が降り注いでヒビキの全身が光り輝くように周囲を照らす。光が収まった先には何の変哲もないヒビキの姿があつたが、コンソールを開いて確認したヒビキはガッツポーズで喜びを表現していた。

「確認できましたか？」

「はい！ もちろんです！ ありがとうございます！」

「それでは失礼いたします。残る期間は短いものですが、どうぞユグドラシルをお楽しみください」

しかしあのGMの声、俺の時も担当していたヒトじゃないか。なんとも因果なものはあるが、まさかこんな形で再び見えるとは思ひもしなかった。

「ねえねえユウくん！ 買い物に行こうよ！ 人間種用の装備なんかも装備できるようになるんでしょ？」

「そうだな。少なくとも俺のときは装備できるようになった」

「じゃあ決まり！ オススメの装備とかあったら教えてね」

「買うなら自腹でな。……俺は先日のドロップ品買い取りで金が無いんだ」

「えー!? 買い物^{デザート}なんだから一個くらいプレゼントしようよ！」

「心配するな。……現実^{リアル}で買ってやる。服でいいよな？」

「……ホント？ やったー！ ユウくんとお買い物^{デザート}だあ！」

ふんぷんと不機嫌なエモーションを連発していたヒビキがエクスクラメーションマークのアイコンと共に飛び跳ねるモーションを出して歓喜を表現する。

「いいなあ……」

「いいですよねえ……」

じーつと円形闘技場の通路から顔だけ出して見ている骨と粘液が何か言ってるが、こ

の子ツイてるんですよええ。

「ちなみに聞いておくけどモモさんとヘロヘロさん、どういう意味で“いい”んだ？」

「そりゃ決まってるでしょ同志ヘロヘロ」

「はい、決まってますよ同志モモンガ」

青白いオーラを纏わせたままモモンガさんは「飛行^{フライ}」で飛び上がり、ヘロヘロさんはジュウと地面を溶かすようなエフェクトを発生させて闘技場の中央に躍り出る。

突如表示されるインターフエース画面。表示されたのはPVPモードへ移行されたという表示で、ルールは無差別ダメージ減衰無し死亡ありのガチモードだ。

「爆ぜろやこのロリコン吸血鬼イイイイツ!!!」

「コイツは中身は十八歳だアーツ!」

「ようし、ボクとの愛の力を今こそ見せるときだよ!」

「お前ちよつと静かにしてろややくしくなるからアアア!」

クソツタレめ! アインズ・ウール・ゴウンとガチPVPなんぞもうお断りだったの
に!

この後めちやくちや殴り合いになった。

「……今日はひどいマップでしたね……」

「おーい、ユウくん。だいじょうぶー?」

「つつつつかれたあー……もう熾^{セラフ}天使級はしばらくいらん」

ぐでん、とまるで形を保てない半熟卵のように椅子に寄りかかっている俺にヒビキが声をかけてくる。普段使いのくの一スタイルの服……紫に染めた上衣と袴で露出度は大幅に減って忍者らしい忍者スタイルになっている。ワンポイントの白い帯に挿された忍び刀が一振りという一見すると簡素な装備に見えるが、懐には大量の暗器が仕込まれているのだから油断できない。

ショートボブで揃えられた髪にワンポイントでつけられている簪も実は武器という徹底ぶりだ。

「大丈夫? ごはん食べてボクとする? お風呂でボクにする? それともボクとやる?」

「大丈夫。ご飯食べたし風呂も入った。お前はもうちよい慎もうな」

「はーい」

「とりあえずさくつと清算しちゃいましょう。明日でユグドラシルが終わるのだとしても狩りは狩りです。最後までしつかり締めていかないと」

「ついにスルースキルもカンストしたなモモさん。ヒビキが変なこと言い出したらス

ルー推奨つていうのがよくわかったみたいで」

「まあ、四か月も一緒に狩りしてればねえ……」

あの悲惨なPVPから四か月経ち、つい三週間前にへろへろさんは人工臓器の移植手術のために病院でしばらく厄介になることになった。そして今日が退院日ということ。モモンガさんやヒビキと一緒に日課となっていた狩りを終わらせてきた。無事退院したという連絡がモモさんにきていたから、後はへろへろさんを待つだけだ。

「パパ！ おしごとおつかれさまでした！」

「ああ、やっぱりレーナに出迎えてもらえるのは最高の幸せだよなあ」

そう、入院する直前にへろへろさんが調整を終わらせたレーナのAIを送ってきたのだ。あれ以来狩りから戻るたびに駆け寄ってきて満面の笑みでお父さんを出迎えてくれるようになった。たった一つの心残りは触ったり撫でたりできないことだけが、部屋の中に居ると本を読んだり隣に座ったりといういろいろな動きを見せてくれるようになった。へろへろさんグッジョブと心の中でガッツポーズした。

背中に背負っていたインベントリ系アイテムもウサギのぬいぐるみ風のリュックサックにグラフィックが置き換えられ、時々中身を整理するようなモーションが可能になった。珍しいものを入れてるとエクスクラメーションマークが出たり、あまりかわいくないものを入れると涙目のエモーションを出したりと感情豊かになった風に思え

る。

最近はレーナの可愛い行動や仕草を見て癒されるばかりなせいか、ヒビキが対抗意識を燃やしてさらに積極的なアピールをし始めたのが頭の痛いところだ。

「私がかえつてきたあー!」

「おおっ! おかえりへろへろさん!」

「おかえりなさい、へろへろさん」

「へろさんおかえりー!」

ムンツ、と力こぶを象徴するエモーションを出したへろへろさんは意気揚々と黄金に輝くオーラを放つて席に着いた。相変わらず真つ黒な粘液がもぞもぞと動いているだけなのだが、どこか以前よりも活発に脈動しているような気がしないでもない。

目の前に居る骸骨王もどこかウキウキとしているように見えるのだから、俺も年甲斐もなく嬉しがっているらしい。

「で、どうでした? 体調に変化はありましたか?」

「いやはやすこぶる快調ですよ! ルイスさんが送ってくれた人工臓器の情報とモモンガさんの伝手が無ければ私はきつと今日を迎えられなかつたんだろうなって思いましたよ。」

走つても息切れしないし前はひどかつた拒絶反応もウソみたいに消えました! ほ

んつとうにありがとうございます！」

「ならいいさ。へろへろさんにはレーナの件でもお世話になったし、情報屋から集めてきただけだしな」

「へろへろさんが無事なら何よりです。それに私は知人にたまたま伝手があつただけですし」

「何言つてんですか二人とも！ 二人の力が無ければ私は自室で死んで遺体が数か月後に発見されたなんていう末路をたどっていたかもしれないですよ！」

こうして無事に今日を迎えられたのはモモンガさんとルイスさんの力添えあつてのことです！ お二人の持つ力が、一つの命を救つたんです……だから、胸を張つてください」

「ナムウ……じゃあ今度みんなでコーヒーでも飲みにいきましょうか。合成なんですけど結構いい味のお店を見つけたんですよ。ヒビキちゃんは未成年なんでアルコールはダメですし」

「あ、じゃあ私を持ちますよ。なんのお礼もできずつていうのは正直納得できませんし」
「何言つてんですかへろへろさん。そういうのは再就職してから言つてください」

「やけにモモンガさんが厳しい件。……まあ、再就職するのが一番の感謝の伝え方かもしれないですね」

なんともこそばゆい感じだ。俺が自分の力で調べたわけではないのだが、そんな小さな力が一人の命を救ったのだと考えるとどこか嬉しいような気分がする。

……だけど、俺はあの時目の前に広がった赤い焔の中に消えゆく娘を……玲奈を救えなかった。手を伸ばせば届きそうな場所に居た小さな命が炎に吞まれて消えていったのを見ていることしかできなかった。

待つて、待つて、と頑張つて追いかけてくる娘の傍にいてあげることができていたなら、あの子はもしかしたら生きていられたかもしれない。ほんの少し、ほんの数メートル、ほんの少しだけゆつくりと……傍について歩いていたら……すぐに手を引いて抱きしめて守り通すことができたのかもしれない。

もう過ぎた話だ。悔やんでも戻るわけがない。それを理解しているのに、納得したはずなのに、ほんの僅かなはずみで津波のように悔恨が押し寄せてくる。

「あ、もう12時だよウくん」

「しかしお前本名呼びを完全に躊躇わなくなったな」

「だって「ルイにーちゃん」って呼んでも反応薄いんだもん。しかもボクも違和感ばつかでヤダし。それに比べてレーナちゃんのかわいさといつたらもうたまんないよねえ……!」

「礼儀正しいし可愛いし、ちゃんとお姉ちゃんって呼んでくれるし」

「つーん、と不貞腐れたヒビキはレーナのウサギさんリュックにキャンディ（効果はH

Pを少量回復する）を三つ放り込んでレーナの「ありがとう、おねえちゃん！」というセリフを何度も聞いて悦に浸っていた。

「どうやら『おねえちゃん』という言葉が気に入ったらしい。末っ子だったが故に自分が姉扱いされるのが新鮮なものもあるだろうが、一番は自分を女の子だと認めてくれている気分になれるからだろう。」

「もうちよつとヒビキちゃんに構ってあげたらどうですかユウくん？」

「可愛い子を放つたらかしにしていると後が怖いんじゃないですかユウくん？」

「おーし俺にケンカ売ってんだなおめーら。石化してから『暁』装備のバフ込みで『無明晦冥斬』食らうか石化してから『スヴァログ』の『星火燎原』の貫通スリッパダメージでじわじわ死ぬか、選ばせてやんよ」

「上等だリア充！ サツカーボール扱いされて泣きわめくなよ！」

「神器級装備い？ ハッ！ 全部溶かちつくしてやらあ！」

「……噛んだな」

「そこで噛みますか……」

「……溶かしくしてやらあ！」

「何もなかったようにフツーに言い直したぞこいつ！」

「バチッ、と効果音がしそうなガンの飛ばしあい（？）をしながらにらみ合っていると

ころに声がかかる。そういえば久々の連休を利用したヒビキが俺の家に泊りにきてたのをつっかり忘れてた。

「じゃあボクご飯作ってくるから。ユウくん、合成品だけどチャーハンでいい？」

「それで頼む」

「リア充！ 死ねよや！」

ユグドラシルサービス終了まであと1日。変わらない日常が、変わらないでほしかった日常が、明日変わる。

俺たちプレイヤーは一つの寄る辺を失い、しかしまた次の一日を迎えて前に進んでいくだろう。そして数年か、十年か、或いは死の間際になつてユグドラシルを思い出すだろう。懐かしい日々の記憶として、思い出として心に残ることだろう。

俺にとつての決別の日。俺が再び前を向いて歩みだす日は、もう目前に迫っている。

「インしねーな」

「インしないねー」

今日も今日とて変わりのないユグドラシル。12月20日という最終日の夜を迎えたとしてそれは変わらない。文化財の修復がひと段落ついたお陰でやってきた連休を利

用して最終日を迎えられるのだが、いざナザリックの門前へやってきてみたがヘロヘロさんも居なければモモンガさんも居ないときた。

フレンドの一覧を見てもヘロヘロさんもモモンガさんもログインしておらず、オフラインの表示がずらりと並ぶだけだ。ヘロヘロさんは午前中に一度ログインしていたが、職探しのために求人サイトの開催している説明会へ出席することですぐに家を出た。

「そうだ、あそこにいこう」

「なに？ いい場所あるの？」

「ああ。ちよつとまってる……ゲート〈転移門〉」

見渡す限り毒の沼と枯れ果てた木々が乱立するだけの死の大地にぐにやりと小さな歪みが起こり、全てを吸い込むブラックホールのような半球状の物体が出現する。

「ほら、入った入った」

「……最終日だからって18禁行為はダメだよ？ 垢バン BANされちゃうよ？」

「天地がひっくり返つてもやりはしないが、兆分の一の確率でやるとしてもヒビキじゃないことだけは確かだ」

「ぶー、それヒドくない!？」

現実のヒビキそっくりな女の子のアバターだからといって手を出すなんて正直考え

られない。妻も娘も死んでいるとはいえ俺は妻帯者なのだ。年若い未婚の女の子（ただしツイてる）に手を出すなんてつもりはない。

転移門を抜けて出た先は俺の拠点である白の館にほど近い場所にある湖だ。広さの規模は湖と言うよりも池と言うべきなのだが、水深はなんと100メートル以上というわけのわからない深さをしている。

火山活動のせいのできた縦穴に水が溜まったのではないだろうし、崩れやすい地層が浸食されて崩落してできたわけでもない。そんな場所なのだがキツチリとフィールド内であるらしく、普通に魚が釣れるしなんなら対応した装備さえ使えば深海魚さえ釣れる。

そんな木々に囲まれた池の畔に立つ古ぼけた石碑と、周囲一帯を囲むように咲き誇るアケボノソウの白い絨毯。

アーキオロジスト
考古学者の〈言語解説〉のスキルでも読むことができないことからただのオブジェクトだとわかったが、最初は嫁と二人で資料に向き合ってみたり石碑の周りでふしぎなおどりを踊ってみたりなんやかんやと手探りで調べていたのも懐かしいことだ。
「すつ……い……………キレイ」

放心したように立つヒビキの足元、アケボノソウの花が風に煽られて空に舞い上がる。薄暗がり広がる空へと舞い散る花卉の中に佇むその姿は完璧な女の子だ。

ショートボブの黒髪が風に揺られ、身に着けた伝統的な忍び装束——青紫を基調にしたその後ろ姿は白い嵐の中で浮かび上がるように自らを主張している。

「結構いいだろう？ お気に入りになんだ」

「……うんっ！」

まるで童心に返ったようにヒビキは白い絨毯の上に身を投げて仰向けに空を見上げる。ばさっと倒れこむ音とともに花卉がまた一つ二つと風に乗って舞い散り、黄昏時の空へ昇って消えていく。

ちやうど腰かけるにはびったりな石碑にそのまま腰を下ろし、二人して空へと視線を移す。

「ふふ、ユウちゃんと現実リアルでデートするならこういう場所がいいなあ！」

「もうこんな場所どこにもないぞ。あつてもせいぜいシベリアやヒマラヤ山脈みたいな隔絶された土地くらいだろうな」

「もーっ！ そうやって現実味ばかりな話するんだから！ ……好きなヒトと一緒にこの世に二つとない景色を眺めるっていうのは女の子の夢なんだよ？」

「それでもないぞ。嫁は三人そろってテレビを見るのが一番良いつて言ってたし」

「それは家族として！ ボクのは愛する人としてだよお！」

言われてみればアイツも二人きりの思い出というのは欲しがらるタイプだったな。そ

れでも「世界に二つとない絶景」なんてものは望まなかったが。一緒に飛行機に乗って見た高度1万2千メートルからの地球の景色は格別だった。二つとない、とまではいかないものの、現状の世界ではほんの一握りの人間しか見ることのできない景色であることには違いないだろう。

……そういえばレーナを連れてきていないんだったな。普段ナザリツクに入る直前にNPCを呼び出すからすつかり失念していた。

〔^{コール}召喚〕レーナ、キリ〕

「……もうちよつとだけ二人きりがよかつたなあ」

「レーナ抜きには始まらないし終わらないんだよ」

召喚スキルで呼び出された我が娘レーナと、以前のクエストで捕獲……というか従えた麒麟（ポニーサイズ）を呼び出し池の畔で待機させる。

小さく幼い少女の傍らに控えるこれまた小さく幼い聖獣という組み合わせが、天頂に上った蒼い月の明かりを浴びて風の水面に映し出される様子はまさに幻想そのものだ。……だがそれもまもなく、あと20分で電子の海に消えていくことだろう。

「おつ？」

「きたー！」

一切変化のなかったフレンド一覧にオンラインと表示されたのはモモンガさん。そ

して数秒してへロへロさんの名前がオンラインに変わる。

『あーあー、そっちはどうです?』

『ギリギリ間に合ったあー!　ってルイさんどこにいるんです?』

『今お気に入りの場所です。ゆつくりしてるよ。モモさんは?』

『ナザリック内です。あ、へロへロさんと合流しました。こっちは来ます?』

『……いや、俺はこっちで居るよ。へロへロさん聞こえる?　説明会どうだった?』

『はい。いい感じで何社か受けられましたよ。ただ胸糞なのが以前働いてた会社がどっちとも説明会に参加していたことですかねえ!　あと雪で交通網が一時的に止まったこととか!』

『……お疲れさん、へロへロさん』

『心中お察しますよ……』

『じゃあお二人さん、ユグドラシルじゃ最後かもしれないから言っておきます。……幕引きは告げられますが、俺たちには明日がある。だから今度、呑みにいきましよう。俺たちの明日は今日ここから始まるんだから』

そうだ、俺たちはこの死に体の地球に縋り付いて必死に一日を過ごしてきた。リアル
の友人やネットゲで出会った仲間なんかと分かち合いすれ違いぶつかりあい、そしてまた
日々の糧を得るべく働いて生活している。

そして明日が来る。当たり前のように明日が来て当たり前のように今日が終わる。知識層や富裕層からすればちっぽけで、ともすれば向上心の欠如とさえ言われかねないかもしれないが、明日があることは素晴らしいことなのだ。ただひたすらに生活の糧を得るべく働いていても、惰眠を貪り飽食と怠惰に身を任せたとしても、
“明日がある”
という当たり前があることは幸せなことなのだ。

それを幸せなことだと気づいている人は数えるほどしかいないだろうが、アークロジード内でゲバを起こしたり反動勢力に占拠されたり殺戮の対象となったり、そういうことに俺たちが巻き込まれないということは幸せなことなのだ。

『ですねえ。ルイスさんの言う通りです。私は二度も職を失った上に明日すらわからぬ日々でしたが、新しい人工臓器に換えることができたお陰で明日が迎えられたんです。』

生きて明日の朝日を拝めるのがこうも嬉しいことなのかと感動しましたよ正直言つてね。生きてるからには、明日があるから、また頑張れる気がしてくるようになりましたよ！』

『……………ルイスさん、へ口へ口さん……………私は、いや俺は……………リアルには何も残ってないです。両親は幼いころに死んで、今まで必死に生きていて、唯一楽しみだったユグドラシルも終わる。そんな中で明日を望む勇気が……………無いんだ。不安で、仕方ないんだ……………』

『……だったら、尚のこと呑みにいきましよう。なあに俺の親戚がウマイ酒飲ませてくれる店やつてるんですよ。へろへろさんも集まって酒でも飲んで、今度どんなゲームするか駄弁ってみましようよ！ 見つからないようなら俺たちも手伝いますよ、やりたいいこと”探しをね』

『……ルイさん』

そう、モモンガさんにピツタリな言葉を贈ろう。人から人へ言葉を伝えることくらいは、誰にだってできるんだから。

『老子曰く“他者を知ることには知恵。自分を知ることには悟り”とのことだ。俺たち三人そろって……いや四人そろっての自分探し。……してみないか？』

『——ツフフ、じゃあ今度休みを取れそうな日を見ておきます』

『決まりですね！ モモンガさんとルイスさんに会うまでには次の職を決めてみせますよー！』

どうやらモモさんも吹っ切れたらしい。へろへろさんはすでにやる気マンマンだし、うちのヒビキはすでに覚悟ガンギマリの状態なのだから問題ない。俺も、少しは過去を振り切って前に進む勇気が持てた。明日はヒビキが家に帰るのを見送ってから出勤して、次に修復する文化財の所有者と顔合わせして、それから現物の状態をチェックして……忙しいなあもう。

ああ、ただどころかして世の多くの人々は毎日を必死に生きています。当たり前前に明日を迎えられるものと気づくことさえなく明日を迎え、必死に明日を生き延びるべく足掻いているのだ。

しかしテロリストどもにとってはそういう市民たちさえも愚かな存在でしかないだろう。企業の提示する仕事を企業の指示通りにこなし、企業から生活の糧を得ている我々市民は彼ら反体制組織にとって企業に尻尾を振る犬か、鎖でつながれた奴隷という認識でしかない。

だから無差別テロなんてものを平気でやれる。解放だの自由だのを謳うだけで現実を見てもいない理想家どもはそうやって自由を与えるべき人々さえも巻き込んで殺してしまえるのだ。

ただ明日に生きていたいと願う人たちから、大切な明日を奪うことは許さない。それがきつと俺の――

もうすぐユグドラシルが終わる。その瀬戸際にどうにか滑り込んだ俺とへ口へ口さんは玉座の間でゆっくりと話し込んでいた。コンソールでNPCの設定やなんやを眺めて、製作者がNPCの設定として書き込んだ知られざる秘密を流し読んでいた。

いかにも製作者の人柄がわかるような設定のものも居れば何も書き込まれず真っ白な白紙のままのNPCも居た。玉座の傍らに佇むNPC、タブラさんの作成したNPCである彼女……アルベドなんかは文字数制限いっぱいにに事細かな設定が書き込まれていて、最後の一文が「ちなみにビッチである」なんて締めくくりでなければ素晴らしい内容だった。

へロへロさんのおふざけを採用して「恋愛はクソザコである」に書き換えられたが、それはそれでギャップ萌えも感じる素晴らしい提案だった。ナザリックの守護者、引いては全ナザリックの統括として凛々しくも奥ゆかしい彼女が実は恋愛に奥手でヘタレなサキユバス（処女）だったという、この落差の大きさは非常に素晴らしい。

そうしてなんやかんやとワイワイ騒ぎながら、遂にその時がやってきた。目の前に居るのは純白のドレスに漆黒の翼と艶やかな黒髪の美しい守護者統括のアルベド、そして執事姿が板につく白髪の老執事のセバス・チャンとその指揮下にある6体のメイド……
ブレアデス
 六連星たちだ。

どちらが始めるでもなく、悪のギルドらしいロールプレイが始まる。

「……まもなくですね。盟主殿」

「ええ、まもなくですへロへロさん。……ユグドラシルの終焉です」

「地は空くうに還り、水は消失し、風は死に絶え、火は翳かげる」

「そして光も闇も悉くがゼロとイチに還元され、世界樹は枯れて塵と消えゆくのみ」

「……我々の、アインズ・ウール・ゴウンの全ても、諸共に消える。無常ですな」

「しかし我々の足跡が消えようとも事實は消えぬ。アインズ・ウール・ゴウンが在ったこと、神の使者を名乗る愚物を幾度となく屠ってきたこと、それらはリアルよりの観測者によつて記録され、記憶される」

「然り。そして世界は破壊され、ユグドラシルの観測は本日終了する」

「然り。そして世界は破壊され、しかし我らはリアルへと送還される」

多くの仲間たちが居た。言葉を交わしたのがゲームの中でしかないとはいえ、彼らは現実世界に存在する人々であるのだ。彼らと築いてきた思い出を忘れはしない。それにその中には現実世界で一緒に宴会をしたりカラオケをしたりしてきた人たちだっている。

きっと俺はそんな仲間たちを普段は思い出すこともなく過ごしていくのだろう。そして不意になんらかの拍子で思い出し、懐かしい日々に想いを寄せる。そしてまた明日を迎えて生きていく。

見上げれば、玉座の間に掲げられた41人の紋章の旗。41人分の思い出が詰まった場所だ。

「さすれば、ユグドラシル。我らの愛するナザリックよ」

あと、3分。世界の終わりまで、あと3分。

「さらば、アインズ・ウール・ゴウン。我らの愛しき子供たちよ」

サーバーダウンへのカウントダウン——終焉の鐘が鳴り響く。終了の告知テロップが空気も読まずに画面下部に流れはじめ——

へユグドラシルをプレイ中の皆様へ。 間も無くユグドラシルはサービス終了を迎えます

へ運営、開発陣、ゲームマスター、そして何よりプレイして頂いたプレイヤーの皆様のお陰で12年という年月を支えることができましたのだと思います

へ楽しいイベントもあればしょっぱいイベントもありました。バグや調整でご迷惑をおかけすることも多々ありました。しかし今となっては懐かしくもほろ苦い思い出として刻まれ、サービス終了の間際とはいえ多くの方々にプレイしていただけたい嬉しく思います

へこの幕引きが皆様にとって素晴らしいものであることを願っております。製作運営チームを代表してプレイヤーの皆様へ御礼申し上げます。12年間ありがとうございました！ プロデューサー

「……フツ、運営も満足のいく終わりを迎えられたのだな」

「そのようで。……ならば、我々も……」

「締めくくりましょう。あの合言葉に、最大の賛辞と感謝と畏敬を込めて……」

テロップが流れ終わり、世界が無に帰する寸前――

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」

俺とヘロヘロさんの声が重なり――

「チクシヨウ！　だまされた！」

「運営イイイイッ！　最後の最後でえ！」

時計が進む。12時きっかり終了するどころかもう数十秒以上経過してるじゃない

か！

「仕方ないです。ログアウトしましょうヘロヘロさん。明日も仕事が――ヘロヘロさん

？」

「……………モモンガさん、何か、変です。よ、よくわかりません、けど……………何か変で

す」

「ンン？　別に何も……………UIが表示されない？　これじゃログアウトすら……………」

「それだけじゃないです！　モモンガさんの、顔が……………顎が、動いてます！」

「んなまさ……………か……………」

カツン、と硬いモノに触れる感触。カタカタと顎の骨が動いているという感触。ありえない。こんなの、感覚が再現されるなんてできるわけがない！ おまけに電腦世界に閉じ込めるだなんて法規制で罰則だつて制定されてるハズだ！ 誘拐や略取に相当する罪状に問われる上に、刑期はあつて無いようなものだ！ 起こした時点でブタ箱一直線か処理場行きが確定している！

「ゲームマスターにも繋がらないし、モモンガさんは五感の再現までされている……普通に考えるなら私たちは電腦世界に閉じ込められたということに……」

「……僕ら監禁されとるんやで？」

「ネタに走つてる場合じゃないですよ！」

「わかつてます。わかつてるんですけど……おふざけくらいしないとおかしくなりそうで……フウ……え？」

緑色の光が足元から発生した、かと思いきや突然頭の中がクリアになる。……そうだ。とにかく今は原因の究明と現状の俺たちの置かれた状況を確認し、どうにかゲームマスターに連絡をとらないと。

相手が電脳法を無視して俺たちを監禁したとなれば、相手は間違いなくプロフェツシヨナルどころかスペシャリストだ。大企業のサーバーに施されたファイヤーウォールや防壁、検閲を掻い潜つてこんな芸当をしてみせる相手だ。へロへロさんがプログラ

マーとして優秀なヒトだとはいえ閉じ込められてちゃ……内側からじゃ打てる手は限られる。

「……どうかなさいましたか、至高の御方」

「……ファツ!？」

「ええ……?？」

——わからん。さっぱりわからん!

夜空の星々を眺めていると思うことがある。かつて、人が死ぬと空に還り星となるという表現があった。妻や娘は今もあの星のどこかに居るのだろうか。そんな取り留めもないことを考えてしまう。

「……ユウくん、行かなくてよかったの?」

「なんでだ?」

俺の隣に寝転がる少女……少なくとも中身は女の子なヒビキが問いかけてくる。いつの間にか着替えたらしく、身なりは編み上げコルセットできゅつと引き締めた所謂フレンチメイドえっになっちいていて、黒いガーターストッキングにかなり際どいミニスカートと攻めまくっている。

……どのみちヒビキの背丈は長身でスレンダーな美女というものには到底及ばない

ので、色気があるというよりは可愛らしいコスプレ程度にしか見えない。

「モモンガさんやへ口さんと一緒に終わりにしてもよかったんじゃない?」

「なんだ、せつかくヒビキと一緒に終わろうとしたのに。まああそこはアインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点だからな。そこに部外者が居るのは野暮だろ」

「……そつか。最後、だもんね」

がぼつと起き上がったヒビキが月明りを移す池のほうを見る。いつもの元気いっばいなヒビキを見ていただけに、しみりとしたヒビキの表情はどこか新鮮だ。

「ボクはね、ユウくんが好き……もちろん女の子としてだよ。体は……やっぱり男だけどき、それでもユウくんやお母さんがボクを女の子として扱ってくれたのが、すつごくうれしかった。ボクがボクのままでもいいんだって、認めてくれた気がしたから」

「ヒビキがそう決めたんだ。だから俺はヒビキが女の子だと認めるし、そう扱うように心がけてる」

「……ありがと、ユウくん。……ふふつ、ユウくんに認めてもらえたんだし、まあ、いつか」

気づけば運営からの告知テロップが画面の端に流れていた。十二年の感謝が記されたメッセージボックスに思わず時の流れを感じてしまった。

立ち上がって空を見上げれば現実そっくりな夜空が広がっている。星々を繋いで描

かれた「ありがとう」の文字がひときわ強く輝いて、灯火が消えるように薄れていく。「もう終わりだな……接続が切れたら寝よう。……また明日から仕事だし、今度の休みはアーコロジー内の遊園地にも行くか？ お買い物デートしたいんだろ？ ついでに遊ぶぞ」

「……いいの？ やったあー！ ボクね！一緒に水族館に行きたい！」

一緒に薄暗がりの水族館を手を繋いでゆつくり歩いて見て回ってさあ！ ちよつと人目につかないところに来たらユウくんにと抱き着いちゃったりなんかして！

あ、でもでもユウくんからお尻にタッチされたりまさぐられるのも露出プレイ的ですごくそそるっていうか！ よし行こう！ そのまま水族館からホテル直行ルートでくんずほぐれつしよう！」

「想像力豊かつすね……あ、時間——」

「え？ あっ——」

23:59:59——ああ、終わった。

「……あれ？」

「時計がズレるわけないし……さては最後の最後にやらかしたか、或いは作業の遅れでサーバーダウンが延期されたかってとこだろ。さっさとログアウト画面から————
どういうこつた？」

「……ユウくん、そっちはログアウトできる？」

「いや、そもそもコンソールが表示されてない。ヒビキは？」

「こつちも。終了どころか何も表示されないし……ん？」

「どうした？」

「パパっ！」

「おっふう！」

「どすん、とお腹に感じる衝撃。見下ろせばそこには愛しい我が娘も似姿たるレーナが抱き着いて頬擦りをしていた。

「レ、レーナ……」

「ねえねえパパ！ あつち！ あつちの池にお魚さんがいっぱい居るの！ キリがお魚食べたいつて言ってる！」

俺の手を引いてくるレーナの姿は死んだ娘とそっくりだ。……そのように作られたんだから当たり前と言えば当たり前なのだが、NPCがAI設定や命令など無しに喋って動いているというこの状況が理解できない。

さらに言えばあのととき、レーナを受け止めたあの感触……まさに現実としか思えない。

「待ってユウくん、血の匂いがする……匂い？」

「待て、それはあり得ないぞ。血の匂いなんて感じるわけないだろ」

「で、でもっ！ 本当だよお！ ボク、今血の匂いがして——」

「ありえない。五感で感じるなんて電脳法で規制されてできやしない。ましてや人間を電脳世界に閉じ込めるなんぞ処理場直行コースだ。そのままミンチにされて家畜の工サだ」

「そうだ、そんなものを感じるわけが——だが、この、嗅ぎなれた、血液から発生するこの二オイは——」

「誰だ！」

「がさり、と森の中から聞こえた木々の葉が揺れる音。明らかに人などの存在が物を動かした際に出る音を感じ取って振り向いて真正面から向き合う。」

「……ユ、ユウくん？ どう……したの？」

「ヒビキ、レーナと一緒に下がってる。何かいる」

「かつての自分を想起する。陰に日向にと戦いに身を置いたかつての自分。テロリストと戦い、企業の闇と戦い、力無き市民を守るべく戦ってきた己を思い出す。」

「二人を俺の体で隠すように前に出て投擲用のナイフを左手に持ち、周囲の動きに神経をとがらせる。」

「がさ、がさと近づいてくる音。そしてがさがさという大きな音と共に何者かが姿を現

した。

「ヒト……?」

「!? あ、あなたたちは……? いけない! 逃げて——がはっ!」

「見るな!」

「——ひっ」

「わっ!?」

月明りに照らされた若い女性——ロールプレイングゲームによくある、中世のヨーロッパの人たちが身に着けるようなゆったりとしたペチコートにシンプルなコルセットといういで立ちの、青い瞳に腰ほどまである栗毛を自然に流した彼女の腹部から鈍色の刃先が生える。

レーナの頭を咄嗟に抱きしめて見せないようにしたものの、ヒビキは見てしまった。

「あ、う……ゆ、ゆう、くん……」

一連の流れをじっくりと見てしまったのか、ヒビキが思わず腰を抜かしてへたり込む。じよろ、という音と共にアンモニア臭がするのを脳内から除外してナイフの刃を持ち、投擲の準備を整える。

ずるりと刃先が抜かれてその場に崩れ落ちた彼女の後ろから一人の男が歩み出てくる。白髪交じりの短髪とぼさぼさの髭、継ぎ接ぎの革鎧に所々が鉄製の薄汚れた鎧、飾

り気のない所々が刃こぼれした直剣、身なりからしてまさに「賊徒」と呼ぶべき男がこちらを一瞥しニヤリと口元を歪ませる。

「……死ね！」

「チイツ！」

羽織っていたローブをレーナに被せて突き飛ばすようにヒビキの傍へ押しつける。

突き出してくる剣はまつすぐ。安直でひねりもないただの突き。しかし相応の腕前が無ければ突きは回避できない。初見、かつ女性を殺した動揺の隙を狙って放たれた突きに、逆手に持ち替えた左手のナイフをそつと添えてギリギリのところまで打ち払う。

ちりつ、とわき腹を掠めた直剣。相手は剣を振りぬいていて手元に戻せない。自分の左半身を突き出すように前に。左手は順手でナイフを握ったままずりりと敵の喉元へ滑り込み、刃が肉を割いて脊髄を貫通していく。

「ギャヒッ」

「むんっ！」

ずりりとナイフを引き抜き、相手が倒れこむよりも早く右後ろ腰から引き抜いたショートソードで男の首を一閃。ごとりと落ちた首を胴体から噴き出る鮮血が赤く染めていく。

「ヒビキ、レーナ、ケガはないか？」

「——ひつ……あ、う、ゆつ、う」

「……パパ？」

じよろじよろとアンモニア臭をまき散らしながら、腰が抜けて歩けずにはたり込んだままのヒビキは後ずさりしながらこちらを見る。レーナも放心したような顔で見ただけだ。——ああ、返り血が怖いのか。それは仕方がない。

「あ……うつ……」

「……まだ息がある！」

先ほど刺された女性から聞こえたうめき声。駆け寄って傷口を確認したところ、深い傷だが致命と言うには少し足りなかったらしい。……苦痛が無いまま死ぬのと、苦しんで死ぬのとどちらがマシかというレベルではあるが、とにかく息がある。

「くそっ……医療設備があるわけじゃないし……というか電脳世界のはずだろうに。だがこの現実感の違いなくリアルのそれと同じ……どうなってる……？」

——どうにか頭が少し落ち着いてきた。そうだ、ここは電脳世界だ。目の前の彼女もユグドラシルで居たようなNPCのように平凡だ。おかしいくらいのリアリティに満ち溢れているけれど、ここは電脳世界なのだ。ユグドラシルがそのまま継続されているような感じ……まるでフ○ム製のあのゲームのような殺伐感に変化しているが、彼女を救うにあたって必要なものとなる——

「ポーション」

アイテムボックスを、と思考した直後に体が動いた。意志とは関係なしに、まるでそうするのが当たり前であるかのように手が「虚空に突っ込まれた」のだ。何かあるのかが頭の中にすべてわかる。放り込んでいたアイテムの種類、数、効能やフレーバーテキストまで一字一句が頭の中を駆け巡っていく。

「これを飲むんだ」

取り出したのは赤い血のような色のポーション。たまたま入っていたHP回復用の最高級ポーションだが、目の前で死者が出るよりはマシだ。

体を横にして口の端から出る血液を一度吐き出させ、気管支などに入らないように口内にゆっくりとポーションを飲ませていく。半分ほどを飲み干したところで顔に生気が戻り始め、すべてを飲み干したところには息遣いもゆつたりとしたものになり、傷口を確認しても傷跡すら残っていないかった。

「げほっ、た、たすけて……くれた、んですか……？」

「そうだ。まだ動かないように。止血はされているが流れた血が戻っているわけじゃない。無理せず横になっているんだ」

「そ、そうですか？ 多分動けると思う……そうだ！ 村が！ みんなが！」

「お、おい！ まだ動くんじゃない！ 一体どうしたんだ!？」

「村が！ 村が野盗に襲われているんです！ 助けにいかないよ！」

「だからと言って君が行っても犬死にだ！ 落ち着くんだ。いいかい、相手は何人だった？」

「くっ……おそらくですけど、30人は居たかと……」

「村人の数は？」

「120人です……以前はもつと居たんですけど、前にも野盗が……」

「ならおそらく全滅とはならない。必要なものを奪えば奴らは去る。こういう言い方は好きじゃないが……死人がいくら出るのは仕方がないが生かされるほうが多いはずだ。村を全滅させたのでは次の搾取ができなくなるからだ」

「そ、そんな……！」

「当然のことだ。すべて滅ぼしたのでは次の搾取ができない。つまり自らも死ぬ運命が決まる。だから簡単に全滅させたりはしない。恐怖で縛り付け、飼いで殺しにし、末長く搾取を続けるんだ」

突然がばつと起き上がったかと思うと、彼女はわき目も振らず駆け出そうとした。それが自らの住まう村を案じてのことであるというのは美徳ではあるだろうが、少女一人と大勢の野盗では戦力比が違いすぎる。

運が良ければ即座に殺されるだろう。運が無ければ尊厳を辱められ、仇敵に飼われる

か人買いに売られるのがオチだろう。

「……腕の立つお方と見込んでお願いします、どうか村を救ってください！ お願いします！ 見も知らぬ私を助けて頂いた上でこんなお願いをするのは厚顔無恥も甚だしいと承知しています！」

ですが！ 私には村を救う力も無く、守ることができません……！

報酬が必要でしたら私の身を売り飛ばして頂いて構いません！ 夜伽をお望みであれば如何様なご命令にも従います！ どうか村の人たちを！ ほんの僅かでも構いません！ どうか……！」

30人……対するこちらは戦えるのは俺くらいなものだ。咄嗟にはいえ先ほどの野盗は一撃で仕留めることができたが、あちらの攻撃が一つでも直撃すれば致命になる可能性だつてある。となるとやり方は一つしかないし時間もかかる。その間にも死者が出ることは明白だ。その上こちらが負うリスクも大きい。もしも俺がやられたとなればレーナとヒビキ、それに目の前で俺に涙ながらに縋り付く彼女が取り残されるということだ。最悪の場合奴等にこの子たちが捕まる可能性さえあるのだ。

……安全を最優先としてこの子だけでも保護して他を無視するか、後顧の憂いを絶つと思つて野盗どもを仕留めるか。

『い、いやだ……しに、たくない……あ、あ……』

『死ね、企業の犬どもめ!』

『ごふっ! げほっ! と……父さ……ん、母さ……』

家族を想って死んでいった男が居た。

『や、やめてください! この子はまだっ——アツ——』

『ママ! ママッ! やだ、やだ! パパ! ママッ——』

『企業の手先は殺せ!』

愛する子を守れず死んだ者たちが居た。

『死ね……俺の娘をつ! 玲奈を殺した悪党どもめ! ここで死に絶えろッ!』

『くそっ、コイツ手ごわ……ギヒユッ』

『応援よこせ! 重火器持つてこい! クソッ! 災害救助用のクラスⅡ程度のアー

マーでどうしてこんな動ぐびゅっ』

『テロリストどもめ、テメーら全員……許しはしないイイ……許してなるものかよオオオッ!』

『あれが鈴川の言っていた悪鬼か。フン、企業の傀儡には似合いの末路だ。だがそろそろ死んでもらおうか!』

『死いいねよやあああああつ!!!』

愛する子を失った怒りを振るう俺が居た。

「引き受けよう」

「あつ、ありがとう——」

「——ただし報酬はいい。代わりに頼みがある」

「え、あ、えっ？」

「あの子たちを……俺のいとこと娘を、頼む」

未だに放心したままの二人を指差し彼女に伝える。——暗に俺が戻れない可能性があることを悟ったのか、彼女は一度瞳を閉じて深呼吸をする。

「——この命に換えましても」

「では頼む。村の方角は？」

「ここから北へ進めば村が見えます。なだらかな下り坂になっていきますので、村が見下ろせます」

「わかった。夜明けには戻る」

石碑の傍でへたり込んだままの二人の下へ彼女を連れていくと、二人は怪訝そうな顔でこちらを見る。不安そう、というよりもどこか不機嫌そうな気がするが今はそれどころではない。

「レーナ、ヒビキ、俺は少し偵察を兼ねてここを離れる。この子、えーと」

「申し遅れました。私はヘレンと申します」

「ヘレンと一緒にここで待っていてくれ。他の野盗どもが居る可能性がある。気をつけるんだぞ」

レーナに被せていたローブを手を取って被りなおすといい具合で景色に溶け込む暗色の、濃い紫の色合いに落ち着いた。……周囲の光や色に応じて変化するというフレーパーテキストまで実際に反映されているとは恐れ入るが、この装備は渡りに船だ。

できる限り静かに、気取られず頭数を減らす。俺一人で全員を殺せるのだとしても、俺が一人殺している間にあいつらは20人の村人を殺せるのだから、できる限り感づかれずに始末しなければ。力があると過信して突っ込めば、その先にあるのは血の海だけだ。

「——パパも、どこかにいっちゃうの……？」

ローブの裾を握りしめたままレーナが言う。きつと戻らない母のことを言っているだろうことは明白だ。戻らない、彼女は、紗耶香はもう死んだんだ。だけど俺はまだここに居るんだ。

「必ず戻る。パパとの約束だ」

「ぜったいだよ！ ぜったい！」

「絶対だ。レーナとパパの約束だ」

むーつとふくれっ面をしていたレーナに笑顔が戻る。ガントレットを外して小さな

手を握ってから頬を撫でると、くすぐったそうにレーナははにかんだ。

そんなレーナの隣にやってきた、青白い体色の白馬のような見た目のポニーサイズの竜……キリと名付けられた麒麟をレーナは愛しそうに撫でる。

「キリもいっしょ！」

『大丈夫、アタシも居る。レーナに手出しはさせない』

「お、おう……頼むよ、キリ」

タイムしたモンスターさえも喋りはじめるとは思わなかった。流石にこれは予想外だ。隣に居るヘレンもぽけーつと口を開けて言葉も出ない様子で呆けている。

「——ハッ！ す、すごい……こんなに強いモンスターを従えているなんて……」

『アタシは弱い。まだ子供だ。ご主人に勝てるとは思えない。あとモンスターじゃない、竜だ』

……確かキリはレベルにして30くらいだったはずだ。となると上位物理無効化が作用すると仮定するならあの野盗の攻撃もノーダメージで受けきれたんじゃ……？

いや、過信は禁物だ。ダ○ソやデモ○ズ的な雑魚が滅茶苦茶強い世界かもしれないのだ。数で囲んで棒で叩く、をされる側に回る気なぞ毛頭ないぞ。赤目三連星や犬のデーモンのような悲惨な末路なぞ御免なのだ。

「ボ、ボクも行く！ に、忍者の、ク、職業フラスだって、と、とってるし！ ユウくんだけな

んて——」

「ヒビキ……無理を言うな。死人を見てベソかいておもらししてるヤツじゃ無理だ。はつきり言うぞ——足手まといはいらん」

「じゃあ、なんで！ ユウくんはあんなに簡単に……！」

「——そういう仕事をしてたからだ。俺は、どう言い繕つても最後には人殺しだよ。死体を作るのは慣れてるし、死体に変えられた仲間だつて見てきた。罪もない人々が死ぬところも、惨たらしく殺されるのを見てきた。」

「いいかヒビキ、これはお前が経験したことのないことだし、できるなら経験してほしくないものだ。返り血で薄汚れた日陰者になる必要なんてない。お前は女の子らしく可愛い服を着て街中を歩いているのが一番似合うんだからな」

「涙でぐしゃぐしゃになった顔のままのヒビキの頭をそつと撫でる。……もう何年もしたことがなかったが、俺を案じて自らも火中に飛び込もうとするその心の強さは賞賛すべきことだ。」

「心配してくれてありがとな、ヒビキ。ちゃんと戻るさ」

「——じゃあ、ボクとも約束。……戻ったら……少しだけ、傍に居て……」

「ああ、約束だ。……じゃ、行つてくるよ」

「……行つてらっしゃい」

どれだけを助けられるかわからないし返り討ちに会う可能性さえある。けど俺はやはりあの時と同じだった。奪われ、搾取され、理不尽な暴力に晒される人たちを救うために戦っていたときと同じだ。100人居れば100人分の家族があつて、100人分の友人が居る。100人の死は数字以上の人々に悲しみと絶望を与えるのだ。

当たり前前に迎えられるはずだった明日を奪われ、昨日は隣に居た人がもう戻らないという事実、遺された人々は嘆き悲しむ。それはこの場所でも同じだった。電脳世界なのか現実の世界なのかすら俺にはわからないが、目の前で奪われ虐げられ殺されている誰かが居る事実は変わらない。

せめて、人々が静かに眠れるために。明日の平穏を奪われないために、俺は剣を振るおう。

それが死んでいった人々が願った、当たり前前にある平穏のためになるならば。

人物紹介：序章

新東京アーコロジー居住者IDタグ管理センターへようこそ。

ログインには自身のIDタグを提示の上で指紋・声帯・DNA照合を行ってください。

.....

.....

.....

IDタグに特記事項を確認。

エラー。再認証してください。エラー……再になししょう……認証されました。

ようこそ””様。

あなたの閲覧権限は新東京アーコロジー管理法第29条に基づいてランク”C”となりま……ランク””となります。

無条件で全IDの全情報の閲覧、及び改稿が許可されています。尚、ログイン情報、ID閲覧及び改稿に於けるログは全て保存されません。

〈検索：PMC 2134年 新大阪アーコロジー国際空港 テロ〉

.....

……

該当数 2986件

完全一致数 318件

関連記事数 4651件

……

……

管理タグナンバー：2004-0414-1956

本名：朝倉悠里（アサクラ ユウリ）

性別：男

ワールドワイドネットワーク社全世界共通アカウント登録済み。

アバター名：ルイス・ローデンバッハ

年齢：34

職業：PMC "chromium 6" 特殊作戦部対内乱作戦課不正規戦チーム（対

外的には大手PMC保安部門所属）

後に第四新東京アーコロジー博物館学芸員。

経歴

2102年 管理タグ登録。登録時にDNAサンプル採取済。

2114年 第三新東京アークロジ―第二小学校卒業。

2120年 第三新東京アークロジ―高等学校卒業。

2121年 P M C “chromium 6” 入社。アウターリング警備部門に配属。

2124年 不正規戦チームへ異動。

2126年 タグナンバー6008―2519―8710、個体名“神田涼子”との交配を確認。

2128年 タグナンバー5409―9251―7762、個体名“朝倉紗耶香”（旧姓：七瀬）との交配を確認。

2129年 上記個体との交配種、個体名“朝倉玲奈”をタグ登録。関連付け完了。

2134年 新大阪アークロジ―国際空港に於けるテロ事件に於いてテログループの鎮圧に貢献。後に転職。

血縁者一覧

……

管理タグナンバー：2105-0815-9155

本名：高村響（タカムラ ヒビキ）

性別：男

ワールドワイドネットワーク社全世界共通アカウント登録済み。

アバター名：ヒビキ

年齢：18

職業：総合サービス派遣会社 “ラビット・カンパニー” 性風俗部門所属。勤務地：第四アークロジュー西ゲート。

経歴

2120年 管理タグ登録。登録時にDNAサンプル採取済。

2132年 第四新東京アークロジュー第三小学校卒業。

2133年 女装などの異常行動を確認。精神鑑定を実施。経過観察の必要性ありと判断。DNA解析の結果異常なし。

2134～6年 度重なる同性との非生産的な疑似交配に対して注意勧告も改善の兆候なし。

2137年 二度目の精神鑑定を実施。異常ありと判断。薬物治療と脳波治療を実施。

2138年 改善の兆候なし。異常行動・言動が著しく増加し、矯正不可と判断。廃棄所にて同年12月21日処理予定。

……

……

警告。全IDタグのコピーは許可されておりません。

新東京アーコロジー管理法の刑法に定められた……許可されました。

〈NOW LOADING……〉

……

……

〈COMPLETE〉

……

……

〈ログアウト〉

お疲れ様でした。 ” ” 様。またのご利用をお待ちしております。

第一章 リバイバル パラダイム・シフト

平穏な一日が終わった。野盗の出現、村人たちの死。国の助けも無いまま明日があるかさえわからぬ恐怖に震える。いつもの日常が過ぎていく。

「敵襲！ 敵しゆううううう！」

真夜中に鳴り響く、ガンガンガンと五月蠅い鐘の音。隣家から聞こえはじめるとタバタという騒がしい音。村の見張りについていた若い衆が怒声を挙げて駆けていく音。静かに過ぎつつあった仄い一日は野盗の出現という報によつて瞬く間に阿鼻叫喚の坩堝と化した。

これからの村を担うはずの年若い青年や働き盛りの男たちが立ち向かうものの返り討ちにあい、花盛りの村の娘たちはまとめて捕えられて野盗たちの慰み者にされていく。父さんと母さんが隙をついて私を逃がしてくれただけれど、駆け出した数秒後に後ろからくぐもつたような叫び声が二つ聞こえた。

誰かが追いかけてきている。後ろから声が聞こえる。それでも走って、走って、丘の上まで登って森の中へ逃げ込めば——そう考えて森の中に踏み込んだとき、見てしまっ

た。

たくさんの太陽の光を受けた麦の穂が煌めくような金色の髪。二十代と思しき精神な顔立ちの長身の男性。深い暗色のローブを纏った姿が背後の月明りに照らされた光景はどこか神聖さをも感じさせ、本当に人間なのかと疑いそうになった。

傍らに控えるのは彼の従者なのか、貴族の侍従らしい装いの少女。彼の腰の後ろからのぞき込むようにこちらを見る幼い子供。そこまで来て、ようやく自分の状況を思い出した。

「逃げ——」

逃げて！ そう叫んだはずなのに声が出ない。後ろからドンと腰と背中の間を押されたような衝撃と鈍い痛みが走る。自分のお腹を裂いて、私の赤い血で染まった切っ先が、月明りでなまめかしく輝いているのが見えて——意識が、落ちた。

「気が付いたか？」

「助けて、くれたんですか？」

死んだと思っていた。けれど私は再びこの目を開いて世界を目にすることができたのだという実感が湧いてきて、視界の片隅に見慣れない男が転がっているのが見えた。

私を追っていた野盗だと思いついた瞬間、父と母の顔が脳裏を過った。助けにいかなければ、例え一人でも、野盗に殺される前に助け出さなければと立ち上がったが、貴族

のような、しかし身なりは旅の剣士のような粗末な防具の彼に引き留められた。

彼が言ったことは正しい。私には力が無くて、誰かを助けるどころか自ら捕まりにいくだけでしかない。悔しさが胸を締め付け、無力感がひたすらに頭の中を埋め尽くしていく。気づけば私は藁にも縋る思いで彼に助けを求めていた。

「引き受けよう」

彼は、引き受けてくれた。その喜びに我を忘れそうになって、しかし彼の言葉で冷や水を浴びせられたように冷静さを取り戻した。

「あの子たちを……俺のいとこと娘を、頼む」

そうだ。野盗を一人軽々と殺せるからといって何十人もの野盗を相手に一人で挑むなど死を覚悟しなければいけないことだ。私は彼に、自らの血族であるあの二人の少女との別れになるかもしれないようなことを頼んでしまった。巻き込んでしまったのだと、遅まきながらに気が付いた。

「——この命に換えましても」

この人があの少女たちを大切に思っていることは明白だ。太陽が昇って沈むのと同じくらいにわかりきったことだ。あの子たちにとつても彼が傍に居ることは「当たり前」のことだ。そして私はその「当たり前」を奪ってしまうかもしれないような頼みごとをしてしまったのだ。

見たところ珍しい黒髪でメイド服の少女は十五に届くかどうか、更に彼によく似た金髪の子は一昨日10歳を迎える前に殺されたばかりの、お向かいのドリスちゃんと同じくらいだ。

きつと今が覚悟を決めるときなんだ。私はあの子たちより年上だ。十八になる大人の女なのだ。だがあの子たちは完全に大人になりきれてもいないままに、大切なヒトを失うかもしれない。そしてそのきつかけを作ってしまったのは私だ。

———今が私の命の使い道を決めるときだ。彼が覚悟を決めたように、私はこの身の持つ全てを賭けて守り通す。

そう決めた直後に野盗など足元にも及ばない強さを感じる馬(?)のようなモンスターに話しかけられた。金髪的好漢に仕えている彼女(?)はモンスターではなく竜、所謂ドラゴンでしかもまだ子供らしい。見た目には馬そっくりだけど、ひしひしと感じるけた違いの気配の強さはそこらへんのゴブリンやオーガは比較にもならず、一度だけ見かけたことのあるオリハルコン級の冒険者をも超えているだろう。

彼女が居れば野盗が何人束になってもたやすくはやられない気にさえなってくる。

そうこうして彼が村へ向かって走り去ったあとに残された4人(?)は全員が女だ。しかも私は血濡れでメイドの少女は自身の漏らした液体で下半身が濡れたままだ。

ひとまずは挨拶を、と思つてまずは小さい子……彼の娘に声をかける。

「えっと、私はヘレンっていいいます。よろしくおねがいます」

「はじめまして！ レーナ＝ローデンバッハです！」

彼の娘である幼子はまさに貴族と言わんばかりで、私のような一平民のたどたどしいカーテシーとは違って堂に入ったものを披露してくれた。しかも家名まで名乗っているということは元はどこかの領地を治めていただろう貴族であるということの証左だ。

衣服も平民のものより上等で派手さはなくシックながら可愛らしさも感じさせ、背中に背負ったうさぎのぬいぐるみと相まって彼がこの子に注ぐ愛情の深さを図り知ることがができる。

「……ヒビキ、です」

リ・エステイーズでは珍しい黒髪の少女はヒビキと名乗った。血縁であるはずなのに家名を名乗らないということは本家筋ではなく分家筋で、彼の下で従者として働く以上家名は不要だという認識なのかもしれない。

「ひとまず、ヒビキさん」

「……なに？ ボクに何か用？」

明らかに怒気を孕んだ声が私に向けられる。……何か気に障ることがあったのだからか。

「その、ひとまずその池で服を洗いませんか？ 私もほら、血で真っ赤になっちゃって

ますし！ 自分の血ですけど！」

「……………キリ？」

『いいと思う。正直匂う。アタシがもしオスだったら興奮するかもしれないけど、小便まみれなのは衛生的とは言えない』

「そう……………ボクを見ないですよ？」

「お、女の子同士ですから大丈夫ですよ！」

「ボクの裸はユウくんだけにしか見せないって決めてるの！ 今までどんな時でもユウくん以外に全裸なんて見せたことないんだから！」

「ハ、ハイ！ 見ません！」

あれ、これって、もしかして——この子……………まさかの婚約者だった!? いやでも貴族なら若いうちから縁談が決まってることもあるって聞いたことあるし！ 正式な決定ではないけどすでに両家で合意がなされている状態であると想像できる。余計な邪魔や縁談話が来ないように彼の従者扱いで最初から手元に置いておくことによつて早い段階から二人が夫婦生活を営めるようにし、万一他の縁談話が入つてきても実質的に夫婦であるつてことをアピールして「オメーの席ねーから！」と撥ね退ける狙いがあるということね！ 何故かいやに敵視されてる理由がわかった。私がヒビキちゃん婚約者に命の危険があるお願いをってしまったからだった！

——いやまてちよつと待つつのよへレン！ もしもヒビキちゃんが彼の婚約者だと言
うならあの子は、レーナちゃんは一体どういうこと!?! ヒビキちゃんはきつと十代半
ば。レーナちゃんはおそらく10歳前後。つまりヒビキちゃんからレーナちゃんが生
まれた場合、ヒビキちゃんの年齢は……!

「ねえねえヒビキおねーちゃん！ レーナもおよぎたーい！」

「ええ？ ……うーん、ここ深いみたいだから近いところだけだよ？ ボクだつて泳げ
るわけじゃないんだから」

「ヒビキおねーちゃん、泳げないの？ ママは泳げたよ？」

「あのねー、ボクは紗耶香さんみたいな超人じゃないの。料理洗濯炊事掃除財政管理そ
の他いろいろを完璧にこなせるようなすごいママとは違うのー」

よかった。いやよくないんだけどとりあえずよかった。レーナちゃんの母親は今
どこに？ “つていう点にさえ目をつぶれば何も問題はない。

察するにあのお方には元々奥様が居て、その方との子がレーナちゃんなのだろう。し
かしどうい理由か母親が居なくなってしまった。いつまでも伴侶が居ないという状
況は自勢力以外に付け入る隙を晒すに等しいため、それを防ぐ意味合いも兼ねて従妹で
ありレーナちゃんと面識があるヒビキちゃんを後妻の枠に据えたのだろう。

……ということはあの方は他勢力から目を付けられたり、婚姻による外交を行うだけ

の価値があるお方だということになる。それがどうしてリ・エステイーズ王国の、それもアベリオン丘陵に近い辺境地に居るのかという話になるが、とりあえずわかるのは私が助けを頼んだ相手は、万一彼の関係者に知られれば斬首確定コースになる地位かそれに準じるものを持っているということだ！

「つめたーいー！」

ばしゃん、と水の弾ける音ではつと我に返る。眩い輝きを放つ月の下、生まれたままの姿ではしゃぐ様子は普通に村で見るような子供たちとそう変わらない。

「レーナ、あんまり深いところ行っちゃダメだよー！」

「はーいー！」

ふと隣を見ればいつの間に着替えたのか、ヒビキちゃんは胸から股間までを覆うような地味目の衣装を身に着けて、先ほどまで着ていたであろう白い下着を木桶に入れてばしゃばしゃと水洗いしていた。いやそれよりも、その木桶はどこから取り出したのか。

「はー、まさかユウくんに見せようと思つて用意してた水着がこんな風に役立つなんてね」

まさかの水着だった。もう少しちゃんとした服らしいものが水着だと思つていた私からすればありえない。ほぼ肌着と同じようなデザインの水着なんて考えもしなかった。……股の食い込みもハイレグだし、生地は薄くてピッチリしているし、これはむし

ろ殿方を寝所に誘う衣装だと言われたほうがしつくりくる。

『アンタは入らないのか?』

「あ、いえ、その」

『心配いらぬ。アタシが警戒してる。ただ、何か来たら水から上がったほうがいい。感電する』

「か、かんでん?」

『要は、雷に打たれる。』ってことだ。アタシは電撃の魔法やスキルが使える』

ほへー、という言葉しか出ない。私が思っていた以上にこの馬らしきドラゴンは多芸なようだ。

「……はやく服貸して。洗っておくから」

「あ、ありがとうございます……」

脱ぎ去った衣服一式を渡す直前、ヒビキちゃんの目線が私の胸に向いた。ぐつと、私の服を握りしめたヒビキちゃんが先ほどよりもさらに声のトーンを落として言う。

「……………ユウくんの色目使ったら——ボクは赦さないから」

どうか無事のご帰還をお祈り致しております。というかほんとに無事で帰ってきて！ 傷一つない状態で！ 可及的速やかに！

森を抜けて丘の上から見た村の様子はひどいものだ。煌々と燃え上がる家屋がいくつか。中央の広場らしいところには篝火が焚かれ、集められた村人たちらしい影がそこかしこに見受けられる。

偵察用装備の一種である単眼鏡から目を離すが、月と星の明かりくらいしか光源が無い夜間だというのに夕暮れ時程度の明るさで周囲が見える。吸血種という種族のせいとか、それとも吸血鬼という夜の支配者たる種族のせいかはわからないが、夜目が利くというのは非常に便利だ。

軍用のフルフェイスヘルメット——それも可視光増幅型のN ナイトヴァイジョン Vや熱赤外線を感じするT サーマルインフラレッド I Rの切り替えが可能なハイエンドモデル——に比べて、機能の使い分けができない点がいささか不便だが仕方がない。

「さて、どう攻める?」

思わず零れた問いかけ。〃自分としては——〃と後に続く副官の言葉は無い。そうだ、俺は今一人であの37人の野盗を始末しようとしているのだ。

一人ずつ始末していたのではキリがない。だが複数を相手取るのは愚策。姿を晒して切り込むなんぞ到底ありえない。俺が姿を現したとなれば村人は救う間もなく殺されるだろう。

「情報が必要」

だがどうやって得る？ ナイフを突きつけて脅した程度で吐いてくれる相手ならいいが、そうでないなら？ 助けを呼ばればその時点で村人の被害が一気に増えるのは明白だ。

「……スキルが使えるか？」

そう判断した瞬間に脳内を情報が駆け巡る。自らが行使可能な魔法とスキルがずらりと並び、その中で対人戦で有効に働くだろうモノがピックアップされていく。

「……どうやらやれそうだな。スキル発動、〈眷属招来・古種^{エルダー！}吸血蝙蝠^{ヴァンパイアバット}〉」

自身の周囲に赤黒い蝙蝠たちが現れ、ギイ、ギイと鳴き声を上げて俺の指示を仰いでくる。正直言って生きた蝙蝠なんて初めて見たが、ユグドラシルのとき以上にリアリティが増している。飛膜の動きの一つ一つが目で追えるうえに、彼らが発する超音波さえも感じ取れるとは、この肉体はスペックだけを言えば人類が比較にもならないものを持つているらしい。

「第一分隊、偵察だ。行け、静かにな……」

20匹のコウモリたちが集団を離れて飛び去って行く。彼らがどの位置にいてどこを探っているのが脳内に直接的に流れ込んでくる。

「第二、第三分隊、村の周囲を警戒しろ。侵入者や村を出ていく者がいれば知らせろ。第四分隊は俺のロープの中で待機だ」

40匹のコウモリたちが村の周囲へと散っていく。お得意のエコーロケーションで潜んでいる者を探りつつ、目視で周囲を警戒して飛び回る。これでひと先ず村の全域が俺の警戒範囲内に収まった。

さすがに本職のように〈次元封鎖〉や〈完全不可知化〉の看破、〈攻性防壁〉などは習得していないが、できないことは他の下位のスキルの組み合わせで埋め合わせることだってできるはずだ。

ゲームからそのまま現実世界のような挙動になったのであれば、そこらへんの「融通」が利くようになってはいるはずだ。ゲームをそのまま当てはめたのでは世界なんぞ成り立たない。ゲームのままでは矛盾していること、成立しないこと、齟齬が生まれることに関して何らかの補正や修正、そして歯抜けになっている辻褄を合わせてくれる「融通」がなされているはずなのだ。

知恵と知識と発想を組み合わせて、自分が習得していない高位の魔法や職業のスキルを再現、もしくは劣化させたものを行使できる可能性が無いわけではない。

「使えるものは全て使う……」工夫を凝らしてあらゆるものを最大限に活用していくのがサイバイバルの基本か……前時代的な教官の、それも自然が死に絶えた現代で必要になるわけがないと思っていたサイバイバルの心がけをここで思い出す羽目になるとはな

偵察に出した第一分隊のコウモリから齎される情報を頭の中で捌きつつ昔のことを

思い出す。

鬼教官に一端の戦士として鍛えてもらったこと。同じPMCのオペレーターを務めていた女性と恋仲になったこと。彼女がスパイ容疑で拘束され、48時間に渡る尋問の末に息絶えたこと。旧大阪アークロジに本社を置く企業の令嬢である妻と出会ったこと。結婚し、娘が生まれたこと。テロリストに娘を殺されたこと。同じテロで怪我を負って寝た切りになった妻が一年後に治療の甲斐なく死亡したこと。

「行くぞ」

覚悟は——もう決まっている。俺は無慈悲に奪われていくだけの現実に抵抗する。

目標は——最優先は村人の救助。次点で野盗の確保又は殺害。

時間は——そう長くはかけられない。長くとも1時間。迅速に行動すべし。

「さあ」

モンク系や侍系の職業故か、種族的な特性かはわからないが敵意を感じ取った。敵意だとはつきり認識しているあたり、俺もずいぶん人間を辞めている体になっているものだ。

相変わらず夕闇程度の薄暗さ——ただし人間にとっては漆黒の闇の中——だが、目の前から歩いてくる三人組は手にランタンのようなものを片手に持って、血濡れの剣を手にこちらに向かって歩いてくる。

「あー、すっかりアイツどこまで追っかけてったんだ？」

「さあな。逃げたのが若くて美人のいい女だったのはわかるが、必死すぎだろ？」

「仕方ないさ。ラルフのやつ、前は見張り番で女を抱けてなかったからな。前に飼ってた女はボスの目に留まって一週間前にガキまで産んじまったし、三か月前は犯してた女にタマを噛みちぎられそうになってたぜ」

「なんだそりゃー！ どんだけ女運がねーんだ？ 今度は遂に殺されちゃうんじゃないか？」

ひと先ず背の高い草むらに腹ばいになって身を伏せる。ローブが自動的に周囲の光度に合わせてモザイクの暗色の迷彩へ変化し周囲に溶け込んでいく。

ざく、ざくと足音が通り過ぎる。見つかった様子はない。すれ違いざまにスキルを使用し、敵のレベルを計測して情報を集める。

〔アナライズ解析〕

……人間種、名はトビアス、年齢は32歳、レベルは7……って一桁!? ステータスを見ても軒並み低い数字が並ぶだけで特筆すべき点は何もない。しいて言えば他の二人も同じようなレベルとステータスだった。これならコウモリだけでもやれてしまうぞ。

「始末するか——」

ひよこ、とコウモリたちがロープの裾から顔を出す。『いかないの？』と聞いたげな雰囲気だが、コウモリに始末させた場合どうやって殺害するのだろうか？

『ご主人、我らは吸血鬼の眷属であります！ 相手の血液を吸って失血死させるのであります！』

「……となるとまずいか」

吸血で敵を殺したとなればどうなるか。生き血を吸われて干からびた死体が出来上がることになる。それはまるでどこぞのチュパカブラのような所業だし、人間業とは思われないだろう。ここで余計な不信感を与える真似は避けておきたい。

折角人間種と同じ見た目をしているのだから、それは有効的に、そして友好的に利用できるはずだ。

「三人……ギリギリいけるか」

このままあの三人を行かせればヒビキやレーナたちにたどり着いてしまおうだろう。ここで始末しなければ。

静かに起き上がってショートソードを抜き放つ。左手には一振りのダガーを手に、脚にかかる重心を調節することで足音を消して忍び寄る。少しずつ、野盗たちの背中が近づく。あと数歩……五歩、四歩、三歩、二歩……今だ！

「——だつてのにアイ——ゲボオツ」

ぎり、と弓を引くように右手を後ろに引いて全力で前に突き出す。呑気におしゃべり
を続けながら後ろを歩く男、トビアスの喉を矢のように貫いてショートソードが生え
る。

「——あ？」

ショートソードを生やしたままのトビアスを前に蹴り飛ばし駆け出す。どしゃり、と
いう音で異常に気が付いた男、アランの心臓にダガーを両手で力いっぱい押し込む
と、アランは痛みと衝撃で手にしていたランタンを手放した。

「ゲフツッ！」

押し込まれたせいで肺の中の空気を一気に吐き出したのか、アランが短い断末魔をあ
げて背中から倒れこむ。目じりに涙を浮かべ、死を忌避し、恨みごとを吐こうとして事
切れるのを確認するよりも早くその隣に居た男、ビヨルの目を指先で突く。

「ぎっ！ アツ——」

バリン、とランタンが地に落ちて砕け散ると同時に聞こえたくぐもった悲鳴。指先に
絡む眼球と神経のデコレーション。腹に肘を叩きこんで体を前にかがめた瞬間にビヨ
ルの首を右わきで抱え込むようにホールドし、そのままぐると両手で頭を一回転さ
せる。

「おっ、っ、ほ、おっ」

「ごきり、ぼきり、と骨が砕け首が360度にも一回転。ねじ切れた首から下がビクビクと痙攣を起こし糞尿をズボンの中でまき散らしたまま、ビヨルンは息絶えた。」

『お見事なのです！ さすがはご主人なのです！』

「久々にやったわりに鈍ったような感触がない。……吸血種のカラダのお陰、か」

「起き上がったから一連の動きを行った所要時間は体感にしておよそ12秒。むしろ以前より早くなっているとはどういうことなのだ。」

「……よし、死んでるな」

ショートソードとダガーを回収し、今一度彼らの心臓に剣を突き立てる。無慈悲と思ふなかれ、これは敵の死亡を安全に確認するための由緒正しい方法なのだ。死んでいないのなら今一度これで殺せばいい。死んでいるのなら死体になったと確信できるのでよし。わざわざ膝をついて相手の瞳孔を見たり脈をとったりする危険性の高い方法を使う必要などないのだ。

「そういえば生体センサーに連動した粗製爆弾^Eなんてのもあったな。至近距離で殺したりすればそいつ諸共にドカンなんていう頭のおかしいヤツ。遠距離から撃ち殺して漏れなく連鎖爆発させてやったが。ざまあみろってんだテロリストどもめ。」

「村に向かう。道中に敵影が無いから索敵しろ」

『ラジャー！ 第四分隊、偵察任務であります！』

『おしごとおしごと〜』

『おいおすなよ！ いまとぶからー！』

『ねむいよー』

『おきろねぼすけ！ こしゆじんからの“にんむ”だぞー！』

……眷属つて、こんなにコミカルなやつらなのか？

死を撒く剣団、と言えばそこそこ名の通った傭兵集団だった。その始まりはリ・エス・ティーゼ王国とバハルス帝国の戦争でカツツエ平野に取り残された両国の敗残兵や負傷兵が手を取り合つて生き延びたことにある。

撤退する味方に置いていかれたり、負傷して動けないまま放置されていたり、味方が全滅してどこに行けばいいのかさえわからないような奴らが寄り集まった集団だった。

俺たちを助けてくれるはずの母国や味方が俺たちを戦場に残したまま去っていく。

仲間の骸が引き上げられるわけでもなく、弔いが行われるでもなく、介錯してくれるわけでもなく、ただ野晒しの雨ざらしでアンデッドが出るカツツエ平野に取り残されたのだ。

俺たちに残されたのは粗末な支給品の武器一式と、同じように見捨てられた両国の兵士だけだった。国のために、仲間のためにと戦った俺たちは傷ついて、割れた陶器を捨

てるような気軽さで見捨てられた！ 助けてくれると信じた味方に裏切られた！

アンデッドに殺されて死ぬことを覚悟していた俺を助けてくれたのは他でもない、同じように傷ついたバハルス帝国の兵士だった。お互いが生き延びるために彼らと協力して霧が立ち込めるカッツエ平野を走り抜けた。戦場で遺留品を漁る盗賊を殺し、殺され、必死で走っていた。

生き延びたうちの数人は故郷へ帰ると言った。……自分たちを見捨てた国に帰るなんてよくもまあ甘いことを考えられるものだと思った。少なくとも、俺は国に帰ろうなどとは思えない。

村に帰ったところで重い税を課されて食料も金も持つていかれ、厳しい冬の寒さに凍えながら一年を乗り越えるだけでも必死なのに、乗り越えたその先にあるのはまたしても収穫と徴税だ。

俺たちは支払うものを支払っている。だが村への街道が整備されることもなく、国の兵士が巡回して治安維持に務めているわけでもなく、飢饉や大水のときに助けが来るわけでもない。挙句は徴兵されて村にもろくに戻れず、その果てに使い捨てられてみじめに泥をすすする有様だ。

当たり前のように俺たちは搾取され、当たり前のように使い捨てられ、その果てに死んでいく。今のこの国の……他の国がどうかは知らないが、少なくともリ・エステー

ぜはそれが当たり前に行われている。一部の人間が弱者を支配し搾取を続けている。計量の際の分銅の重さを偽る、巻き尺の長さを短くするなどのコソコソしたものから、なんだかんだとそれっぽい言い訳をつけて税を重くする方法までいろんなものを兵士時代に見てきた。

どうせあの肥え太ったブタどもが人々から「奪っていく」ものだ。奴らの腹に入る前に、奪い去ってやるとしよう。最初から無いものは奪えないし、出るものも出ない。奴らが奪ったあとのもの、これから奪う分を奪ったところで心が痛むわけもない。

「リーダー、代官の徴収が終わりました。荷馬車が8台、ほろ付きの馬車が2台です」

「よし、1台は代官のものだ。捕えて惨たらしく殺せ。顔や身元が割れるものを見せないように姿を隠せ。抵抗するやつは殺せ。女は捕えるなり好きにしろ。食料はすぐに奪って移送しろ」

「へへっ、久々の大きな獲物だ。これでメシが食える」

「ああ、だが気を抜くな。護衛もそこその数が居る。逃げるやつは棄ておいておけ」

確か別働隊がアペリオン丘陵近くの村を狙っていたはずだ。あそこの実りが豊かであるからといって間をあまりおかずは何度も襲うようでは警戒されてしまうだろうに。

「ま、ヤツが居るなら問題なからう」

余計なことは考えずにやろう。今は目の前の得物を仕留めるのだ。我々が獲物を仕

留めて帰れば拠点で待つ仲間が飢えずにすむ。

村の入り口まで来たが随分警戒が甘い。月の位置はまだ高い。日の出までどれくらいあるかはわからないが、迅速に村の中へ侵入して村人を解放しなければ。多くの村人は中央から少し離れた倉庫などに放り込まれているが、それでも収まりきらない分は中央の広場に集められているらしい。

コウモリたちの索敵のお陰で敵の位置はおおよそ見当がついた。やはり上空から確認できるというのは便利だ。ドローンの映像や衛星写真などには作戦時にはかなりお世話になったのを思い出す。

「中央に集まっているのが厄介だが、どうやって引きずり出すか……」

『ご主人、意見具申なのです』

「聞こう」

『敵勢力は人間種でレベルも低いのです。つまり状態異常への耐性が無いと思うのです。チャームなどで一時的に支配下にすることで手数を補えるかと思うのです！』

「なるほど。しかし同士討ちの発生や攻撃行動を一定確率で阻害する効果の“魅了”^{チャーム}では静かに始末できないような気がするが——」

いや、考えようによつては可能なかもしれない。ここはゲーム内ではないのだ。となれば単純に「魅了」^{チャーム}と言つても効果が変化しているか、あるいは現実に即した効果に書き換わつてゐる可能性もある。

「……ものは試し、か。よし、数体であの野盗の気を引け。建物にもたれかかつてるアイツだ」

『ラジャー！ 二匹ついてくるのであります！』

パタパタとコウモリたちが飛び去つていくと、しばらくして積みあがっていた木箱の上に置かれた編みカゴがカタンという軽い音を立てて転がり落ちた。

「ん？ カゴが落ちただけか——っ!？」

「俺を、見ろ。発動へ魅了の魔眼」

「う、ああ……！ お、まえ、は」

乱雑に切りそろえられた髪の毛の野盗の首をつかんで目を見てスキルを発動する。一瞬だけ苦しむように表情をこわばらせたあと、野盗の表情からは力が抜けて寝ぼけたようなとろんとした目で虚空を見るような間抜け面になった。

手を放すと野盗はその場にへたりこんだものの、すぐに立ち上がって俺に向き直る。

「俺が、わかるか？」

「……ああ、親友……わかるよオ。いきなり首をつかむなんてヒデエじゃねえか……そ

れで、何をすればいい?」

「すまん。頼みがある。近くにいるお前の仲間を何人か呼んできてくれ。さつき女を追いかけに行ったラルフとかいうやつ、あいつを探していた三人がいいものを持って帰ってきたらしい。」

「そうだな……十分後にあその民家の中に集めてくれればいい」

「わかったぜえ……親友ウ……何人か、連れてえ、クルゼ……」

足元が少しおぼつかないが、魅了は確実に効いたらしい。下した命令を遂行するため村の中へ入っていったのを確認し、指示した家屋にランタンをいくつか置いて、金になりそうなものをまとめてアイテムボックスから取り出して置いておく。

俺好みではなかったそこそこレアな剣や盾、ついでに武器製作に必要なインゴット系素材をいくつか。金と銀のインゴットが数本に、レーナにあげるために買ったパールやスピネル、ペリドットなどの安めの宝石系もいくつか麻袋に突っ込んでこれ見よがしにテーブルにセットする。

「本当なのかよ、あいつら外で何を見つけたんだ?」

「……来たか、少し早いな。まあとりあえず一旦隠れるか」

外から聞こえてきた声と足音からして4人から5人というところだろう。天井裏に続く梯子を上がった屋根裏からのぞき込むと、反転した視界の中で6人の野盗がテーブ

ルに並べられた金銀財宝を囲んでいた。

「こりやスゲエエ！ 宝石に金銀に、見たことのない剣まである！」

「ハハッ！ これだけありやあ村や代官どもをいちいち襲わなくても数年分の力ネになるぞー！」

「でかしたじゃねえか！ そういやあいつらはどこいったんだ？」

「シアな……呼んできてくれって言われただけだしよオ、俺あ」

集まった数はそこそこだ。この調子なら分散させて捕獲させてもいいかもしれない。ただダメージを受けると正気に戻る可能性があるから注意が必要だ。こいつらは全員縛り上げておいて他のエリアへ移動し、そこで同じ手口でまた眠らせ……というのが一番安全だろう。

「魔法広域化」

ワイデンマジック、ディープスリープ

移動用の魔法を習得するために最低限度で取った中級魔法職の広域化を行使し魔法を発動する。基本的に俺の使える魔法は中級……せいぜいが第7位階までだ。スキルであれば超位クラスに匹敵するだけのものを放てるが、魔法となると吸血鬼の種族で使えるものと申し訳程度に移動用や妨害用の魔法をいくつか押さえた程度しかない。

「これで、よし」

魅了をかけた野盗も含めて全てをロープで縛り上げて転がしておく。念のため刃物

などがないか確認しておいたが、動き出したりしないかコウモリに監視させておくしよう。

「ギエツ」

「おやすみ」

木箱に座りながらとうとうとしていた野盗の首にナイフを突き立てる。三度ほど先ほどの手口で野盗を無力化し、村人を押し込めている倉庫の周囲を警戒していた野盗を殺害していく。油や松明の準備がしてあることから見て、命令さえあればそのまま火を放つ腹積もりだったのだろう。

ゴトン、と扉を塞ぐ大きな木箱を引つ張つてどかして木製の扉をあげ放つ。入り口で光を放つ小さなランプの明かりに浮かぶ数人の村人と、その奥で暗闇と野盗の恐怖に震える村人たちがひしめきあっていた。見たところ子供や老人、四十代を超えた女性などがほとんどだ。

「待て、静かに。助けにきたんだ」

「っ!？」

「あまり騒ぐと気取られる。静かに、な」

四十代と思しき隻眼の男が振り下ろした角材を片手で受け止め、指先を口にあてて「シート」とジェスチャーで伝える。ざわめきがすつと引いていくのを見計らつて声を

かける。

「しばらく前にこの村から逃げてきたという、栗毛で青色の瞳の二十代手前の女に丘の上の森の中で会った。ヘレンという女から聞いた話では村が野盗に襲われていて、助けを必要としていると聞いている」

「ま、まさか……本当にヘレンが!？」

「ああ、怪我をしていたので治療してそのまま待つているように言つてここに来た」

「そうでしたか……あの子は無事ですか。申し遅れました、私はバーバラと申します。あの、剣士さまは冒険者であらせられますか？」

ボウケンジャー? ボウケンジャー? 某賢者? いや、どれでもないことは確かだ。冒険者と言えば冒険者みたいなことはユグドラシルでしていたが、今の俺は果たしてどうなのだろう。

とはいえ、真つ先に冒険者なのかと確認するということはだ、冒険者というのは彼らにとつて一種の希望といえるものなのかもしれない。……国軍や領主の軍が出てこないあたり悲しいところではあるが。

とりあえずは村人を安心させ、冷静にするのが大事だ。興奮と喜びで変な行動を起こされてはかなわない。まずは何事も挨拶からだ。

「俺の名は……ルイス、ルイス・ローデンバッツハだ」

「き、貴族さま……!?!」

「すまないが俺は家名こそあるが貴族位も無い一介の旅人だ。そして冒険者でもない。だが、かつてある軍に属して一隊を率いて野盗や反動勢力と戦っていたこともある」

「お、おお……!」

「野盗の多くは無力化してある。だがすべてが終わったわけじゃない。今は静かにしているんだ」

「ああ神様……! ありがとうございます!」

「礼はいい。命がけで俺に助けを求めてきたヘレンに言ってくれ。つとそうだ、皆はモンスターを役でできる人物に心当たりはあるか?」

「そ、そういうことができる人がいるというのは聞いたことがあります……!」

「だったら話が早い。俺の従えているコウモリたちを見張りにつかせる。……俺に何かがあればコイツが知らせてくれるから、その時は逃げ出せるようにしておいてくれ」

もぞ、とロープの下から一匹のコウモリが姿を現す。チチ、と軽く鳴いてから木箱の上に座り込む。小さいとはいえレベルにして40はあるコウモリたちだ。この見た目で麒麟の子どもであるキリよりレベルが上なのだからあの野盗どもに対して過剰戦力もいとところだ。

『にんむふくししょう! むらびとのごえいにつき、てきせいせいりよくからまもるので

すー!』

「いい子だ。頼むぞ」

『いいなー』

『うらやま、うらやまー』

『ボクたちは？ ボクたちにもナデナデしてー』

「全部終わってから撫でてやるから待つてなさい」

一匹撫でてやると他の子まで騒ぎ始める。頼むからロープの中でもぞもぞ動き回るのはやめてくれないか。割とくすぐったいのだ。

「し、シヤアアアベツt……」

「アードルフ、静かに!」

「……コウモリって喋るんだな」

「でも、キモいと思つてたけど、こうしてみると意外とかわいい……?」

「いやでもさ、コウモリだぜ?」

怖がられるものかと思つたが存外そうでもないらしく一安心だ。不思議なものを見た感じはぬぐえないが、恐怖心で逃げ出しなかつたのだからまあいいか。

「俺はこの後他の倉庫と中央の広場の野盗を処理する。他の野盗は捕えてあるが、念のためあまり動かないようにしていてくれ」

「ルイスさんだったか、聞いてくれ。俺の娘が二つ先の倉庫に連れていかれちゃったんだ……まだ結婚したばかりだったのに……!」

「俺のこの子もだ……! あいつら、若い娘を犯して楽しんでやるんだ……!」

「僕の娘なんてまだ10歳になったばかりだった! なのにあいつら、我先にアリのように寄ってたかって襲いやがった……!」

「わかった。俺も娘を持つている身だからその気持ちはわかる。俺が相応の報いを与えてやるさ!」

「もし俺たちにできることがあれば言ってくれ。あんたの助けになるんなら喜んでやってみせる!」

「……ありがたい。普通は巻き込まないためにも“気持ちだけでも嬉しい”と言うべきなんだろうが、正直俺一人じゃ捕えた野盗全員の面倒を見切れない。手を借りるときはコウモリを経由して伝えよう!」

俺の娘、レーナがもしもそういうものに巻き込まれたなら……俺は決して許しはしないだろう。捕えた後、死を懇願するほどの拷問にかけて生かしながら、じわりじわりと骨の髄に沁み込むまで悔恨を味わわせてやる。

コウモリを出して再び偵察。倉庫の中に居る6人と、周囲を見張る野盗が3人。気だるそうに見張りを続ける三人を音もなくダガーで始末し、〈飛行〉を使って屋根の上へ。

換気のためらしい木枠の窓を開けて内部に侵入し、足音に注意しつつ下の階への梯子の
ところから下を覗く。

「あつ——」

不意に、仰向けで寝転がる裸の少女と目が合う。咄嗟にジエスチャーで「静かに」と
伝える。

「おい、何してやがる」

「——ひつ、あ、やめて、来ないで！」

マズイ、野盗が彼女に感づいた。警戒されるよりも前に仕留めたかったがやむを得な
い！

「ぐべらっ！」

梯子がかかる枠を掴んで支点にし、飛び降りる勢いのままに野盗の頭を蹴り飛ばす。
ぐりん、と首が一回転した野盗はしめやかに倉庫の片隅にご退場。まずは一人だ！

「クソツッ！ 侵入者だ！ 敵襲！ 敵襲！」

勢いのまま吹き飛んだ野盗。入れ替わるように着地し、左手の指先に挟んだ投げナイ
フを勢いよく投げつける。投擲速度のせいかな、弾丸の如く飛んで行ったナイフが野盗の
眉間と心臓を貫いて二人を壁に打ち付ける。これで三人！

「ぐはっ！」

「あぐつ、ち、くしよ……」

「ドン！ エドガー！ クソツタレめ！」

下半身丸出しのまま剣を抜き放つて切りかかってくる男。ぶらぶらと揺れる十二と正反対に真つすぐに剣が振り下ろされる。右手のショートソードを振り上げて受け止め、左手のダガーを野盗の下半身に突き刺し、柄を蹴り込んで押しのける。これで四人！

「動くな！」

声のほうへ顔を向けるとランタンの明かりで照らされた鈍色の輝きの短剣が少女の首元に突き付けられていた。汚物と白濁と自らの血にまみれた少女は髪を引つ張られたまま力なく野盗のなすがままになっていた。

「剣を捨てろ……でなきやわかるよなあ？」

「へへッ、こつちは二人だ。お前が何かしようとしても殺すほうが早いぜ？」

「け、劍士さん……私は、いいから……！」

「黙つてろ！」

「ぐつ、うう……殺して……お願い、お願いします……！」

身動きする体力も気力も失われているのに、彼女は抵抗をあきらめていない。自身はどうなつてもいい、だからこの二人を殺してくれという懇願が聞こえる。

「なら……スキル発動〈死^{エイ}せる勇者の魂〉」

「は？」

「ふあつ!？」

「これでこつちも二人だ」

白い光が人の形をとって現れる。その背景に目を奪われた瞬間、同時に駆け出して一瞬で野盗が手にしていた剣を払って一本背負いで投げ捨てる。すかさずショートソードを心臓に突き立てて息の根をとめて、先ほど蹴り飛ばした虫の息の野盗にも平等の死を与えてまわる。

「……すまない、危ない目に合わせたな」

「いえ……ご無事でしたら、何より、です……」

捕えられていた彼女たちの様子を見てわかったが随分衰弱している。以前にも野盗に襲われたというヘレンの言葉から察するに、おそらくここしばらくはかなり生活が厳しかったのだろう。

「みんな、これを飲むといい。ポーシオンだ」

「あ、赤い……ポーシオン？ 血じゃないですよね……?」

「青いのが普通のポーシオンだと思ってた……」

これはガバったかな……? どうやら一般的なポーシオンは青色なようだ。とはい

え出してしまった以上は言い訳できない。何かいい方便はないか？ もっともそれっぽく、しかし違和感のない理由、言い訳を考えないと。

「あー、それは、な、実は以前潜った洞窟で見つけたポーションなんだ！
魔法詠唱者にマジックキャスター鑑定してもらったが確かにポーションだ。俺も実際に使ったことがある」

ただし他人にだけだな！ 実際はヒビキが作ったポーションで、高難度ダンジョン攻略時の余り物だ。

「……じゃ、じゃあ……ええいつ！」

赤毛の少女が観念したのか一気にポーションを飲み干した。

「……お、おお……？ す、すごい……！ 体が軽くなつたみたい……！ 今すぐ麦の収穫に出られそうなくらいです！」

「ほ、ほんとう……？？」

「本当だつて！ アイナも飲んで！」

「じゃ、じゃあ……んぐつ！ ……ふ、ふわああ……し、しゅごい……体があつたかくなる」

——なぜか恍惚とした表情になった。媚薬の類ではないはずなのだが。とにかく他の子もリアクションは様々だが強張った表情が緩んでとろんとした表情になった。

ヒビキがゴーレム作成に関連するものとして錬金術師を取っていたのもあって、とり

あえず予備でもらったポーションだったが他の効果があったか確かめるためにアイテムボックス内に手をつ込んでみる。

〈名称：ハイブリッドポーション〉

効果：HP30%、MP15%回復

製作者：ヒビキ

フリーテキスト：愛しのユウくんもコレ一本あれば元気ピンピン！ 朝でも夜でもバッチリプレイ可能に！〉

ヒビキイイイッ！ お前エエツッ！ オオオオマアエエツッ！

製作者のコメント欄に何書いてくれちゃってんのオオオオツッ!? いやこんな事態想

定外もいいとこだから仕方ないけどさあ！ それでももつと他のことあるだろオオツ

!?

「出てこおおい！ 居るのはわかってんだぞ！ 出てこなければ人質を一人ずつ殺し

ていくぞ！」

「チツ、バレたな……行くしかなさそうだ」

盛大に頭を抱えていたところに怒号が聞こえる。コウモリ経由で広場のほうで動きがあったことが伝わってきて、一人の男の首が撥ねられたらしい。

……どうやら本気なようだ。これ以上被害を増やすわけにはいかない。相手の思惑

に乗ってやるしかないだろう。念のために（死せる勇者の魂）で分身体を出して待機させておこう。いざとなればコウモリ軍団にも出張してもらう必要があるそうだ。

「第四分隊、第一分隊と合流し全員散らばって敵の近くで待機しろ。……仕掛ける際には合図を出す。合言葉は『死を届けにきた』だ」

『ラジャー！ 第四分隊、任務復唱！』

『ちらばっててきのちかくでたいき！ あいことばでこうげきかいし！ ちかづけないならそのままたいき！』

「行け。気取られないように、奇襲可能な距離へつけ。気取られる可能性があるなら近づかずに待機し、攻撃指示を待て。それと彼らに連絡を頼む」

さて、勝負どころだ。どの道残っているのは中央の野盗どもだけだ。……村人に恐怖を与えるかもしれないが、これ以上犠牲者を出さないためには手段を選べない。コウモリたちを動員すれば問題なく始末できるだろう。あとはタイミングを逃さず、一息で全滅させるだけだ。

野盗の剣が一闪、その軌跡が一つの命を奪い去った。

「ぎゃああつっ！」

「イエルド！ くそおおおつっ！」

「サムエル村長……！ もう俺たちは……」

イエルド、先日風車小屋のヘレンと婚約したばかりの農夫の青年が冷たい骸へと変わった。襲撃の折にはノーラの夫であるシモンも殺された。年若い夫婦が、明るい未来を築いてほしいと願っていた者たちが死んでいく。

「そこまでにしてもらおうか」

低く、威厳と覇気に満ちた声が広場に響いた。まるで声そのものが圧力を持つかのように、広場のあちこちに焚かれた篝火や松明が風に揺れる。その薄明りが照らす広場に歩いてくる一人の男の姿が目に残る。

厚手のローブを身にまとい、見える部分は多くが革製で部分的に鋼鉄で覆う軽装の戦士。薄い鉄板を加工したらしい小型のガントレット。ローブから覗く一振りの剣を携えた彼の視線が私たちを貫く。

黄金の髪と赤い瞳。精悍な顔つきの凛々しい青年と言っているいい男が私を見て言う。

「御老人、ご心配召されるな。問題ない」

不思議と恐怖感はない。ああ、大丈夫だ。むしろ安堵感を感じるほどに彼の言葉はすつと心の中に響いてきた。

「この野盗の首魁はお前でいいのか？」

「ああそうとも。わかったら剣を捨てろよお坊ちゃん。俺はそこらへんの甘ちゃんとは

違うんだ」

「フム。まあいいだろう。ほら、これでいいか？」

何のためらいもなく剣を捨てるなんて！ これでは彼が殺されてしまうだけだ！

「へへ、言い残すことはあるか……？」

野盗の首魁が彼に剣を突きつける。ニヤニヤと下種な笑みを浮かべているが、剣を向けられている彼は余裕綽々と言わんばかりに笑みを浮かべるだけだ。

「特にないな。ちようど引き取り手も来たようだし、言っておこう。……死を届けにきた」

パンツ、という乾いた音と共に、撥ね退けられた剣が私の目の前に転がる。見れば野盗の手にはすでに剣は無く、青年は目で追うことさえできない早業で野盗をぐるんと投げ飛ばして後ろ手に腕を捻って抑え込んでいた。

「いつ、ぎ、ふう、ぬうんっ！」

「諦めろ。お仲間も見ての通りだ」

いつのまにか周囲に陣取っていた野盗たちが取り押さえられていた。しかも取り押さえたのは村の女衆や成人前の少年たちだ。いかなる方法を使ったかはわからないが、戦う力を持つ野盗がいともたやすく非力な者たちに取り押さえられていることに愕然とする。

「よつ、と……これでもいいか」

おそらくこの状況を作り出しただろう青年は何事もないかのように野盗の首魁を縛り上げ、乱雑に放り投げて寝転がすところらに近づいてナイフを取り出した。

「ほら、縄を斬るぞ。さつさとこいつらをどこかに閉じ込めて領主の軍なり憲兵なりに引き渡さないといけないんだ。すまないがみなの手を貸してくれ」

「あ、あの野盗たちは、どうして」

「なに。ちよつとした毒を与える低位階の魔法だよ。痺れて動きが鈍る程度のな」

驚いた。武器を持った野盗を素手で組み伏せる実力を持ちながら、魔法の才まで持っているとは。後ろ手に縛られていた縄が切られ、圧迫感が消える。目の前に翳した手は手首のあたりが縄で擦れたりして傷だらけだが動かさないわけではない。

倉庫に囚われていた隻眼の男——私の親友のアーロンが他の男たちを解放していくのを見ていたところに声がかかる。

「あんた！ 無事だったかい!? ああ！ もうこの村も終わりかと……！」

「すまんなバーバラ……心配をかけた」

夫婦となつて二十年。共に村の発展と平和のために二人三脚で歩んできた愛しい妻を再び抱きしめることができるなんて！ 以前はいつものように抱きしめていた彼女の温もりが、今日は何故か一段といとおしく感じる。

「すまない、村長殿。喜ぶのは少々後にしてくれ」

「む！ こ、これは失礼いたしました！ まさか助かるとは思ってもみなかったもので……！」

「違う、そうじゃない」

剣士の青年が投げ捨ててあつたショートソードを手に取り、村の入り口のほうへと視線を向ける。険しい表情と威厳のある低い声で否定され、何事なのかと彼と同じく入り口に目を向け——その姿をはつきりととらえてしまった。

「よう、お前さんがコイツら全員やつちまったのか？」

「まさか。村人たちの協力あつてこそその成果だとも」

「ほう。この俺に気付かせることもなくか？ だとしたらその言葉は随分と謙遜が過ぎるんじゃないか？」

「フム、気付かないほど遠くに居たからじゃないのか？ 村のはずれに一人で居たんじゃ気づかないのも当然だろう？」

「いやいや俺はこう見えて割と勤がいいほうだな。この村の中で何かあれば一発でわかるさ。なのにその俺に何一つ気取らせないでこうも手際よくコイツらを制圧してみせたんだ。お前さん、只者じゃないだろう？」

「そういう貴殿こそ只者ではないようだが？」

軽快に対話しているように見えるが二人の距離は一定を保ったままで、体を動かす素振りすらない。相手をただじつと観察するように見ながら言葉を交わす様子はただひたすらに警戒心で埋め尽くされている。

その様子に気付いたらしい他の村人たちは恐怖に慄いて距離をとり、気づけば自然と広場に円陣ができあがっていた。

「名乗っておこう。俺は、ブレイン・アングラウス。一応、こいつらに雇われて用心棒をしている」

ブレイン・アングラウス！ まさか御前試合でかの王国戦士長ガゼフ・ストロノーフと互角に戦ったと言われる男がこんなところに居るだなんて！ ハツタリではなく本物ののだとしたらいくらなんでも危険すぎる！

「名乗られたならば名乗り返すしかあるまい。ルイス・ローデンバツハだ。……なるほど……刀使い……しかもなかなかにやれるようだ」

「ご名答。随分目がいいな」

「目利きはそこそこできるクチでね。それで用心棒のブレインさんが何の用だ？」

「二つ、ヤろうじゃないか。俺が勝てばこいつらを解放してもらう。お前さんが勝てば俺たちはお縄につく。わかりやすいだろう？」

「——乗った」

「なっ!? 正気ですか剣士さま!? 相手はあの——!」

「正気も正気だ。……それに、見様見真似の刀使いに負ける気は毛頭無い」

大胆不敵にもほどがある! 王国最強と言われる男に匹敵する剣士に見様見真似など! 挑発以外の何物でもない!

手にしていたショートソードが不意に消えた。目の前で確かに握っていたはずであるというのに、そこにあるのは鞘に収まった、反りをもった一振りの剣に代わっていた。

「……刀使いか?」

「刀使い? 阿呆め。高村派一刀流極伝、朝……ルイス・ローデンバッハがお相手仕る!」

「まさか……本物の剣士か!」

「然り! ブレイン・アングラウスとやら、その力の底を見せてみよ!」

「つ……上等オオツ!」

二人の剣士が己の剣を抜き放つ。ブレイン・アングラウスの剣は月明りを帯びて鈍く輝き、ルイス殿の剣は炎を映して赤くゆらめく。

これは、大変なことになる。ともするとこの瞬間こそ、新たな英雄の出現であるかもしれぬ。そんな予感がする。

T u r b u l e n c e

篝火の焚かれた村の広場の中央で剣を抜き放つ二人の男の間に緊張感が走る。固唾をのんで見守る村人たちをよそに、男たちがゆつくりと剣を構えて己の得物を向けあう。

片方は黄金の髪と赤い瞳の剣士、ルイス・ローデンバツハ。野盗に襲われたこの村を救ってくれた紛うことなく我々にとっての英雄は、革鎧と金属鎧を部分的に組み合わせた重ね着で、ローブを纏う姿からしてもまさしく旅人という風体だ。

もう片方は青い髪と黒い瞳の剣士、ブレイン・アングラウス。野盗に用心棒として雇われたらしい、リ・エステイゼでも一二を争った剣士の片割れ。普通のシャツに普通のズボンという軽装だが、その腰に収まった白塗りの鞘から抜き放たれた剣はまさに名刀だ。

「あんだ………いつたいどなつちまうんだい………」

「わからん。……俺にもわからん………だが、どちらかが死ぬということはわかる」

金の影は刀を地に向け、青い影は正面に真つすぐ構える。お互いの目は目の前の敵にしっかりと向けられていて、広場を囲む人々が見守る中でただ時間が過ぎていく。

「おーい！ 村長！ みんなを助けてきたぞ！」

背中越しに聞こえた呼び声。その瞬間、均衡が崩れた。

振り下ろした剣が軽々と受け止められた。いや、俺が動き出して振り下ろすまでの間にあのルイスという男は先んじて剣を振り上げたのだ！ 出がかりの一瞬、刹那の時をまるで予期したかのように剣を振り上げ、速度と威力が乗る前に受け止めて見せやがった！

「くっ！」

キンツ、という甲高い音と共に弾かれるように押し出された剣を手元に戻し、振り上げからの切り下げを受け流す。返す刀で突きを二回。ヒュウ、と風を切るように突きを放つも、これをヤツは読み切ったように身をよじり体幹をずらして回避される。

「ハッ！」

姿勢を崩した、と思われた回避からの踏み込み。逆に下から突き上げるように放たれた突きが俺の心臓にめがけて放たれる。咄嗟に右足で蹴って跳び、ごろごろと転がるように剣を逃れる。

……やはり強い。この男を相手に武技抜きでやりあうのは自分の死を早めるだけで

しかない。全力を懸けるに値する強者だ！

踏み込みと同時に片手で突きを見舞うものの半歩ほどヤツは足を動かして一突きを回避する。二度目の突きも同じように木の葉の舞うような緩やかな動作で回避される。

「クソツ！」

「落ち着け。闇雲に突いたってあたりやしない」

切り上げてから振り下ろす三度目の突き。それも突き下ろすように、ヤツの右腕を狙って放った一撃はヤツが無造作に薙ぐように剣を振るうと同時に払われる。剣の腕については俺はまだまだだが、居合いと突きの速さには自信があったのに、「こんなものか」と言わんばかりに悉くが回避され、いなされ、かすり傷どころかヤツのローブにすら触れられない！

「フウウツ、ハアア……」

「どうした息切れか？ 持久力不足だな」

「フツ、ハアツ……あいにくだな、フウツ……俺はここからだ！」

甲高い剣戟のぶつかる音とただ空を切る刃の音色が広場に響く。入れ替わり立ち代わりで剣をぶつけ合う。暗闇の中で篝火の明かりが刀身に写り込むたびに、目の前の男の底知れない技量に身震いが止まらない。

「ちよこまかとっ！」

「頭に血が上つてるんじゃないのか？ 冷静でなけりや勝てる戦いも勝てないぞ」

「俺を舐めたやり方をされて腹を立てないわけねーだろ！」

「それは失礼。じゃあいくぞ！」

キインツと弾かれるばかりだった刀身が突然に、するりと何の手ごたえもなく弾かれる。受け止められた？ 違う、弾かれたわけでもない。じゃあ今のは——？

「突きを二回だ」

「——つおおおオオオツ！」

思考する暇もない！ 一瞬で眼前に迫る白刃の煌めきを横つ飛びで避けるが、ピュウツとシャツを裂いて刃が脇を掠める。二回目の突きを峰に左手を添えて受け止め、誘いを含めて小刻みに振り下ろしと左薙ぎのコンビネーション。せめて手傷を——そう思った右薙ぎもヤツが引き戻す最中に右手から剣を手放したことで空を切るに終わる。

「別に右手で振るだけが能じゃないだろ？」

まるで引き寄せられるかのようにヤツの左手に剣が収まる。俺が薙ぎ払うのに追隨するように、ヤツの左薙ぎが走る。

汗が止まらない。ヤツの剣を受ける度に息が荒くなる。どれだけ小手先の技術を駆使しても容易く上回られる。所々に武技〈領域〉を使ってまでカウンターを打ち込んで

いるというのに、それでも動きを捉えられないなんて！

「ま、だただであつ！」

「よく避ける！」

「俺だつて修羅場は潜つてきた！」

直感に従つて寸でのところで体を引き戻し、振り切る寸前の剣の勢いのままぐるりと一回転。勢いを乗せてそのまま薙ぎ払うと、ヤツは峰に右手を添えてかちあげるように俺の剣を弾く。そのまま踏ん張つて振り下ろし、振り切つた剣を右下から左上への切り上げに繋ぐ。そしてそのままぐつと引き絞り突きを放つ。

だがそれも回避され、突きは当たり前と言わんばかりに相手の刀でいなされて弾かれる。お返しと言わんばかりに手首を狙つた一刀をバックステップで距離をとつて回避。右腰に構えなおして右から左への薙ぎの一閃。牽制にと放たれた剣を受けたのを見て、即座に足元を払うように返す刀で切り払う――

「ふっ！」

「……うっ!？」

斬れる――そう確信した足元への切り払いは空を切つた。先ほどまで見えていた足先はどこにもない。

ヤツは両腕を広げ、
“地にかがんだような”
姿で空中に跳ぶことで振り抜かれた剣を

紙一重で避けて見せたのだと刹那の一閃の中で理解した。その姿はさながら獲物を狩る大鷹や梟が翼を広げて襲い掛かるようで、今の俺はまさに狩られる側なのだ。直感でわかった。

「っ、おとおおっ！」

ヤツの腕が真上に伸びる。空中で振り上げられた、赤い炎の揺らめきを映す刃。そのままヤツの足が地に着けば同時に振り下ろされた剣が俺を両断して過ぎ去る。まだ、死にたくない。俺はまだ死ねない。剣を極めるまで、ここで死ぬわけにはいかない！

「避けたか!？」

ぐるぐると視界が回る。無様にも、みつともなくも、恥も外聞も投げ捨てるように身を投げて剣を寸でのところで避けきった。ギャラリ〜どものざわめきもさっきの一瞬、命の駆け引きの瞬間の前には虫の音も同然。それほどにまで俺はヤツの剣に集中しきっている。

だが今の手でおよそ力量はわかった……相手は余裕さえあるほどの巧者だ。正面からの剣の腕では俺は太刀打ちできない。いなされ、払われ、返す一手で両断されてしまいうだろう。で、あれば全速全力を以ってヤツの剣が俺に届く前に斬り捨てるのみだ！

「武技〈領域〉」

「……………そいっけいっけい」

「俺のオリジナルの武技さ。使うからには決める。悪く思うな」

見るからにヤツの警戒心が増している。見たことが無い武技だとわかった瞬間に肌を刺すような威圧が増した。圧倒する力、上を行く技量、確かにヤツは俺よりも強いが……俺は自身の研鑽がヤツを超えることができるという自負がある。

この場に至るまでに鏑迫り合いのような力押し拮抗は一度たりとてなかった。ヤツは全ての剣を読み抜いて見定めるように回避する。回避しない場合も力任せではなく、弾くのに最適なタイミングで俺の剣を弾き返す。

——俺は、試されている。ならば全霊を剣に賭して挑むしかない！

「居合いを使うか」

「そうか、『イアイ』というのか、これは」

「ああ。ならば俺も迎え撃たねばなるまい」

俺が鞘に剣を収めると、ヤツも剣を鞘に収めた。周囲のざわめきが大きくなる。ようやく争いが終わるのだと思っているがそれは違う。鞘に収めたのは、確実に敵を斬るため、でしかない。

再び柄に手をかける。するとヤツは親指で鏑を押し、僅かに刀身を押し出してみせた。あれだけの使い手が何の意味もなくするとは思えない。剣がここにあると見せつけて気を引くためか、あるいは剣の長さを誤認させるためか……どちらにしても俺が先

に切ればいいだけの話だ。

「お前、雇われだったな？」

集中力を高める……その中で不意にヤツから声がかかる。

「……そうだが？」

「なら、雇われる気はあるか？」

「お前さんに？」

「いいや、この村にだ。今後二年間、村の用心棒として働いてもらう。報酬は前払いで

……この刀でどうだ？」

「……なんで今そんな話をする？ お前さん、死ぬかもしれないんだぞ」

「なんでって言われてもな。俺が勝つからに決まっているだろう？」

「……ふざけてんのか、テメエ」

いかん、これはヤツの策だ。集中力を殺ぐために仕掛けてきただけのことだ。感情に吞まれずただあのそつ首を撥ね落とすだけだ。〈領域〉は十全に働いている。ヤツも剣に手をかけてじりじりと射程内に収めようとにじり寄っている。ヤツの足先、そこさえ俺の領域内に入ればそれで十分だ。

あと一步だ。あと一步で領域はお前を捉える。

——じり、と足先が地を擦る。

あとリンゴ二つ分だ。赤い華を咲かせてやる。

——じり、と足先が地を擦る。

あと一つ、野イチゴが一個分。もう少しだ。

——じり、と足先が地を——

……捉えた！

「ハアアアアアアッ！」

一瞬で引き抜かれた剣の軌跡が翔ける。一直線に、ヤツの頸を切り落とさんと走り始

め——

「むんっ！」

空を翔ける鳥よりも早い閃光が走った。バキンッ、と鈍い音を響かせて鈍色の欠片が宙に舞う。鞘の内から引き抜かれたヤツの剣が一閃し、俺の剣を砕いて過ぎさつたのだと遅まきながらに理解した。理解できてしまった。

打ち上げられ、半ばから折れた俺の愛刀。その折れた切っ先が空を舞って俺の傍らに転がる。剣を振り抜いた姿勢からゆっくりと体を戻し、その剣を鞘に納めたヤツは不敵に笑みを浮かべた。

「ほうら、俺の勝ちだ」

……武器が無いのでは意味がない。剣を折られたのでは打ち合えない。いや、それ以上……俺の中でもっと大切な何かへし折られたのだ。プライド、努力、研鑽、決意、意地、今まで信じてきた何かが圧倒的なナニカによつて完膚なきまでに打倒されてしまった。

「——ああ、俺の負けだ。二言は無い。もっていけ」

完膚無きまでの敗北。ただ跪いて死を受け入れるのみだ。自分は善人ではないし、むしろ悪党の類と呼ばれてもおかしくはない生き方をしてきた。後悔はないが、心残りなのは剣の極みへと至れなかつたことだろうか。

「じゃ、コイツをお前にやる」

「……いや、俺は負けたんだぞ。剣の勝負で、命を懸けて、負けたんだぞー！」

「だからさ。俺がお前の命を拾った。だからお前に仕事をしてもらう。それでこの剣は報酬の前払いだ。剣も無しに用心棒をしろなんて言うほど薄情じゃないんだ。

負けは負けだ。つべこべ言わず、その拾った命を押し付けられた仕事のために使ってもらおう」

「いいのか？ 俺はあいっら……野盗同然の傭兵に用心棒として雇われてたんだぞ？

そんなのをいきなり雇って村に置くんぞ、村の人間が認めないだろう」

俺を打ち負かしたルイスという男は手にしていた刀を鞘ごと抜いて俺の前に差し出してきた。この男はここまでして一体俺にどうしろと言うのだろう。

「普通はそうだな。だがお前は剣にすべてを懸けた……そうだろう？ 別に剣を折られただけなら逃げるもできたし、なんなら人質を取るくらいはできる時間があった。けどお前は逃げることもせず、自身が負けたと認めて頭を垂れた。剣に殉じる覚悟があるのだ。なら剣に誓うくらいもできるだろう？」

「……ハア、敵わんな。お前さん……いや、師の温情に感謝する」

「……どうしてそうなるんだ？」

「命を救われ、刀まで授けられたんだ。おまけに剣の道も見えた。なら師と呼ぶべきだ

ろ？」

はあ、これから二年間はタダ働きだ。しかし授けられたこの剣は俺が元々持っていたものよりさぞ上等なのだろう。この剣に懸けて、俺の剣を信じてくれた師のためにも、務めを果たさなければな。

「……村長さんよ、この戦い……俺の負けだ。この命、如何様にでも好きに使ってくれ」俺から受け取った剣を村長の前に置き、ブレインが頭を下げて自身の負けを宣言した。ヤツ自身は憑き物が落ちたような、どこかスツキリした雰囲気さえ感じるがいきなり頭を下げられた村長は見るからに動揺が隠せていない。

しかし奥さん後ろから突かれて決心したのか、剣を取り上げてブレインに言う。

「正直、あなたの言葉は……すぐには信用できない。我々はまさにこの野盗どもに虐げられ、奪われてきたのですから。恩人であるルイス様のお言葉があるとはいえ、そこは何も変わりません」

「……そうだ、ブレイン・アングラウスだろうが、俺はアンタなんぞ認めねえ！」

「あたいだってそうだ！ あんたが用心棒してたのは人殺しどもだ！ そんなやつが今さら何を言ってるんだか！」

「どうせただの命乞いだろ。さっさとその首撥ねちまえ!」

「あの金髪のヤツだつてグルかもしれないんだ。ブレインと組んで狂言を仕掛けてるんじゃないねえのか?」

ブレインの言葉も空しいものに終わった。今の村人たちは怒りを向け、不信任を募らせている。今のこの状況を覆す手は無いだろう。信用や信頼というものは日々の積み重ねの中で生まれてくるものだ。それを今日会ったばかりの人間に信用しろと言つたつて暖簾に腕押しでしかない。

「待つてください!」

不意に俺の前に一人の女が飛び出してきた。襤褸切れで身を隠した程度の華奢な体、こげ茶色の長い髪の少女と言つていい女。それに続くように数人の少女たちが俺周りを囲むように円陣を組んでいる。

「エミリアちゃん!」

「アルヴィンとこのマリアンちゃん!? それにフーゴのとこの娘っ子まで!」

「何をやってるんだ!?! そいつらから離れなさい!」

「いやです! 絶対に離れません! この人は私たちを助けてくれた人です!」

確かこの子たちは先ほどあの倉庫で助け出した少女たちだ。最低限身なりを整えた程度のみまでここに来るなんて! 裸足だし寒さも感じているだろうに。それなのに

俺が疑われているのを見て飛び出してきたのだろうか。

「この人は……私たちを犯していた野盗たちに報いを受けさせ、しかもダンジョンで見つけた貴重な水薬ポーションを使ってまで私たちを助けてくれた人です！」

倉庫に居た6人もの野盗を相手に命がけで戦って！ しかも人質にされた私を傷つけることなく救い出してくれたんです！ 野盗相手に戦うなんて、自分が一番危険なことをしているのに……！ なのに、見ず知らずの私たちに「危険な目にあわせてすまない」とまで言ってくれた人なんです！

「この人がお金や食料目当ての卑しい人じゃないことは私たちが証明します！」

まだ幼い子もいるというのに、足が震えているというのに、この子たちは周りの大人たちに一歩も引かずに向き合っている。子どもらしい純粹な好意は美徳だし嬉しいものだけれど、果たしてそれが周りの大人にまで通用するのだろうか。

そんな中で一人の男……倉庫で俺に話しかけてきた男が人の輪を掻い潜って前へ歩み出てくる。

「おい！ おい！ エミリア！」

「……お父さん」

「あ、ああ……よかった……！ エミリア、エミリア……！」

感極まったのか、エミリアと呼ばれた彼女は父と涙ながらに再会を喜び合った。人目

も気にせず抱きしめ、愛おしそうにお互いの無事に安堵している。

「辛い目にあわせて、すまない……！ お父さんがもつと強ければ……こんなひどい目には……」

「大丈夫、大丈夫よお父さん。……ひどい目にはあつたけど、この方のお陰で命が助かったんだもん」

「ルイス様、娘たちを救い出してください、まこと感謝の至りにございます！」

「……確かに受け取った。といつても俺自身にとつては昔取った杵柄というものだ。軍に居た頃の経験と技術が役に立つと思つてやったことだし、何よりあの子に……ヘレンに助けを求められたからに過ぎない。それに犠牲者を防げたわけでもない」

「いいえ！ 犠牲は何をしようとか確かに出たでしよう……ルイス様が襲撃に立ち会つていたとしても、あの数をたつたお一人で抑えるなど土台無理な話です。二人、三人と野盗を殺している間にも、他の奴らが村人を殺してまわつたはずですよ。どうかご自分を責めないでください」

俺に向かつて感謝する二人を見て、村長は一步步み出て咳ばらいをする。今しかないと思つたのか、その態度は先ほど妻に背中を突かれたときと打つて変わつて堂々としてゐる。

「うむ、皆もよく聞いてほしい。ルイス様は過程はどうあれ住民の多くの命を救つてく

ださったお方だ。あのままでは皆殺しの憂き目にあつていただろうことは火を見るよりも明らかだ。

今はまだ皆が納得はできぬというのは私にもわかる。だが彼が己の命の危険さえ顧みずに剣を振るい、我々を救うべく戦つてくれたことは確かな事実だ。だというのに我々がルイス様を悪し様に言うことは道理を違えた行いであるとしか言えん。

まずは死んでいった者たちを弔い、然るべきのちに改めてお話を伺おうではないか」

「……村長がそう言うのなら……今は控えよう」

「けど、そいつをほつたらかしになんてできるのか？ ブレイン・アングラウスなんて、逃げ出しでもすれば俺たちじゃ……」

ひとまず村長はことを収めようとしたが、ブレイン・アングラウスというネームバリューが思いのほか大きい存在だったらしく、村人たちから色よい返事が聞こえない。一様に不安を口に出しているのも無理からぬことではあるし、ただの村人が腕の立つ剣士であるブレインに敵うわけもないのが事実だ。

「それについて、一つ俺から提案がある」

「……どのようなのです？」

「ブレイン・アングラウスをこの広場の中心で瞑想させる。もちろん飲まず食わずでも足させず、雨が降ろうと石を投げられようと動かずに。姿勢が崩れたらすぐに元の瞑

想の姿勢に戻す。……できるな？」

「しかしそれでは逃げ出すのでは……？」

「俺が見張る。逃げようものなら背中から斬る。眠ろうものなら頭を叩いて目を覚まさせる。ひたすらに瞑想を続けさせ、逃走の意志が無いことを示す。……その結果を見て、処断するか村の者で決めるといい。やれるな、ブレイン・アングラウス？」

「——この剣に誓おう」

言うや否や、ブレインは静かに姿勢を整えて村はずれでやっていたように瞑想を始めた。剣を取り上げた村長は俺を一瞥したが、何も言わずに村人たちに向き直った。

「では皆は死んだ者たちを弔う準備を。……彼らが不死者アンデッドにならぬよう、直ちに火葬を行う。アラン、イエリク、メルケルはここで見張りに。自警団の者たちはアーロンに従って火葬場の用意を。他の男たちは野盗どもを縛り上げて倉庫へ。女子供は休んでおきなさい。……では各々のなすべきをなすように。以上だ」

村人たちが散っていく。朝日が顔を出し、新しい一日が始まるが……彼らにとつては苦難の始りではないだろう。それでも前を向いて彼らが立ち上がることができるように、今はできることをするしかない。

救ってしまった責任が俺にはあるのだ。彼らの命を救ったからには、放つたらかしになどしてはならない。彼らが立ち直れて初めて、その責任は果たされるのだから。

『ヒビキ、聞こえるか?』

『ユウくん! 遅いよおもう!』

『……村の安全は確保した。ヘレンに案内してもらえ』

『わかった、すぐそっちに行くからね!』

ヒビキの不満げな声を聴いて安心しかけたがここで気を抜いてはいけな。ブレインをしつかり見張る必要があるのだ。

「ユウくん! ああ、もう会いたかったよお! ……で、なんで構えたままなの?」

「いろいろあるんだよ。それと抱き着くなヒビキ。レーナはどうした?」

「キリが背負ってるよ。ほら!」

ヘレンの先導で歩いてくる麒麟の姿に村の人々はぎよつとしていたが、背中ですやすやと眠るレーナを見て少し安心したのかすぐにため息をついて見送っていた。いつの時代、どんな場所でも、子供の寝顔というのは人に安心感を与えるものなのかもしれない。

『ご主人、レーナが寝てしまった』

「だろ。ヘレンさんだったか、名乗らずに行っちゃって申し訳ない。ルイス・ロー

デンバツハだ」

「いえ! あの時は火急の事態でしたので仕方ありませんよ! それと、村を救ってく

ださって本当にありがとうございます！ ……あの、失礼ながら、どういう状況なんですか？」

ヒビキもヘレンも今の俺たちの状況を見て啞然とするばかりだ。まあ、腰の刀に手をかけて抜刀する構えのまま立つ男と、その目の前で瞑想し続ける男の姿があつて、周囲を三人の男が剣を手に見張っているのだから、どうしてこうなった”という感想を抱いても仕方がないだろう。

「ふーん、なるほど……そのブレインっていうのがユウくんになえ」

「しかし本当に……大丈夫なんですか？」

『アタシならもうさっさと焼き殺す。危険は排除するべき』

「まあ慌てるなよ三人とも。こいつは己の命ともいふべき剣に誓ったんだ。その行いを
見てから処断するか決めたって遅くはない」

野盗を捕縛した顛末と村の中であつたひと悶着について説明すると、三人は程度にもよるが同じような疑いの目をブレインに向けた。愛娘のレーナはというとキリの背中で眠りこけたままだ。

鞍も何もないのにしつかりと眠れているあたり、ある意味ではレーナのメンタルが一番凶太く強いのではとさえ思ってしまう。

「……寝てない？」

「寝てないぞ」

「うわっ喋った!」

「ヒビキもヘレンさんも寝てきたほうがいい。眠れなかったらどう?」

「じゃあ私の家に案内します。ルイス様、それでは後ほど」

「ああ、おやすみ」

一行が去っていったのを見て再びブレインの動きに集中する。朝の冷たい風が吹き抜ける中を耐えること3時間。日も登ったところになって一人の子どもが広場に姿を現した。

「……………こいつが」

ぐつと奥歯を噛み締め、怒りの炎を瞳に宿した少年が大きく右手を振りかぶる。振り抜かれた右手から飛び出した丸いものがブレインの顔に当たり、べちゃりつつぶれる音と悪臭を放って碎け散る。

「ぐつ」

「臭せえ……牛のクソじゃねえか」

「うわ、勘弁してくれよ……」

姿勢こそ揺らいだものの、ブレインは小さなうめき声だけで元の瞑想の姿勢を続けていた。少年の怒りの一投……それが引火するのにそう大した時間はかからなかった。

「うちの旦那の仇！」

「俺の弟をよくも！」

「恥知らずの野盗どもめ！」

厳密に言えばブレインは野盗ではなく用心棒なのだが、そんなものは村人にとつてはどうだつていいことだ。行き場のない怒りを投げるものに込めてブレインにぶつけて去っていく。

汚物、腐りかけの食料、泥団子に小石を混ぜたもの、時には刈り取りのための手鎌まで飛んできたが命の危険があるものは全て切り払ってやった。中には外して俺に当てるものも居たが、俺はブレインをこの手で斬ると言ったのだ。俺が動くのは、ブレインが動いたときが終わったときだ。

「命を奪うようなものは許さん。それ以外なら好きにしろ」

その言葉が発端となつたのか、次から次へと様々なものが投げ込まれていく。糞便や木製の食器などはもちろん、食事だと偽つて毒草を皿に盛って置いていく者さえいた。あまりにひどい匂いのせいで、見張りについていた三人が交代してくれと懇願するほどだったが、交代の者も遠巻きに俺とブレインを眺めるだけで近寄ろうともしない。

「なあ、なんでお前さんまでそこに居るんだ」

正午を過ぎ、投げつけられるものがなくなつたところにブレインが俺に問いかけてき

た。

「これは、俺が受けるべきものだろう？　俺は武器もないし、見張りも居る。なのになんで——」

「……言い出しつぺは俺だ。逃げる瞬間に斬られるか、やり遂げるか。どちらにしても俺が最後まで面倒を見てやる。死ぬときは安心して死ね」

「——わかった」

吹き付ける風が砂煙をあげる。顔を覆う砂煙にもブレインはただ何も言わず瞑想を続けるのみだ。ぽつぽつと降り始めた小雨が大粒の雫となって降り注ぐものの、身に投げつけられた糞尿を洗い流すだけに終わった。

がやがやと騒がしかった夕方を過ぎ、村の中は静かな寝息と微かに漏れ聞こえる嗚咽で満たされるようになって、ヒビキとヘレンが食事を手にやってきた。見張りの三人はそれぞれ食事を始めたが、俺がここでメシを食うわけにはいかない。俺はブレインが動こうものなら斬らねばならないのだ。一瞬とて気を抜いてはいけない。

頑なに食事を食べさせようとするとするヒビキもついに諦めて食事を置いて去っていったころ、村長が休むように言ってきたがそれはできない話だと断った。俺はここで己の務めを果たさねばならない。責任を果たさねばならないのだ。

今だけはこの頑丈な吸血鬼ボディとレベル100のスペックに感謝するしかない。

飲まず食わず寝ずの番をするのはP M C時代以来だが、こんなにも体調が安定しているのはやはり肉体のスペック差だろう。

ぱちぱちと篝火の燃える音が響くだけになり、村人たちが寝静まる。見張りの交代ももう8度目だ。『まだいるのか』と言わんばかりに視線を投げかけられるものの、この程度で逃げ出すのなら軍人なぞ務まらない。

四日かけて15キロも泥沼を這って敵陣を掻い潜り反乱軍の基地を爆破したこともあった。暗闇に三日間潜み続け、ゲリラどもを皆殺しにしたこともあった。四か月もの間反動勢力の組織に潜入し、組織の頭を暗殺することだった。

暗闇の中でひたすらに瞑想し続けるブレイン。その背中を見ながらいつでも剣を振り抜ける姿勢で立ち続ける俺。その構図は二日目の朝を迎えてもなお変わらない。

なおも同じ姿で広場の中央に立つ俺たちの下にヒビキがやってきたのはそんな時だ。日の出と射し始めた陽光を背にしたメイド服の少女、ヒビキは不貞腐れた顔で言う。

「ユウくん」

「……どうした？」

「レーナ、パパに会いたいって言ってたよ」

「……明日には会えるさ。もう少し我慢しておくように言っておいてくれ」

「ボクだって、待ってるのに？」

「すまん。必ず埋め合わせる。……デートの約束もな」

「……そっか、じゃあもう何も言わない。……待ってるから」

一度だけ振り返ったヒビキは少しはにかんで一言だけ告げて立ち去った。その姿が見えなくなつたとき、不意に隣から声がかかる。

「あの子、あんたの子か？」

「いや、従妹だ」

「……女の子なのか？」

「そうだな。気の利くいい子だ」

「……そうか」

「なんだあイエリク、お前あの子に惚れたか？」

「ちつ、違うって！ あ、あの子の黒髪が、その、珍しいもんだからっ！」

「おいおい、顔真つ赤だぜ？ 恥ずかしがるなよ」

「アランのおっさん！ お、俺はそんなこと！」

「メルケル、お前もそう思うだろ？ イエリクのやつ、あの子にぞつこんみたいだぜ？」

「らしいな。ちと若いが、いい女の子だつてのはわかる。あの子の笑顔に惚れたな？」

「まあ脈は無さそうだがな」

「メルケルまで!? 決めつけてんじゃねーよ！」

「おつ、やつぱ惚れてやがった。……まあ、俺もちよつとドキツとしたしな」

「ヒビキはやらんぞ。欲しけりや俺を殺す覚悟で来るんだな」

「かーっ！ イエリク、前途多難だなこりやあ！」

俺の後ろで控えている三人が雑談に興じ始める。俺のほうからは見えないが、彼らは恋愛談議に花を咲かせ始めたらしい。ヒビキとレーナは絶対にやらんがな。

「……なああんた、本当に貴族じゃないのか？」

「本当だ。家名はあつても貴族じゃないヤツだつて居るだろう？」

「そりやそうだがよ……実は元貴族でしたつてことはないか？」

「なんでそう思う？」

「ヘレンのやつに聞いたんだが、あんたらアベリオン丘陵の向こうから来たんだつて？」

あそこは巫人種が山のように居て治安もクソもないつて聞いたぜ？

そんな危険地帯を抜けてくるなんざ高位の冒険者か何人も護衛を雇える貴族くらいなもんだらう？」

正直聞かないで欲しいところなんだよなあ。まさかユグドラシルからやつてきましたとか言つたつて理解されるわけがないし。とはいえそれっぽく匂わせつつ肯定も否定もしない回答をするしかない。

「……以前、ある地で軍の一隊を率いていた。いろいろあつて……軍を辞めて……従妹

や娘と旅をすることになった」

「———そうか……そういうことか……得心がいった。お互いに辛いものだな……」
なんか変な納得のされ方だったぞおい。一体どういう方向で納得しやがったんだこいつ。

「アランのおっさん、それってあの子が言ってた——」

「イエリク、あんな小さな子が『おうちがなくなつた』って何の違和感も無く言える言葉だと思ふか？ 自分たちが追われる身になつたり狙われることがあるつてのを、あの年ごろで既に理解して受け入れちまつてるなんて、そこらへんの平民の子じゃ無理だ。

それにこの人の剣も軽鎧も、そこらへんの安物に似てるが作りは遥かに丁寧な仕上がりで頑丈な作りだ。実用一辺倒の武具ながらあの立ち振る舞い、あのメイドの子や幼子の物分かりのよさを見りやわかる。この人、いやあの子たちも含めて確かに貴族だ。いや、『だつた』と言うべきか。

おそろくどこぞの武門の棟梁だつたんだろうさ。それがどうしてか元居た場所を追われ、生き残つたのが……」

オイオイオイツ!? そんな滅茶苦茶な話じゃねーよ！ 俺は元は一介のPMCの兵士だぞ！ 一族というかりアルの妻と娘が死んだのは確かだが、一族郎党皆殺しの憂き目になんてあつてねーぞ！

弟も無事だし両親も健在！ 叔母は旦那を亡くしたとはいえ娘二人に息子一人、しかもその一人息子はさつきそこに居たヒビキだし！

「しかもあの子、従妹だつてこの人は言つてたが……敢えてただのメイドのように見せて連れておくことでこの人は追っ手の注意を一身に集めていたんだよ。万一自分が追っ手にかかつてしまつても、ただのメイドなら見逃されるかもしれないだろうってことさ。あの子だけでも逃がすために、敢えてメイドの恰好をさせてるんだ。つまり武門の棟梁であり追われる身である自分自身よりも大事な存在……となれば、わかるだろう？」

「……………謀略によって滅ぼされた一族の最後の希望つてことか。なるほど、一族の血を生き永らえさせるための策なわけだ」

「なんてひどい……………！ 見ず知らずの俺たちを、危険を顧みず助けてくれるようない人なの……………！」

アカーンツッ！ こいつらどんだけ妄想癖のレベルたけーの!? 別に謀反人扱いされてもいないしヒビキが世継ぎつてわけでもない！ 頭の中でどんだけ美化されてんだよ俺たちい！

「な、わかつたらイェリク。お前じゃ背負いきれねえ……………諦めろ」

「……………くそつ、くそつ！」

後ろでメルケルと呼ばれた少年が地団駄を踏んでいる。せつかくの日の出だというのにしんみりしすぎだろう。クソツ、どうしてこうなったんだ？　せめてそこまで深刻なものではないと理解させないと……！

「少し勘違いのし過ぎだな。別にそんな高尚な理由じゃないし、貴族の権力争いってわけでもない。ただ、抗えない力つてものが働いた……それだけのことさ」

「……アベリオン丘陵の向こうつてことは……つ！　まさか、異形種や亜人種どもに滅ぼされたつてのか……！　ちくしょう……！　まさか国ごと滅ぼされていたとは……！

すまねえ、あんたにとって思い出したくもないことを思い出させちまって……」

うわあああああああああああつ!?　さらに変な方向にシフトしてやがるうー!?　ダメだダメだ！　これ以上やるとさらにこじれるぞ！　ああもういい！　その方向性でもいいから悪化する前に決着！

「いいんだ。……我々は人間なのだ……そんなこともあるさ」

「だが……！　亜人種の……ピーストマンの軍勢は人間種を悉く喰らいつくすと聞いた！　あんたの家族までもが——」

「いい。……奴等には必ずこの報いを受けさせる。奴等の首を狩りつくして串刺しにし、奴等の本国の城砦の周囲に並べてやる。恐れ慄き、己の為したことを後悔するまで

な」

「…………復讐か…………成し遂げられるといいな」

どうやら俺の身の上は決定したらしい。これがゲームのチュートリアルであればどれほど気楽だったか。

1. ルイス・ローデンバッハとその身内はアペリオン丘陵の向こうの国で武門の棟梁だった名家。

2. ビーストマンの軍勢の襲撃によつて滅亡。命からがらリ・エステイーズまで逃げてきた。

3. 家族はビーストマンに食われた(という彼の妄想)らしい。

4. ルイス・ローデンバッハはビーストマンに復讐することに燃えている。

……………家族愛の強いヒビキには怒られそうな身の上話になりそうだ。

太陽は沈み、そしてまた昇る。それは俺たちが生まれる遥かに以前から幾たびも繰り返されてきた、過去も今も俺たちにとっては当たり前前の法則。それは異世界でも同様だった。

この地は太陽が二つあるわけでもなく、月が三つもあるわけでもないが、昼と夜がある。朝起きて昼間は仕事に精を出し、日の入りと共に寢床へ帰って眠り、また朝を迎え

る。平凡で当たり前で何も変わらない日常を奪われた村人たちもまた朝を迎え、新たに今日の仕事へと取り掛かる。

「村長殿」

「……三人とも、彼らの様子は？」

「はい、身動き一つありませんでした……信じがたいことです」

「なんと……」

雨風に晒されて薄汚れたローブを脱ぎ捨て、太陽を拝みながら大きく伸びをして体のこりをほぐしていく。ブレインは立ち上がるうとしていたが、力の入らないふらふらの状態で衰弱しきっている。

「ほら、水薬ポーションだ。珍しい色だが効果は靦面だぞ」

ブレインの手に小瓶を握らせると、俺も同じものを口に運んで一息で飲み干す。徹夜で文化財の修復作業を終えたような疲労感が爽快感に代わって消えていくのを感じながら、村長たちのほうに向きなおる。

「ま、そういうわけだ。ブレインは二日間微動だにしてない。後はそちらの判断だ」

「……ルイス様まで、何故……？」

「言い出しつぺが食っちゃ寝してちゃ信用もクソもないだろ。違うか？」

「それは……」

「俺は水浴びして寝る。ブレイン、動けるようになったら水浴びして服も変えてもらって寝てろ。念入りに洗っておけよ、クソの臭いでハエすら逃げていきそうだ」

「ああ……………そう、……………する、ぜ……………」

掠れた声で返してくるブレインに背を向けて村はずれの井戸に向かうと、まだ日の出からすぐだというのにヘレンが水くみをしているのが目に留まった。水がいつぱいの桶はそこそこ重いはずだが、必死に縄を手繰って桶をつかみ、水を移し替えていく様子は今日を精一杯生きようとする一人の女の後ろ姿をしている。

「あ、ルイス様。おはようございます。……………もう、動いていいのですか?」

「おはよう、ヘレン。今しがた終わったところだ。……………さすがに汚れてるし、馬や牛の糞まで投げられてたから、身体を洗って着替ええないとな。あと眠気もする。久々に気持ちよく眠れそうだ」

「はあ……………本当に無茶をなさいますね……………。ヒビキちゃんが言った通りでした」

「ヒビキが?」

「ええ。〃責任感が強すぎる〃って言ってました。……………こんなにボロボロにならなくたって、私や実際に救われた女の子たちはルイス様を信用していますよ」

あきれたようにため息をついてヘレンが言った言葉は自分でも多少なり自覚がある。だがこれは昔居たPMCで部下の命を預かることもあったからだ。彼らが生きて家族

の下へ帰る……その成否は俺の指揮に委ねられていたのだ。俺には五体満足で彼らを無事に帰す責任があったのだ。

「軍人なんてやってるとな、部下を死地に送り出す側になることだつてある。でもその中で藻掻き足掻いて、一人でも多くの部下を生きて家族の下へ帰すこともしなきゃならないんだ。」

一人の帰還はそいつの家族数人分の喜びであり、一人の未帰還はそいつの家族数人分の悲しみになる。俺は自らの責任を全うすることを求められる立場だった。俺を信じてくれた部下たちのために、俺は彼らが無事に帰れるように最善を尽くした。

それに昔、ある人はこう言った。『人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり』つてな。人材こそ国の強さに繋がるもので、それを大切にできないやつは国を亡ぼすつて意味合いだ」

「……いい言葉ですな」

「はは……ま、俺としては『武者は犬ともいへ、畜生ともいへ、勝つ事が本にて候』つてのが好きなんだがな。勝利のために最善を尽くす……ああ、俺はこつちのほうがいいだ。もちろんちゃんと部下を生きて帰すのが前提だけだな」

「勝利のための……最善……」

「そうそう、全力でやって勝つつてのは嬉しいもんさ。ははは！ いったったかの攻城

戦を思い出すな！ 仲間が道を作ってくれて、そこへ俺と相棒の2騎で本城へ突入したんだった！

そこからは切った張ったの大暴れ！ 近衛兵を蹴り飛ばしたり魔法詠唱者マジックキャスターをぶん殴って玉座まで最短距離で突っ走ったんだ！」

不意にヘレンの表情に影が射す。水を移し替えて空になった桶を手にしたまま、深淵のような井戸の中を見つめたまま動かない。……何かあったのか？

「ルイス様は……ピーストマンの軍勢に敗れたと聞きました。家族を奪われ、ヒビキちゃんやまだ幼いレーナちゃんを連れて逃げてきたことも……」

あつ……ガバったなコレ。

「何もかも奪われて、大切なものもなくなって、……なのにどうしてっ……！ どうしてそんな風に笑えるんですか!? なんぞっ……！ 悲しいはずなのに！ 辛いはずなのにっ……！」

私っ、そんな風に笑ってられません……！ いつも父と母が居た場所に二人が居ないんです！ いつも水くみをしてきた父が腰が痛そうにして椅子に座る姿も！ 調味料をどこに置いたかよく忘れる母に、私が戸棚から取り出して渡していたのも！ いつも、そこに居たのに……！」

やばい。本当にあの話が広がってるよ。コウモリ経由でヒビキやレーナにも話を合

わせるようにあの後で伝えてきたけど、話の広がり方が尋常じゃない速さなんだが。まあ、たつた120人の村じやそんなものなのかもしれないが。

それよりもヘレンのほうがいぶ参っているようだ。まだ20にもなっていないだろう彼女にとつて、両親が突然居なくなってしまうというのは考えられなかったことだろう。当たり前についていつもの日常が続くのだと心の底では信じていたのに、それがあつてなく崩れ去ってしまった。そしてそれはヘレンだけじゃなく、この村の人たち全員がそうなのだ。

「——これは俺の持論だが、例え辛く苦しくとも笑つていようと思つている。俺が笑つて前を向いて歩いていく姿を彼らが見たならば……きつと安心できるだろうと思つたんだ。俺も仲間を失つたり妻を亡くしたりしてきた身だ。だけど少しづつ彼らの表情や声を思い出せなくなつていった。風化していつて顔も思い出せなくなつてから気づいた。これが忘れていくつてことなんだつてな」

「忘れたく、ないです！ 忘れたくなんか……！」

ぼろぼろと大粒の涙がヘレンの頬を伝う。まだ死に向き合えていない若い子どもには酷なことだろう。しかしこの子は叔父夫婦くらいしか身寄りがない。かといつて叔父夫婦に頼り切りで生きることができない。いつかは、自分で立たなければいけないのだ。

「でも、人間つてのは忘れていくことで辛いものや苦しいものを乗り越える種族でもある。俺は妻や仲間が確かに俺の傍に居て、一緒に過ごしてきた時間を覚えてる。顔も思い出せなくなつて色あせていくのは避けられないが、共に居た彼らが笑う姿を覚えている。

だから、俺は笑つて前に進むつもりだ。『心配するな、俺は大丈夫だ』つてあいつらが俺を見てすぐにわかるようにな。時々思い出して、時々彼らのように笑つて、時々振り返る。……それくらいでいい、そう思っているよ」

「……よく、わかりません……」

「今はまだわからないものだ。もう少し時間が経ったら、わかるようになる」

「それが大人になるつてことなんですか？ 大切なヒトを忘られるのが！」

「……忘れたつていい。でも、たまに思い出すんだ。本当に大切なものつてのは、どんなに忘れていてもひょんなことで思い出すものだからだ。……レーナを見てみると、俺はそう思える」

嗚咽を漏らしながら泣いていた少女が目じりを袖で拭つて、まっすぐな目で俺を見る。覚悟は決まつた——そう言いたげな強い光を宿した少女の青い瞳は言葉よりも雄弁に俺に訴えかけてくる。

子どもが頑張つて一人で決めてみせたことだ。だったら、ちゃんと褒めてやるのが親

というものだ。せめて、ヘレンの両親ができなかつた代わりに。

「——がんばったな」

「……………う、ううっ……………お父さん、お母さん……………っ！」

頭を撫でた瞬間にまた泣き出した。涙と鼻水にまみれたまま俺の胸に顔を埋めて泣きじやくる様子はまだまだ子どものそれだ。当たり前前にあるものを奪われた、失った悲しみは簡単に癒せるものではない。当然だからこそ、それが崩れ去る瞬間は何物にも代えがたい絶望を感じてしまう。

だから俺はリアルの世界でPMCに入った。夫をテロリストに殺された叔母を見てPMCに入り、一人でも多くの人が同じような苦しみを受けないように戦ってきた。そして俺自身も娘と妻を失い、絶望の淵に斃れることになった。

当たり前前の平穏を奪い去る悪党どもめ——俺は、奴等を赦しはしない。

「……………すみません、ぐすっ、命の恩人の前で、こんなっ」

「子どもは泣くのが仕事だ」

「……………それ、赤ちゃんだけです」

「泣いたら泣いただけ大きくなる。つらいことを知ってるから、他の人にやさしくできるんだ。ヘレンはもつといい子になるぞ」

「……………ありがとうございませす。ちよつとだけ、頑張れそう、です」

しばらく背中をさすってやると泣き止んだあたりやっぱりまだまだ子どもだ。もう少し大人だったら自分でなんとか折り合いをつけられるだろうから、一人にさせたかお茶でも淹れておしやべりでもして落ち着くのを待つのだが、そうする前に彼女に泣きつかれてしまった。

結果としてみればまあ、まずまずだっただろう。子どもが少し大人になる手伝いにはなったかもしれない。

「……………いいな」

「ふえっ!?!」

「……………ヒビキ、お前……………」

井戸の隣にある見張り櫓の上からこちらを見下ろすメイド服の少女。我が従妹、ヒビキがジト目で不貞腐れながら哀愁漂う三角座りのままじーっとこちらを見つめていた。

「ボクも心配したのにな。寂しかったのにな。怖かったのにな」

「あー、すまん。すぐに水浴びしてから行くつもりだったんだ。さ、さあご飯にしようかヒビキ! もう俺ハラペコなんだよおヒビキの作ったご飯が食べたいなあ」

「ユウくんが怪我してないか不安だったな。ユウくんが、このボクの作ったご飯も食わずにいー! あのブレインとかいうヤツをずうーっと見張っててえ! 夜も戻らないで二日間もあんなバカなことやっててえー!!! さっつつみしかつたなあー!!!」

「……あー、そっち行ってもいいか……?」

「来んなバーカ! ボクたちよりヘレンのこと見てあげたらいいじゃん!」

知ったことかと顔を背けられた。……これは本格的にお怒りでいらっしやる。思い返せば当然のことでもあるのだが、村の人たちをその場凌ぎとはいえ救ったからにはちゃんとアフターケアをしなければ。

しかしその間にもヒビキやレーナは見知らぬ土地で唯一頼れる存在を欠くことになった。ほんの数日とはいえ、ただでさえ不安だったのに精神的な支えになる存在が居ないままに日々を過ごしていたのだ。……俺の配慮が足りなかったのも確かだが、人命が懸かった事態で悠長に構えてもいられない。どちらが悪いという話ではないが、俺の行動は確かに褒められたものではないだろう。少なくともヒビキとレーナの二人からすれば。

「心配かけたことはちゃんと謝る。これからはレーナもちゃんと見ておく。すまん」

「あ、そう」

「……そ、添い寝がいいならしてやるから……」

「ふーん……」

「……お買い物デートからの、……外泊でもいいぞ?」

「へー」

「……これからずっと一緒に寝てやるから——」

「じゃオツケー！」

「180度変わってんじゃねーか」

「うっさいバカ！ 心配かけて二日も戻らないでご飯も食べないで突っ立ってたくせに！ レーナもボクも置き去りで勝手にどっかいっちゃって急に呼ばれたと思っただけならまた変なコトやってるし！」

「……ぐめん」

櫓の上で仁王立ちしてお怒りのヒビキ様は先ほどと変わらないジト目で俺を見下ろしてくる。……なんかだんだん妻を思い出すような仕草が増えてるような気がする。あとそのメイド服ミニスカートだから黒い紐パン見えてんぞ。

本来の職業を隠していたPMC時代、表向きで使っていた警備会社の警備員という肩書きに似つかわしくない怪我をして帰ってきたときにも妻にこんな目で見られていた。 “また怪我してんのか” “みたいな諦めと” “無事で戻ってきた” という安堵感が^な縋^まい交ぜになったため息と共に “お仕事頑張ったのね” と言われたのを思い出す。

薄々普通の仕事ではないのだと感づいていたのだろうが、妻は何も言わず “おかえり” “と言ってくれた。ただし今のヒビキと似たようなことをチクチクと針で刺すように言われたが。

「ボクやレーナを悲しませないこと。一人で決めるのが難しい重要なことならちゃんとボクにも相談すること。死にたがりみたいなのはしないこと。以上三点を遵守すると誓いますか？」

「わかった。ちゃんと守る。……もうそっちに行つていいか？」

「ふふん、ボクに対して相応の扱いができるんなら、いいよ」

櫓の上にひとつ跳びで登ると、地平線から昇った太陽が赤々と輝いて丘陵地帯を朱色に染め上げていくのが目に入る。どこまでも広がる原野と、遙か地平線まで続いていく道が一本と、遠くに見える小さな村があるだけで、他には何も見当たらない。

ぐつと、目線を合わせるように顔を近づけるとヒビキの表情が強張る。いつもは積極的に愛情表現をする側だったから、こちらからされるのに慣れていないのが丸わかりだ。

「お姫様抱っこ、おんぶ、ただいまのキス、どれがいい？」

「う……キ、キスは、まだ、ボ、ボクの心の準備が……」

「で、どれにするんだ言い出しつぺ」

「……………た、ただ……」

「ん？ どれがいい？」

「お、お姫様抱っこ……で！ 二、ニヤニヤするなバカッ！ ……わわっ!!」

むぐぐ、と顔を真っ赤にしながら悔しがる我が従妹。問答無用で抱え上げてやると、驚いたかと思えばすぐに口をつぐんでしまい、借りてきた猫のように身じろぎ一つないまま腕に収まってしまおう。

「ユ、ユウくん……」

「なんだ？」

「……女の子って……すっごくしあわせな気分がする……」

「抱っこがそんなに嬉しいのか？」

「……うん、前よりも、すごい、しあわせな感じがする」

リアルのところとそう変わらないな、と思っていたヒビキの笑顔が向けられる。肩で揃えられた黒髪のショートボブが太陽の光を映し、年ごろの少女らしさが増したようにも思える。リアルでも体つきも背丈も見た目にもほぼ女そのものだったが、間近にじつくりと眺めてみると確かにヒビキは100パーセントの女の子になったのだと思える。性別そのものが変わっているのだから当たり前なのだが、纏っている雰囲気というか気配というか、自分ではよくわからない何かがある。それが今のヒビキには存在しているのだと思える。

きつとこれは一時的な気の迷いだ。両親を失った私の寂しさを埋め合わせてくれた彼に、ルイス様に甘えたいだけなのだ。しばらくすれば元通り落ち着くはずだ。

ひとつ跳びで建物の三階くらいの高さの見張り櫓に飛び乗って、お姫様のようにヒビキちゃんを抱いて危なげなく飛び降りてきた彼の強さに魅了されているだけなんだ。そう、この得も言われぬ感情は一過性のものだ。そうに違いない。

「もう、危ないですよルイス様」

「これくらいなら大丈夫だ」

「それでも、ですよ。さあヒビキちゃん、ルイス様もお腹ペコペコみたいですから朝ごはんにしませうか」

「やーだー、もう少しだけ！」

「もういいだろ。お前を抱えてたら水桶も持てない」

「ボクより水桶のほうが大事なの？」

「水がなきや体を洗えないだろ。俺二日間立ちっぱなしだったんだぞ？ 体を洗ってく
るのが先だ」

「はあ、仕方ないなあ。ボクも手伝うからさっさと洗っちゃおうよ」

「おかしなマネはするなよ？」

「しないよーうえっへへへ」

……お姫様のような雰囲気はどこへやら。ヒビキちゃんはニヤニヤと笑いながら洗いの場の奥へ行ってしまった。

「じゃ、ちよつと洗ってくるよ。すぐ終わらせる」

「私は水くみを終わらせちゃいますね」

ルイス様も水桶を片手に、どこからか取り出したタオルを持って洗い場の奥へと行ってしまふ。新しく水桶に水を汲み、ぐつと力を込めて持ち上げる。

水汲みがキツイのはわかっていたけど、父はこれを毎日やっていたんだ。腰を痛めるのも無理はない重さだし、父は桶いっぱい水に水を汲んでいた。私はせいぜい三分の二がいいところだ。

「よい、しよつー」

水瓶に水を流し込むのも一苦勞だ。私の胸元まである大きな水瓶に水を流し込もうとするのだから、踏み台も使つてようやく足りるかというレベルだ。父も母もこれに水を入れられたのだから、私ができないわけではない。……ただ念のために踏み台はもう一段高くしようとした。これは負け惜しみではない。合理的な結論だ。

「あれ……何か忘れてるような」

……何か大切なことを忘れてる気がする。確か井戸のところで水を汲んで――

「ヒビキちゃん!？」

「そうだ！ 従妹とはいえルイス様は男性！ ヒビキちゃんは女性！ 未婚の女性があるうことが男性とハダカで二人きりなんて！ ごく自然に済まされたからまったくもって気づかなかった！」

桶を片手に急いで井戸の近く、体を洗うために板で仕切られた洗い場へ駆けつける。

「うん、おつきいね」

「そうか？」

「うん……うん、触ってみてもカチカチだし……おつきいし……ボクでなくても立派だと思っ」

「とりあえずさっさとしてくれ。あんまり時間無いんだから」

「んんっ、ふうっ、これで！ どうかな！」

「ああ……いい感じだ。もう少し強めでもいい。こういうのは久しぶりだな」

「だよねっ。もうっ、何年前だったっけ？」

「七年前だな。お前が十一のとき」

「そんなにつ、前、だっけ？」

「あああああああああああつ!? 始まつてる!? もうスタートしちゃってた!? しかも前が十一歳つて！ そんな小さなときから!? はっ、破廉恥です！ えっちなのはいけないと思います！ いけませんいけません！」

「どう、かな？ んっ……ふうっ……ボクの、気持ちいい？」

「上手になったんじゃないか？ しつかり丁寧にやってくれ。汗かいたからなあ」

「わかってる……っ、よっ！ ふう……これでいい？」

「ばしやり、と水が撒かれる音ではつと気づく。なんで私はこんなコソコソと板に耳あてて一部始終を聞いているんだ。そうだ、すぐに止めるべきだ！ えっちなのはいけませんと昔の偉い人は言ったのだ！ 女の子は貞淑であるべきなのだ！

「ありがと、ヒビキ。また背中流してくれ。やっぱ背中までは手が届かないよなあ」

「いいけど……ボクにはしてくれないの？」

「お前は女の子だろうが。軽々しく肌を見せるもんじゃねーの」

「ユウくんになら……いいよ？」

「はいはい、温泉でも見つけたら流してやるよ」

「あつ、それいいよね！ ボク、温泉に入るのが夢だったんだー！ その時はレーナもユウくんも一緒だからね！」

あ、なんだ……えっちなんてなかった。なら、ヨシ！

「でさ、ヘレンはなんで聞き耳たててるのかなー？」

「えっ？」

顔を上げるとそこには黒髪のあの少女、ヒビキちゃんがニヤニヤと意地の悪い笑みを

浮かべてのぞき込んでいた。

「どうした? ……なんだヘレンか」

目の前に現れたのは細くともしなやかな体躯を覆う筋肉の鎧。余分な肉や脂肪のそぎ落とされた、戦士の肉体。それでいて岩のようなごつごつしたのではなく、猫のようなスマートさ。下着一枚で現れた彼の肉体の全身が目に映る。

「————へうっ!」

「ああっ! ヘレンが鼻血を吹いた!」

「なんでだよ」

わかった。私にはまだ、男性の裸身は、刺激が強すぎる——

「ふあっ!」

「あ、ユウくん、ヘレンが起きたよー」

……知らない天井だ。ってそうじゃない。私は確か水汲みをしていたはず。何か思いつくだけ——だめだ、霞がかかったように思い出せない。

「ああ、大丈夫そうだな。急に倒れるもんだから心配したぞ」

「……すみません、ご心配をおかけしました」

「慣れてないことが続いたからな。疲れが一気にやってきたんだろう。それよりも朝ごはんができてるから食べておけ。五人分作ってある」

「ふふん、ボクの特製オニオンスープに咽び泣くほど喜ぶといいのさ」

「素もとにお湯入れただけだろ」

「仕方ないじゃんか！ 材料が無かったんだから！ あつたらとつくに作ってるよ！」

「パパ、おかわりー！」

『アタシもだ。もつとよこせ』

「わかつたから、もう少し静かにしなさい」

テーブルの上に置かれた鍋からは今までに感じたことのないおいしそうな香りが漂ってくる。中身はスープか何かだろうか、ルイス様がおたまを使って琥珀色の液体を入れていくが、ルイス様の故郷の料理なのだろうか。

レーナちゃんと「キリン」という種族らしいキリちゃんはすでに食べ始めていて、おかわりをねだる様子はどちらも子どももらしい。

ルイス様に促されて席につくと、香ばしいニオイの立ち上る温かいオニオンスープと普段から食べなれているパンが差し出された。

「んー……やっぱりこのパン硬い？」

「やっぱヒビキもそう思うよな」

「柔らかいパンってあるんですか？」

パンというものは硬いもののはず。柔らかいパンなんて高価すぎて食べたことも無

いい、そもそもそんなものがこんな平凡な村で作れるのだろうか？

「うえ……パパ、このパンかたいよー」

「レーナちゃん、パンはスープに浸けて柔らかくすると食べやすいのよ」

「んー……まだかたい……」

さすがに子どもには硬すぎたらしい。かじりついたはいいものの、噛み切るころではない硬さの前にまさに歯が立たない状態だ。スープに浸していくらか柔らかくなつたようだが、それでも噛み切るのに必死になっている。……微笑ましい可愛さだ。

「仕方ないぞレーナ。ご飯が食べられるだけマシだ。ガマンしなさい」

『アタシはちようどいい。歯ごたえがそこそこあつていい』

うん、このオニオンスープはおいしい。間違いなく今までで食べてきたものの中でダントツでトップだと言える。パンを浸して少し柔らかくして食べるとなおよい。正直言ってこのオニオンスープだけでもいい。琥珀色の澄んだスープは塩気と……何かピリツとした感じがするけど、この辛みは一体どこから出てきたんだろう。

「んー……初めてこつちのメシを食ったけど……マジで美味い。これが素にお湯入れただけつてのが信じられない……」

「ね？ あつちでの合成品なんか比べ物にならないでしょ？」

「………こんなのアーコロジーの上層くらいしか食えないぞ………ぶつちやけ初めてこつち

に来てよかつたって思えた」

どうやらルイス様のところも食料事情はそう良いものではなかつたらしい。ピーストマンの侵攻に晒されていたのだから仕方がないとは思うけど、ルイス様のような軍を率いる階級でさえ平民並みの食事って考えるとかなりひつ迫していたはず。

「コンソメの旨味に黒コシヨウの刺激……これほどウマイとはなあ」

「く、黒コシヨウっ!？」

黒コシヨウ。黒コシヨウ。黒コシヨウ。この黒いつぶつぶが全部！ 黒コシヨウ!？」

「あわ、あわわわ、あわわわわっ!？」 き、金貨が1枚、金貨が2枚、金貨が3枚……」

「ど、どうしたのヘレン!？」

「ただ、だつて！ くつ、黒、コシヨウですよね!？」 あの、金の重量と等価の“黒コシヨウですよね!？」

つまり私は今さつきまで “おいしいなー” 程度の気軽さで金貨を口に入れて飲み込んでいたってこと!？」 金貨1枚あれば一か月分の生活費！ それがこのオニオンスープに一体何枚分つき込まれたの!？」

しかもコンソメ!？」 王都や大都市の一流レストランでないで作れないっていうあのコンソメ!？」 それがなんでこんな普通の朝の食卓にポンと置かれてるの!？」

「え？ 金貨一枚でしょ？ 安いじゃん。ボクですら20万は手持ちがあるよ」

「俺は10万だな。いろいろ支出が嵩んだし」

………やっぱこの人たち、貴族でした。

「……きゆう」

「ああっ!!? ヘレンが倒れた!」

「なんでだよ」

会議は踊る

「んんー……」

すう、と静かに眠る彼の姿にどこか懐かしさを感じる。まだ小さかったボクのところにやってきた彼に遊んでもらっていたとき、遊び疲れて一緒にベッドでお昼寝していたときを思い出すからなのかもしれない。

ボクにはお父さんが居ない。事故で死んだとママは言っていた。だから昔のボクはユウくんにお父さんのようなものを求めたのかもしれない。その次は兄弟みたいな関係を。自分が女の子だと認識してからは男女の関係になりたいと思っていた。

結果はまあ、ボクが本当に女の子のカラダになったことで少し進展したかもしれない。ボクはユウくんを以前に増して気に掛けるようになったし、ユウくんもボクを女の子として扱ってくれている感じがする。

「んむう……パパ……」

ユウくんの隣で寝息を立てるNPC……リアルでのユウくんの子どもにそっくりなこの子はボクにとつてどういう存在なのだろう。ただのNPCでしかないのか。それとも妹みたいな子なのか。

ボクはリアルでの玲奈ちゃんは知っているけれど、このNPCのレーナのことは何も知らない。この子にとってボクはどんな存在なのか、ボクにとってこの子はどういう意味を持つ存在なのか。

「——やめよう。まだ、よくわかんないや」

ひとまずは意識を別のものに向けよう。今のボクたちが置かれた状況を整理しなくちゃ。今すぐ女の子になった自分の身体を「確かめる」のもやぶさかじゃないけど、ユウくんはユウくんて突っ走っちゃっていろんなものを後回しにしてしまっている。

ボクがユウくんをしっかりとサポートして支えないと——ちよつとは夫婦っぽいかな。うん、今のボクなら実質的にお嫁さんポジションは十分狙える立場だ。

「まず、どうしてこうなってるんだっけ」

ボクたちは普通にオンラインゲームの終了日にログインしていた。ところがゲームは終わらず、まるで現実世界になったみたいだに五感が働くしお腹も減る。目に見える景色もどこかヴァーチャル感があったものから本物の景色になっている。体はゲームのAvatarと同じままだけど、生理現象もあるしなんなら性欲だってある。

戸惑っていたところにヘレンが突然現れて、野盗に襲われている村を助けてほしいって頼まれた。まるで猪のように村に走っていったユウくんが村を解放して、ブレインとかいう剣士を二日間も見張り続けていた。信用はすぐには手に入らないっていう言葉

は理解できるけど、二日間も家族に心配かけさせたユウくんを叱りつけるのがお嫁さんの務めだ。

「……あつたかかったなー」

ユウくんを抱きしめられたときの感触が忘れられない。思わず息を呑んだし、顔が熱くなつて胸のあたりがきゅつと締め付けられるような感じがして、ゲームかりアルかを確かめるのに初めて下腹部に手を伸ばした瞬間のような切なさに頭の中が真っ白になりそうだった。

男の肉体だったときとは違う。昂ぶるような能動的な感じのものではなくて、切なさや嬉しさを混ぜこぜにしたような受動的な興奮が脳みそを揺さぶってくる。

これがリアルでの身体だったなら「いいから一発しようよ」くらいの言葉とお尻が出たはずなのに、そんなものは欠片も浮かばなくてただひたすらに「嬉しい」という感情が沸き上がってきた。

「でも、野盗がまだ来るかもしれないし……」

ユウくんがブレインとかいう剣士から聞いた話では野盗は「死を撒く剣団」とかいふ野盗と傭兵がごつちやになったような組織らしい。で、今回この村を襲っていたのは盗賊や荒くれが寄り集まったチームだとか。つまりもう片方……傭兵のメンバーたちが彼らを探してもおかしくないということ。

「……殺す、のかな。殺せるのかな……ボク」

ボクの大切なヒト、大好きな彼はボクたちの目の前で人殺しをした。相手は確かに悪い人で、殺されても仕方がないと言われる側なのはわかる。でも、ボクはユウくんみたいに誰かの命を奪うことができるとは思えない。

かといってこのままだと野盗のもう片方の奴らがこの村に来てしまうかもしれない。その時ユウくんだけじゃや村人全員なんて守り切れない。……どうすればいいんだろう。どう立ち回れば、村人もユウくんも守れるんだろう。

「……怖い、なあ」

仕方がない、やるしかなかった、相手は悪人だ、言い訳なんていくらでもあるのかもしれない。だけどボクはまだ……人を殺す決心がつかない。相手が悪人だとはいえ、人の未来を奪うことになる行為に対して恐怖してる。これが知性や理性のない魔物の仕事だったりすれば、まだもう少し気が楽なんだろうけど――

「――それだ！ 別に殺す必要なんて無いじゃん！ 少しの間だけでも追い返せれば――！」

そうだ、*「忍者」*なんて職業クラスを取るのにいろんな盗賊・斥候系職業をとってるんだ。それを十全に使いこなせば傷つけずに追い返す程度はできるはず！

「そうだよ、アバターの能力が使えるんなら……忍術が使える！」

すぐにも考えないと！ 野盗がこの村に来たつて無傷で追い返す方法を考えよう！ ユウくんにはかり頼つてちやダメなんだ！ ボクができることはボクがやらなきゃ！ 人殺しなんてできないだろうけど、できないならできないなりに追い払えればいいんだから。

善は急げと見張り櫓の最上段に駆け上つて村の周囲を見渡す。後背にあたる南側はなだらかな丘陵地で、村を一望できるだけの高低差がある。翻つて、それは村からも見えやすいというわけであるから壁は分厚く頑丈だ。逆に北に面する入り口側は曲がりくねつた坂道になっていてまつすぐには村に入つてはこれない。牧草地や農園が広がる村の東西は道も無い傾斜続きだけど、あるのは馬がジャンプしても乗り越えられない程度には高い柵があるだけ。一部が破られていて、そこから野盗が侵入したのかもしれない。一番楽かもしれないと思つてたけど、野盗も同じ考えだつたわけか。

「となると……東西はトラップを仕掛けて足を遅らせて……南北は警戒網を張るのが得策かな？ そこに幻影スキルや幻術スキルを使えば……うん、いけそう」

案は固まつた。まずはユウくんに聞いてみないと。ボク一人、しかも戦争なんてド素人のボクじゃ見落としに気づかないかもしれない。それに大事なことは二人で話して決めるつて約束したし……えへへ、夫婦の共同作業つていうほどじゃないけどこういうのつて夫婦っぽい感じがする！

ああ！ いつかはユウくと湖の見える別荘で誰にも邪魔されずにイチヤイチャしてキスしちやったりされちやったりからの第一ラウンドが始まって……！

「うえひひひ……ふひひい……ボ、ボクのハジメテを捧げる時がついに……！」

「おいヘレンちゃん、あの子ルイス様の従妹なんだろ。顔見知りなんだからどうかしてくれよ……櫓に矢避けの板すら張れないぞ」

「そ、そんな……無理ですよお……！ 私だって今は関わりたくないですよ……！」

「なんであんな櫓の上でくねくねしてんだ……あれが王都で流行りとか聞いた酒場踊りってやつか？」

「ちげーよ。きつと何かもつと……深いわけがあるんだよ！ 多分……！」

「あのくねくねした動きは……スライムか？ スライムは水気を好む……つまり、雨ごいか何かか？」

「何言ってるのさアンタ、雨なら四日前に降ったろう。きつとありやあスライムじゃないかと噂に聞くドライアードってやつさね。ドライアードってのが生まれる場所は豊かな土地だって話もあるんだ。おそらく豊作祈願で間違いないだろうね」

「……ハア、ハアツ………ヒビキちゃん……！ ヒビキちゃん……ふう……」

「おい誰か、ブルーノ縛って吊り上げるの手伝え」

「合点承知！」

「ちよ、まつ、俺はヒビキちゃんの黒い紐パンを見てただけで……!」

「ギルティ」

「ヘレンちゃんまで!?!」

こうしちやいられない。すぐにユウくん相談しないと! 道を歩くのもめんどくさい……屋根伝いに走っていけばいいや!

レベル100の身体能力にものを言わせて屋根に飛び乗り、次々に家から家へと飛び移って走り抜ける。フフン、こんなパルクールも目じやない動きは忍者だからこそつてやつだよ。最後は空中で前転決めつつ華麗な着地! 何十年か前に行われてたオリンピックなら満点間違いないしき!

「ユウくんっ! 起きてる!?!」

ガタンツと勢いよくドアを開いて呼んでみたものの反応が無い。そつと静かに奥の部屋をのぞき込んでみると、ユウくんもレーナもまだぐつつすと眠っていた。……ただしユウくんのお腹の上には浜に打ち上げられたオットセイのようにレーナが押し掛かっけていて、口元から垂れたよだれでユウくんのお腹が濡れている。

対照的にユウくんはうんうんと唸るように寝苦しそうにしてはいはいるものの起きる心配もない。

「まーだ寝てる……もうっ………起きないんなら、キ……キスしちゃう、よ?」

顔を近づけても寝息が聞こえるだけだ。……これはもしかしたら、イケるかもしれない。ユウくんは完全に寝てて起きないし、レーナちゃんも眠ったままで邪魔はされない。

「お、起きない、よね？　じゃ、じゃあ……………ん」

目を閉じて、息を整えて、少し顔を近づける。唇に触れた感触。数秒間が一時間にも思える時間の間、ドクドクと自分の心臓の音が聞こえてくる。

「……………ふ、ふへへ……………やつ、やれば、できるじゃん、ボク……………」

今までの自分のチキンぶりを思い出して少し情けなくなるけど、あんなに憶病だったはずなのに誰も見ていないとわかればこれだけでできるのだという実感が湧いてくる。

まだ恥ずかしさで顔が熱いけれど、今度はこれを人目をはばからずにやれるだけの度胸がつけば……………！

「んう……………？　なんだ……………サヤカ……………ああ、ヒビキか……………ふああ……………もう少し、寝させてくれ……………」

……………手ごわい、けどボクは負ける気なんかさらさら無いんだからっ！

ヒビキのやつ、変なところで積極的などこは相変わらずなようだ。リアルでも際どい

メイド服やらスリングショットやら着て——ただしリアルでは男の娘ボディだ——迫ってきたのは覚えているが、女になってこれをやるようなら本格的に淑女としての教育が必要になるかもしれない。

押せ押せなときはとことんまで踏み込んでくるのに、押されると逆に引つ込んで恥ずかしがつてあわわはわわ状態なのだから、変なところでヘタレるヤツだ。

「よっ、と」

「たかーい！ あ、パパ！ あつちに山がある！」

「お、ほんとだ。山登りなんかもやってみたいもんだな」

「ねえユウくん、温泉あるかな？」

「どうかな。でもまあ、温泉探して昇るのもありっちゃありだな」

櫓の上に着くなりレーナが遠くを指差してはしやぎはじめ。小高い丘が折り重なるように連なる先に平原が続き、その奥に雄大な山脈がそびえたっているのが目に飛び込んでくる。

「それで、トラップを設置するんだったか？」

「うん。南北は見通しがいいし、見張り櫓からでもよく見えるからまず攻めるには不向きでしょ？ 逆に東西は森が広がっているし、下りになってる割にそこそこ平坦だから見えづらい。だからこつちにトラップや召喚したモンスターを巡回させて警戒させて

おこうと思うんだ。

幻術系の設置型トラップで森の中を迷わせて村にたどり着けなくしたり、視界を阻害する効果を持つトラップで村を見えなくするとか……ユウくんはどう思う？」

「いい案だが無効化される可能性は？ それに数は？」

「設置型トラップはそこそこ数があるから用意できるよ。無効化するのなら最低でもレンジャーの高レベルスキルが必要かな」

「……使い果たしたら終わりか。なら、アイテムを使わない罠も絡めないと」

「アイテム無しで罠って作れるの？」

「忘れたのか？ ゲーム内じゃ無く限りなく現実に近いってんならできるんだ。例えば……西側のあの草が多い場所なんかは草を低い場所で結び付けておくだけで即席の転倒トラップにできる。草に紛れて細かい糸かロープを張っておいて、鳴子をつけて早期警戒網の代わりにすることもできるし、こちら側への被害を考えない場合は火を放って炎の壁にすることもできる。」

東側は斜面は西側に比べて幾らか傾斜があるから、上がり切ったところに土塁を積んで、その手前の斜面を切り崩して平坦にすることで昇れなくするとかもありだ。大きい石や岩を転がして落石トラップにするとかも安上りな罠になるな」

ほへー、とヒビキは呆けた顔で聞いているが理解できたのだろうか。パリツとした

フレンチメイド姿なのに、その表情はメイドというには似つかわしくないボケツとした表情だ。

「な、なるほど！」

「理解できてんのかお前」

「ハハッ、で、できてるに決まってるじゃんかユウくん！」

「ヒビキおねーちゃん、絶対わかってないよね」

「わっ、わかつてるし！ レーナはわかつたの!？」

「んー……よくわかんないけど、アイテムがいらなくて簡単に作れるトラップなんでしょ?」

「その通り。レーナは賢いなあ」

「ふふーん！ ヒビキおねーちゃんには負けないもん！」

「むぐぐ……」

レーナの頭を撫でてやるとヒビキが恨めしそうにこちらを見る。レーナはぺったんこな胸を張ってヒビキに自慢するように勝ち誇った顔をしている。負けず嫌いなどころは妻によく似ている。

「あつ！ あそこ！ パパ！ あそこにおつきい街があるよ！」

「どれ……へえ……城砦になってる」

「あつ、ホントだ！ 中世のヨーロッパって感じだね！ 余裕ができたら行ってみようよー！」

「そうだな。どの道行くことになるんだろうけど……」

地平線のギリギリのところに見える灰色の城砦都市。このハイスペック吸血鬼ボデイでなきや見逃してしまふところだった。この距離でそこそこの大きさがあるのだから、実際はかなり大きな都市なのだろう。

「ヒビキ、意見が聞きたい」

「……なあに？」

「俺はこの村を救いたい。俺にできることをやりたい」

「理由は、聞いてもいいの？」

ヒビキの赤い瞳が俺を見据える。不安なのか表情は浮かないが、それは俺がプレッシャーに押しつぶされたり思いつめたりしていないか心配になっているせいだ。この子はいつも、他の人の心配をするときはこうするのだ。自分のときはなんでもないように振舞っているのに。

「……俺は昔は軍人だった。テロリストや他国の軍と戦って、守れた人も居れば守れなかった人も居た。住む場所を奪われた人や、家族を奪われた人をこの目で見てきた。俺自身も、大切なものを守り切れなかった。」

一度は戦うこともやめた……だけど今、目の前で力ない人々が助けを必要としてる。だから俺は彼らにとって当たり前前にある大切なものが奪われないように、戦っていくつもりだ」

「……わかった。ユウくんが決めただから、きつと大丈夫。それに何かあってもボクだつて居るんだし！」

ヒビキの言葉がすり抜けていく。耳から入って頭の中を駆け巡り、それはまるで疾風のように俺の心に灯った火を大きくうねらせて過ぎ去っていく。

……まだまだ子どもだと思っていたけど、もうヒビキを子どもと言うのはダメだなこれは。

「ルイスさまー！ 村長が呼んでますよー！」

「わかった！ すぐに行く！ 二人は家に戻るか？」

「ボクも行く。……正直、ユウくんだけじゃまたいろいろんなことに首突っ込みそうだし」

「レーナもいく！」

「……わかった。二人とも、くれぐれも、静かにな」

正直言つてヒビキの言葉が無ければまた首を突っ込んでいたかもしれない。目の前で虐げられる人々が居るのもあるが、踏み入ってしまった以上知らぬふりができないのも確かだ。ヒビキが居るお陰でレーナやキリの面倒を任せられる……そんな考えが自

分の中で、それも自分で気づかない奥底で存在しているせいでもあるのだろう。

「ようこそ、おいでくださいました。ヘレン、ありがとう」

「ああ、待たせてすまない」

「お邪魔します」

「お邪魔しまーす!」

木造の簡素な家の扉を開けるとサムエル村長が出迎えてくれた。隣には彼の妻のバーバラが控えていて、すぐに応接室へと通されたが、その応接室はお世辞にも綺麗だとは言えない。

刃物が突き立てられたらしい傷跡が生々しく残る柱。椅子もテーブルも古い木製のもので、足元がぐらついたりして頑丈そうには思えない。装飾品や調度品なんかもあつたのだろうが、そんなものは一切無くただ無機質な白いカーテンがある小窓が三つ並んでいるだけだ。

「殺風景で申し訳ありませんな」

「お気遣いなく。本日はどのような用件で?」

「実は村を救って頂いた件について、少ないものですがお礼の品をと思ひまして……あまり大したもののご用意できなかったのですが……」

「ああ……村長殿、実は報酬の件については話がついている」

「……と申されますと？」

どの道野盗が奪い去った後のこの村に金目のものなどほとんど残っていないのだ。なけなしの報酬などを俺に支払うよりも、もつと後々のためになるものを得なければ意味が無い。この世界で生きていかざるを得ない場合にまず必要になるものがあるのだ。

「ヘレン、彼女に助けを求められたときに俺は彼女にこう言った。『報酬よりもヒビキとレーナを頼む』と。ヘレン、間違いないな？」

「……あ、はい。特に何かできたわけでもないですけど……」

「まあそういうわけだ。俺もヒビキもレーナも、ヘレンの世話になっている。でもまあそれで納得するとも思えないんで、こういうのはどうかな？」

俺とヒビキ、レーナ、それにキリを加えた四名。しばらくこの村に置いてはくれないか？ 家は今あるのをそのまま使わせてくれればいいし、有事の際は俺も剣を振るう。まあブレインを雇うついでに俺たちを村に置いてほしいんだ。俺としても腰を据えられる場所があるのは助かる」

「村に滞在するということですか。それでしたら我々としては構いませんが……しかし、この村はもう……長くは無いでしょう」

「……ねえユウくん、何かあったの？」

「まあ、な」

そういえば二人に詳しい事情を説明していなかったな。俺がわざわざこんな方便を使つてまで村に残ろうとしているのは偏にこの問題が村の存亡に関わる一大事だというのも理由の一つだ。

「野盗がすでに村の食料を運び出してしまったらしい」

「……ごはん、無いの？」

「レーナの言う通りだ。この村はご飯が無いんだ」

「でも盗つていった人たちを見つけたら、パパが取り返せるんでしょ？」

「レーナ、見つけられればだよ。もう野盗たちの一部は逃げた後なんだ。追いかけても見つけられないんだ」

既に日中には運び出されていたらしいから俺が到着したときにはすでにかなりの距離を移動していることだろう。この広大なアペリオン丘陵の裾野をくまなく探して痕跡を当たれば見つかる可能性が無いわけではないが、その間にも村人たちは飢えに苦しんでいくことになる。

「……で、ユウくんは村の人たちが食べるご飯が無いからどうかしようって思ってるんでしょ？」

「——そう、なるな」

「わかった、ボクも手伝うよ。……で、具体的には？」

胸を張ってヒビキが言うものの、いい案があるわけではない。ひと先ず今の俺たちで何ができるのか、どれだけの猶予があるのか、どのような伝手があるのかを確認しなければ。

「村長、村の食料はどれだけ持ちそうだろうか？」

「……切り詰めても二週間でしょう。ですが収穫が遅れている場所があるので、そこを刈り取ればもう少し……一か月少々は持つはずですが冬を乗り切るには心もとないどころか全く足りておりません。しかも捕えた野盗どもを領主の軍に引き渡すとすると、それまで彼らにも食事を与えなければなりません」

「なら、この付近に狩り場はあるか？」

「二か所ほどなら。しかし収穫に当たるとなると人手が足りないのが現実です。男手は兵役で減り、そこに野盗の襲撃で殺され、もはやこの村は女子供と老人が多くを占めている状態です」

「……厳しいな。ここからすぐ近くにある大都市や農作地は？ それと村を訪れる商人や役人などは？」

「近い都市ですと私たちの属する領土の都市エ・ペスペルでしょう。東に行けばエ・ランテルという都市があり、バハルス帝国、スレイン法国と領土を接していますので交易商人も多く立ち寄る街です。」

残念ながらこの村に商人が訪れるというのは滅多にございませぬ。役人も徴税や検地を行う場合に来る程度で、それ以外は兵士が二か月に一度ほど巡回する程度でございませぬ」

こ、これはなんとも……戦国系のRリアルタイムストラテジー T Sなら詰みに等しい状態だぞ。すぐに援軍が来るわけでもなく、食料は枯渇寸前で、労働力も無い状態で収穫が無い冬場を乗り切れと言われているようなものだ。食料不足からの野盗化しか未来が見えない。よしんば野盗化を回避できても共食いや村人同士での食料争奪戦が繰り広げられ、まさに地獄絵図となるのがオチだ。

となると、やれるのは一つしかない。

「……即座に外貨を稼いで食料を買い付けるか……あるいはここの領主に訴えるかだな」

「はい。しかし外貨を稼ぎたくともその人手が無く、その上バハルス帝国との戦争も控えているこの時期ですのであまり期待は持てないかと……」

「ままならんなこりや。だがどこかで腹を決めてやるしかないぞ。放っておいたらこの村人までもが野盗化しかねない」

「……わ、私たち、が……？」

おそらくヘレンには想像もできなかったのだろう。自分たちがあのおぞましい存在

になり果てるなど、まだ年若い彼女には考えが及ばない範囲であるのは確かだ。

「……辛いようだが言っておくぞヘレン。人間っていうのはな、追い込まればなんだってやるんだ。死を覚悟した存在ほど恐ろしいものはない……兵士も平民も、動物やモンスターもだ。」

やらなければ死ぬという覚悟がキマッタヤツらはまさに死を恐れない。当然だ。すでに死を受け入れて前に進んでくるんだから。……例え剣で斬られ矢で射られようと、そいつらは決して止まらない。どこまでも突き進んで獲物を狩ることしか頭にないんだ」

「ルイス様の言う通りだ。私もかつて冒険者であったころ、そういう奴らを目にしたことがある……」

……冒険者？ それはアレか、ヘレンが言っていたあの冒険者なのか？

「ねえ村長さん、冒険者ってなに？」

「んむ、レーナちゃんも冒険者に興味があるのかい？」

「うん！ 冒険者ってモモおじさんやヘロおじさんみたいな人でしょ？ ダンジョンに潜ったり冒険したりするんでしょ？ バーツとモンスターに走って行ってドーンッと倒しちゃうんでしょ？」

「んん？ 冒険者っていうのはモンスターを退治してくれる人のことだよ。でもきつと

そのおじさんたちも強かったんだろ。ルイス様のご友人なのであれば、きつとオリハルコン級も目じやないお方々だろう」

どうやら冒険者というものについて認識に齟齬があるようだ。俺たちは冒険者と言えど未開のフィールドを探索したり調査をするのが冒険者という認識だが、村長たちからするとモンスター退治を請け負う者たちを指しているようだ。敢えて振り分けるとすればだが、俺たちの側なら「探索者」とか「探検隊」が最適かもしれない。逆に後者はモンスター退治を主とした「傭兵」や「PMC」のようなものだ。

だったらちよいどいい。元PMC所属の非正規戦部隊で腕を鳴らした男がここに居る。

「村長、こっちの冒険者は端的に言って……儲かるのか？」

「ああ、ルイス様たちはアベリオン丘陵の遙か向こうから来られたのでしたな。まあ、依頼に因るか。難度の高い依頼であれば儲けがあるでしょうが、登録したての
プレートではあまり大したものを受けられない可能性が
銅^{カッパ}」

「なら、ランクが上がれば問題ないわけだな？」

「はい。ですが昇級試験などもありますので、易々とは。ああ、そういえば帝国では冒険者組合もありますが、ワーカーも多いと聞きます」

「……ワーカー？」

「はい。組合を通さずに各々で依頼を受け、報酬を得ている者たちですな」

「……まさしく傭兵の亜種なわけだ。ものによつては濡れ仕事ウエットワークや裏切りもありうる。これはナシだな。リターンもあるがリスクも高い。今は確実に稼げる方法のほうが必要だ。何よりヒビキを人殺しや危険な目に合わせるわけにはいかない」

「そ、そんな……ボ、ボクたちの、ぬ、濡れ場なんて他の人に見せるわけないじゃんかあ……もうっ」

「ちげーからそのピンク色の脳みそを一回洗浄してこい。村長もバーバラさんも引いてるぞ」

頬を桜色に染め、にへら、と笑ったヒビキの言葉に村長も奥さんも絶句している。そしてレーナの耳を塞いでいるヘレン、ファインプレーだ。MVP間違いなしだ。後でござ美にユグドラシル産の高級生ハムを食べさせてあげよう。元はデータとはいえ、実体化しているのなら食べられるはずだし。

「とにかく外貨稼ぎをしつつ食料を買いうしかないか。他にも食料が手に入る伝手があれはなおいいんだが……」

「パパ、お魚さんは？ キリがずっと食べたがつてたよ？」

「……お手柄だレーナ！ そういやそうだ、南側の丘の上の池に魚が居るんだから食べばいいんだ」

「ははは、ルイス様、あそこは森しかありませんよ」

「あの、叔父様……ルイス様の仰る通り、池ができてました。……私にも何がなんだかわからないんですけど」

「……ヘレンちゃん、流石に冗談だろうか？ 何も無い森の中に池が突然できるわけがないんだから」

「叔父様、認めたくないのはわかりますが……本当です。私も最初は目を疑いましたが、確かに池が出来ています」

村長は顔を覆うように手を当てて空を仰ぎ始めた。どうやら自分の頭の中を整理しているのだろう。もしくは現実を受け止めようと必死になっているのだ。

「うむ、であれば今しばらくは持つことでしょう。魚の調理法はあまり詳しくはありませんが、なに、焼けば大概のものは食えるものです」

あ、コレ諦めて開き直ったパターンじゃん。村長にとって理外の出来事らしく処理しきれなかったのだろう。まあ普通なら森の中に池ごと異世界にやってくるヤツなんて、誰も予想できないだろうが。でもその加熱すりゃオツケー的な思考はやめたげて。主に村人の胃のために。

「と、とにかく……外貨稼ぎは必須だな。あとは領主の軍に野盗どもの身柄を引き取りにこさせて、ついでに望みは薄いが来年度の税の免除を請う書状なども必要だろう」

「ですが冒険者はあまりお勧めできません。何しろ駆け出しや低ランクの冒険者の儲けは農民の日々の生活に少々潤いがあるという程度のもんです。そこそこ上位の金級や白金級ですらも多少裕福な市民程度なのです。命を張って頑張ったところで、村に仕送りするほど潤沢な資金が得られるわけではないのです」

「厳しいものだな。己の命の対価がはした金とは」

「そういえばエ・ペスペルでは近年領主殿やエ・ペスペルの産業組合からも報奨金がいくらか贈られるようになったとか。そこそこ潤いが戻ってきたと後輩が喜んでおりましたな。もう三年近く前の話ですが」

「それが本当なら冒険者で稼ぐのもアリだな。確か討伐証明だったかで部位を持ち帰っても金になるとか？」

「ええ。手に入れた部位は商人が売りさばいて、最終的に研究者やポーションの製作者、あとは武具の製作者などが買い付けるのでそこそこいい金額になりますよ。昔は依頼が無いときは日がな一日モンスターを探して歩き回りましたなあ……懐かしい」

「だが可能性が無いわけじゃない。ヒビキ、急で悪いが手伝ってくれるか？」

「もつちろん！ 未来の旦那様を支えるのも妻の役目だもんね！」

「勝手に関係を捏造するんじゃないの」

「もうっ、ちよつとしたジョークだよお？」

お前が言うとはジョークに聞こえないんだ。俺に鼻息荒げに迫ってくるし押し倒そうとするしエロい衣装で誘ってくるしで、まったくもって信用できない。実際押し倒されたしあの衣装で跨られたりした。リアルでだが。

「ねえパパ、もうおしごとなの？」

「もしかしたらな。でもお仕事になっても、帰ってきたらお腹いっぱいになるくらいご飯食べれるぞー」

「パパ、ケーキ食べたい！ ケーキがいい！」

「ケ、ケーキは難しいかもな……ハハ……クッキーくらいならどうにかできるか……？」

「じゃあクッキー！ お留守番してるからいっぱい買ってきてー！」

……甘いものに目が無いというフレーザーバーテキストまで忠実に再現されてるのかあ。この先お菓子を買うか作るかするためにどれだけお金がかかるやら……お財布引き締めよう。

「そうですね。望みは薄くとも、やれるだけのことはやりませんと。野盗を捕えた褒賞でも出ればいいのですが……」

「そこは交渉次第だろうな。ともあれ俺たちもしばらく住まわせてもらうんだ。できるだけの手伝いをするとも。今夜にでも村の相談役や重役と話をしたほうがいい。一存で決めたのでは協力なんて得られないだろうしな」

「……まことにありがとうございます。村を代表してお礼を申し上げます。ではまた今夜にこちらでお待ちしています」

明日からは忙しそうだ。見ず知らずの世界でまったく面識もない相手とはいえ、彼らの命を救ったからには面倒を見なければ。少なくとも彼らがこの難局を乗り切つて生きていけるようになるまでは責任を持つのが筋だ。せめて俺にPMCの頃のように数十人の部下が居れば、様々なことができるのだが、居ないのならば他の方法を考えないと。

まあブレインの強さがこの世界の上位クラスなのだと考えればだが、ブレイン一人いれば外敵に対して十分な時間稼ぎになる。コウモリ軍団が護衛につくのならさらに安泰だろう。

ふう、と思わずため息が漏れる。面と向かつて相対した彼、ルイス・ローデンバツハ氏は間違いなく貴族かそれに連なる出自なのだとはつきり身をもつて感じられた。しかし宮廷貴族のような迂遠な言い回しや曖昧な問いは無く、常に率直で踏み込んでくるような問いかけだ。

貴族の中でも武闘派……だが戦場での槍働きや戦功が第一という人間ではなく、軍政

に長けた人物なのだと言質疑の中で次第に理解することができた。

食料の備蓄、継続的に確保可能な食料の有無、更には周囲から手に入れる方法があるかなど、彼の頭の中では様々な可能性が考えられているのだ。そしてそこからどうすれば効率的に、迅速に村の食糧難を解決できるかを模索してくれていたのだ。

そして食料が無い場合のこの村の未来さえも、彼はすでに予期しているのだろう。食い詰め、野盗になるか共食いになるか……あるいはすべてを捨てて移住するかだ。それを防ぐために彼は全力を尽くしてくれている。

「……しかし、何故、ルイス様はこうまでして……」

わからない。そこだけが未だ持つて不明のままだ。私には理解できない何かがあるのかも知れない。

「叔父様、ルイス様が故郷をピーストマンの手によって失ったことは聞いてますよね？」
「ああ、聞いていますよ」

「……盗み聞きするつもりはなかったのですが、目の前で力ない人々が助けを必要としている。だから俺は彼らにとって当たり前にある大切なものが奪われないように、戦つていくつもりだ」と仰っていました。

あのお方自身大切なものを失って辛いはずなのに、何の関係もない私たちが彼と同じように奪われるのを忌避しているんです。自分が傷ついているのに、それでも私たちが

助けるために剣を振るつてくれたんです。私たちが、あの人と同じ悲しみを負わないように、繰り返さないようにと願つて。

叔父様、私は……ルイス様を信じます。自分自身を賭けてまで私たちを救つてくれた、あの方を信じています」

「へレン……」

当たり前にある大切なもの。私にとつてそれは妻であり、弟夫婦とその娘であるへレンだった。兄弟揃つて畑仕事に精を出し、家族総出で収穫を行つて、村の皆と豊作を祝つて飲み食いする。一日が始まつて友人たちと畑に出て、各々の家内に関する愚痴を聞いたり言つたりしながら一日が過ぎていく。

そんな平凡な一日。起きて友人たちと共に仕事をし、家に帰つて家族と共に過ごし、そして眠る。ごく普通の、ありきたりな……いや……当たり前、だからこそ大切なものなのだ。それを守るために、ルイス様は剣を振るつてくれたのか。

「やつてみせねばな」

この村は救われた。だがまだ先は見えず、暗雲が立ち込めるばかりだ。だけどきつとこの嵐を乗り切ることができたならば——その先に、新しい“当たり前の”平和な日常があるのかもしれない。

正直に言って子どもを寝かしつけるのはとても大変な仕事だと俺は思う。早く寝なさいと言い聞かせたところで、子どもというものはもつと遊びたいとかおしゃべりしたいとか、なんだかんだと多々手を焼かされる。結局レーナとキリを眠らせるのにたっぷり30分を消費し、村長の家に駆け付けたときには既に主要な人物が揃っているらしかつた。

「すまない、遅れた」

「よかつた……！ 何かあつたのかと……」

「いや、単に娘が寝付かなくてなくてな……」

「ああ……遊び盛りの子どもってほんとに自由ですから、仕方がないですよ」

ヘレンは苦笑して「私もよく両親を困らせてましたから」と言つて会議室となつてい
る応接室に案内してくれた。

部屋に入ると既に村長であるサムエルと白髪が目立つ老人、そして立派な体躯の隻眼の男と痩せぎすの中年の男が顔を突き合わせて待つていた。

「遅くなつて申し訳ない。娘が駄々をこねてしまつて」

「子供は元気なのが一番でしょう。少々元気すぎるくらいがちょうどいいものですぞ。ああ、自己紹介が遅れましたな。俺はビョルン、サムエルの前の村長で今は相談役をし

ております」

「俺は自警団の長を務めている。アーロンだ」

「私は墓守のダニエルだ。よろしく頼む」

「ルイス・ローデンバツハだ。よろしく」

俺が席に着くとサムエル村長が「さて」と一言置いて話し始める。ランプやろうそくで明かりは多いはずなのだが、村長の顔色はどうにも優れない。目元にも隈が出来ていて、しばらくまともな眠れていないのが丸わかりだ。

「まずは村の現状の確認から行きましょう。アーロン、村の防備については？」

「柵の修復はおおよそ完了している。見張り櫓に矢避けの板を付け、周囲の森にいくつか罠を仕掛けてある。」

だがもう村には戦える男は数人くらいしか居ない状況だ。次に何十人も賊が来れば……ひとたまりもないだろう」

「フム、やはり厳しいと言わざるを得ぬじやろうなあ」

村の防備はガタガタで戦力も無いに等しいか。ブレインという頭一つ抜けた存在が居るとはいえ、一騎当千という存在とは違う。数を頼みに押し殺されのがオチだろう。数は力だ。せめて彼と同じくらいの実力の人物、もしくは統率の取れた兵士の集団でも居ればいいのだが。

「ビヨルン殿、村の女子供たちは？」

「皆不安がっておるよ。やはり守りが手薄になっていて、盗賊が生きたまま捕縛されている状況はまずい。しつかりとした牢があるわけでもないからのう。かと言って無暗に殺せば儂らは奴等のような人殺しと変わらぬ。今はルイス殿の暗示の魔法で大人しくさせられているが、できるだけ早く領主の軍に引き渡すべきじやろう」

「……すまない、俺たちがもつと——」

「アーロン、あれだけの賊を相手に勝つのは難しいものだ。それこそ軍の兵士でも一人二人程度じゃどうにもならん。だが我々はかろうじて生き残った……ならば次があるということだ。次に備えて、今回の一件をよく振り返った上で万全を期することだ。野盗どもは滅びたわけではないのだからな」

「ダニエルの言う通りだぞアーロン。防衛体制の見直しと戦える者を育てるのは急務だろう。皆で協力して身を守る方法を考えよう」

やはり少々ばかり生かすすぎたか。かと言って今から殺してしまえば、誰がやったのか、という話になり更に混乱を招くばかりになる。あの時もう少し多めに殺しておくべきだった。悪党を殺すのに心が痛むわけでもないのだから徹底して殺して進むべきだった。

「ダニエル、村の食料はどれだけでもちそうだ？」

「村長、刈り取りが終わっていない区画を含め、狩り場などで得られるものを加味したとしても一か月半そこらが限界だ。冬場を乗り越えるには当然足りない。冬場の作物を育てることができれば冬の終わりから春先あたりはどうか食い繋げるが、今の状態では全員が冬を越すことはできないだろう」

「……やはり食料不足は痛いところだな」

やはり食料に関して言えば現状で一番の問題だ。食い物が無いというのは致命的だ。このままいけば木の根や木の皮を食べる羽目になりかねない。その前にどうにかして冬場を凌げるように食料を調達することができなければ意味がない。

「マリエフレード村とニガード・ハガル村に女子供を避難させるというのはどうだろうか？ あの村は湖を水源としているし農地も広い。村の仕事を手伝う代わりに冬の間だけでも面倒を見てもらえれば……」

「無理じゃよダニエル。その二村に限らず全体的に不作の年だと聞いておる。とても余裕は無いだろう」

「かといつて出稼ぎに出ようにも若い男手は村に必要だぞ。エ・ペスペルに出稼ぎに行くにしても、俺たち自警団から人手を出すのは難しい。我々が今ここで村の守りを整えなければ、次に何かあればそれこそ一巻の終わりだ」

「アーロンの言も確かだ。だがビヨルン殿の言もまた真だ。ダニエルの言う通り他の場

所へ避難させることだけでもできればいいが、それも難しい……」

やはりそう上手くいく話ではないだろう。建物や農地はどうか元に戻せても、肝心の人と食料がまったく足りていない。さて、どうしたものかなこれは。

「……領主殿に嘆願状を出すでしょう。兵を派遣してもらい、食料の支援を受けられればひと冬を越せるだけのことはできるだろう。あの領主殿であれば無下にされることはないだろうが……」

「しかしサムエルよ、今年もバハルス帝国との戦が控えておるぞ？ この状況下で手厚い支援が受けられるとは思えん。同時に冒険者組合に依頼を出すべきだろう。

あやつに頼るしかないというのは不甲斐ない話ではあるが、村人たちの未来を天秤にかければ我々のプライドなどちっぽけなものよ。領主殿の兵の派遣は最低限で済むようにして、冒険者を雇い入れて村の守りを補うならば少しは話も通しやすくなるだろう」

「だが爺さんよ、冒険者を雇い入れるにしてもカネが無いだろう。金目のモノは全部あのクソツタレどもが持って行ったぞ」

「……アローンの言う通り一番の問題はそこじゃろう。この村にはもはやめばしいものがない。売れるものなぞせいぜい若い……いや、せめて儂とサムエルがあと数年若ければ、冒険者に復帰して出稼ぎをするなりできたやもしれぬが……」

ビヨルン翁はその年月に裏打ちされた知識と経験からあるものを思いついたらしかった。だがそれは到底受け入れられぬと思ったか、有り得ないと自身の中で切り捨てたか、そのあとに続く言葉は全く違うものだった。

他の四人もビヨルン翁の言いよどんだ言葉の意味を察したのか、口をつぐんで俯いた。

はあ、というため息が狭い応接室に広がっていく。四人揃って頭を抱え、村の現状を打破する方法を考えているものまゝで先行きが見えないことに不安が広がっている。

冒険者を雇えるだけのカネはなく、一か月先を生き抜ける食料もなく、領主からの支援にも限りがある状況だ。そして必要なカネを稼ぐ手段も乏しく、売り払えるようなものもほとんど村には残っていない。

——俺の私財からいくつか売り払えそうなものを売って金に換えるか？　しかしこの世界にホイホイとユグドラシル産の貴重な武器や素材を売り払うのは避けたいところだ。最早入手不可能な物品かもしれないのに、それを手放して出所を探られても面倒だ。

「お金があれば——いいんですよね？　お金さえあれば、少なくともしばらくはどうにかなるんですよね？」

「む、ヘレンちゃん。だが最早この村には——」

「……私が、いきまます」

四人の表情が目に見えて驚愕に染まる。ぎよつとした様子でいたものの、いち早く立ち直った叔父のサムエル村長が顔を真っ赤にして血管を浮き上がらせて怒鳴り声を発する。

そりやそうだ。自身の姪っ子が“自らを売る”なんて言い出したら当然の反応だ。

「へレン！ ふざけたことを言うんじゃない！ お前のお父さんやお母さんの献身を無駄にするつもりかっ！」

「ふざけてなんかいません！ 叔父様！ 私だって村の一員です！ 村のみんなのために命を賭ける覚悟はできています！」

「やめるんじゃないやへレン！ 我々はそのような手を使う外道ではない！ 村の者たち全員が生きて延びる方法を見つけ出すのが我々の務めじゃぞ！ 決して自らを犠牲にするような真似は許さんぞ！」

「そうだ！ へレンちゃんにそんな辛い仕打ちをさせるわけがないだろう！」

「三人の言う通りだぞへレンちゃん。落ち着いて考え直すんだ。そんなことしたって誰も喜ぶことなんかありはしないんだ」

へレンの言葉に対して次々と沸き起こる反論の数々。全員険しい表情で椅子から腰を上げ、へレンをにらみつけるように威圧しているが、へレンはどこ吹く風と平然と立

ち上がって向かい合う。

彼女は村の人々のため……愛する村のために自らを投げ出そうというのか。ヘレンは本当にこの村を……父と母が愛したこの村を、自身も心から愛しているのだろうか。そんな彼女の我が身を顧みない献身……自らを人買いに売ろうとしてまで村のために尽くそうとするその優しさは確かに美徳ではあるのだろうか、それは彼女を慕う人々の想いを足蹴にするような愚行だ。

叔父であるサムエル村長、相談役として長いビョルン翁、自警団として村を守るアロン、死にゆく人々を見つめてきた墓守のダニエル、それぞれの感じた思いは違うだろうが根っこにある大事な想いは全員に共通するものなのだろう。

「……私はこの村の人たちが大好きです。朝起きて地平線から昇る太陽を眺めるのも、小春日和の草原を歩き回るのも、冬の辛い寒さで凍った森を眺めるのも、子どもが生まれたお祝いの宴会の準備をするのも……みんなとおしゃべりしたり仕事したりするのが大好きです。

失くしたくないんです！ もう！ これ以上みんなが苦しむのを見たくないんです！」

「……ヘレン、それでも……ダメだ……そんなことになったら、俺たちはアイツに……お前のお父さんとお母さんに……なんと言えば……！」

「大丈夫です、叔父様。私は……この決断を、後悔しません。私なら……必ず、お金を得られるはずですよ。そう、私は必ず——」

サムエル村長は今にも泣きだしそうな顔でヘレンを説得しているが、ヘレンは既に腹を決めたという様子で笑って見せた。

この先、自らを売り払って奴隷になって待ち受ける未来を考えてもなお、ヘレンは笑ってみせたのだ。本当に……この子は強い子だ。

「——冒険者に、なってみせます！」

「は？」

「へ？」

「ほ？」

「う？」

「ぬ？」

「——え？ ど、どうしたんですか？」

（。 。（ ） ……………

（。 。（ ） ……

「な、なんですか？ み、皆さん？ なつ、なぜ……見てるん……ですか？」

ふんす、と鼻息荒げに息巻いてヘレンが自信満々に笑みを浮かべて宣言したが、そのあとの我々の反応でその笑みも消え去ってしまった。

全員が席を立ったままポカーンとした間抜け面でヘレンを見る。さっきまでの険しい表情で詰め寄ってきた四人が突然啞然としてこちらを見てくるからか、ヘレンまでもが彼らの行動を訝しんで困惑した表情を浮かべている。

が、それも束の間でしかなく、示し合わせたようにそつと椅子に腰かけると至つて平静な様子の村長が話し始める。

「さて、どうやって資金を稼ぐべきでしょう。皆さん、良い案はありますか？」

「え、あの、叔父様……？」

「儂からはペスパア侯に嘆願状を送ることを提案しよう。捕縛した野盗の引き取りと食

料の支援、それに加えて来年度以降しばらくの税を一部なり全部なり免除してもらおう交渉しよう」

「ちよ、ビヨルンおじいさん——」

「なら自警団から三人護衛と世話係につかせよう。出発は早いほうがいいだろう？」

「おお、助かるぞアーロン」

「アーロンさん？ アーロンさん？」

「村長、ビヨルンさん、二人は冒険者組合に伝手があるだろう？ 元白金級なんだからその伝手で冒険者を手配できないか？ 報酬が嵩むというなら組合か領主に立て替えてもらえないか交渉してみてもどうだ？」

今年の冬を乗り越えれば少なくともしばらくは安泰だ。収穫が戻るだろう来年度以降で少しずつ返済を行っていくか、エ・ペスペルに何人かで出稼ぎに出て少しずつ返済を始めるでもいい」

「……………あの……………もしもーし？」

「エ・ペスペルで冒険者をするのなら俺とヒビキもやろう。腕に覚えはあるし、村の護衛ならブレインと、エ・ペスペルで雇った冒険者で事足りるだろうからな。」

俺は冬場の間で稼げるだけ稼いで、そのうちのいくらかを返済に充てるとするさ。月に一回は戻るから、しばらくの間娘のレーナとキリをよろしく頼む。ヒビキはそれでい

いか?」

「よつ、と……ボクとしてはいいけど、ちゃんとレーナちゃんに説明してよ?」

「うひゃあつ!!? ヒビキちゃん!!? い、今床下から出てこなかった……?」

「おおルイス殿、ありがたい! お二人の協力に心より感謝致します。では明日の朝出発でよろしいですか? ……異論は無いようですね。では明日の明朝に村の入り口で。

以上! ではこれにて閉会!」

「僕は準備してから寝る」

「俺は連絡してから寝る」

「私は瞑想してから寝る」

「よしつ、じゃあボクたちも寝よつか。ユウくん、ボク今日は一緒に寝たいなく」

「いいぞー。すぐ寝よう今すぐ帰って寝よう。それじゃ俺たちは〈転移門^{ゲート}〉で帰る」

さあ、明日からは忙しいぞー。ああー、たいへんだー。

「——む、無視しないでくださいーい!」

何か叫び声が聞こえるけど気のせいだろう。きつと気のせいだ。

「フウーツ……」

「ハアアア……」

地平線の向こうから太陽が顔を出す。薄暗かった夜が明け、また新たな一日が始まる。目の前で剣を鞘に納め、〃居合い〃の構えで待ち受ける彼に太陽の光が降り注ぎ、影が伸びる。

じり、じり、と少しずつお互いの距離が狭まっていく。剣の届く間合いに近づくと、ついに、一刀を以って斬り捨てんとする断固たる意志が棘のようにチクチクと肌を刺す。

「カアアアッ！」

烈火の如き咆哮と共にブレインの刀が抜かれ、鞘の内でも加速して俺の頸に迫る——のいくらか遅れて同じように剣を抜き放って迎撃する。柄に手をかけ、抜刀し、加速させ、相手をこちらの間合いに捉え、ブレインの剣がなぞる軌跡の先へめがけて、己の剣を振り抜く——これを瞬時に、かつ同時に、極地の一つである無拍子で放つ。

「ぐおっ!? ……くっつそ、まだ早くなるのか……い！」

キインツ、と甲高い音を上げてブレインの手から刀が弾かれる。やはり頑丈さを追求した作りを目指しただけあって、俺が持つ同格の武器とぶつかっても欠けることすらない。そこそこ硬いはずの広場の地面に垂直に突き刺さる程度には鋭さも併せ持っていないながら、多少手荒に扱っても壊れない頑強さがあるのは素晴らしい。ゲーム内ではイマイチ実感できなかったが、こうして打ち合ってみると改めてこれが現実なのだという

実感がある。

「剣の振りの速さは十分だな。間合いに入るとすぐに剣を抜けるあたり読みもいい。だが動きがイマイチ噛み合っていない感じだな」

「なあ、さっきのは確実に俺より二拍遅く剣を抜いたんだよな？」

「当たり前だ。その二拍さえ抜き去るのが『無拍子』だ。全てが予備動作であり攻撃そのものと言っている、一つの到達点ってやつだ」

「……これで『武技』一切無し、か。いや、もしかすると武技つてのは本来こういうものを言うものなのかもな……」

「俺としては武技のほう信じられないくらいだ。なんだよ、超加速に身体能力向上つて。感覚の鋭敏化なんかもできるとか、ぶっちゃけお手軽すぎだろ。気合で能力アップとかこのドラオンボー〇だよ」

「その武技を技術一つで打ち破ってるお前さんのほうがわけわからんのだがな」
「鍛えりやこれだけできるって話だ。武技の使えない俺ですらも、だ」

時間が無いので夜明け前にブレインと鍛錬がてらに剣を振っていたのだが、以前ブレインが使った武技について聞いてみたところ『なにいつてんだこいつ』くらいの顔で呆けられた。どうやら著名な武人や高位の前衛職……戦士や剣士、モンクといった職業クラスを持つ者たちは多くが何かしらの『武技』を身に着けているらしい。

俺にも習得できないものかと助言を受けてみたものの、使えるような気配はないままだ。一日で使えるようになったらそれはそれでおかしいっちゃおかしいのだが、ユグドラシルから来た異邦人である俺のアバターが持つシステムの要因なのか種族的な制約なのかは不明だが、助言などを受けてみても使える気配が無い。

発動には体力……所謂HPやスタミナのものを消費するらしく、あまり乱発するものではないそう。ここぞというところで使うことで飛躍的にダメージを増加させたりするなど、火事場の馬鹿力というか乾坤一擲というか、アクティブスキルのような使い方ができるらしい。

武技が発動している間のブレインはまさに「無我」と言っているほどに集中しているのだが、発動なしの場合はやはり技の格が落ちるような感触があった。簡単に解釈すると、「HPやスタミナを代償に高度な技術や能力を一時的に得る又は発動するもの」が武技なのかもしれない。

「それにしても、武技が使えないってのは厳しかったろう」

「あればよかったが無いものは仕方がない。代用できるか、補えるだけのものを手に入ればいいだけの話だ」

「そんなもんなのかねえ」

「そんなもんさ。相手が武技を使つて肉体を強化してくるのなら、距離をとつて回避に

専念して持続時間切れを狙ったっていいし、攻撃の届かない遠距離から仕掛けるでもいい。毒や麻痺なんかの状態異常も手段の一つだな。あとは地形なんかを利用して優位に立つとかだ。相手が機動力を上げてくるのなら足場の不安定な場所や閉鎖空間、他には泥沼に誘い込んだりして機動力を發揮できない状況を作る。あとは発動される前に奇襲で一撃で刈り取るのも方法の一つだ。倒してしまえばそもそも攻撃を受けないんだからな」

「なあ、お前さん……剣士なんだよな？」

「俺の好きな言葉を教えてやるよブレイン、先人曰く『武人は犬畜生と罵られようと、戦で勝利することが最も重要だ』ってな。どれだけ人柄が清廉潔白だろうと、崇高な大志や誇りを掲げようと、戦争で負けるようならそんなものは意味が無い。負ければ国は衰退し民は蹂躪され失うだけだ。」

他人から罵られるような方法でも、時としては戦争で勝利するためには躊躇わず使えってことさ。武人が戦争で負けて失うのは、自分の命だけじゃないんだからな」

「ああ、そういやあ軍人崩れなんだったな……納得した」

相棒の刀——和泉守兼定を模した一振りを鞘に納めたブレインが肩の凝りをほぐすように腕を回す。手のひらを握ったり開いたりしているあたり、まだ少ししびれが残っているらしい。

「感触は掴めそうか？」

「やってみなきやわからないな。ま、やってみるさ」

「修練あるのみだ。励め、ブレイン」

俺の相棒の刀をアイテムボックスに収めると、いつもの汎用装備であるショートソードとダガーの二刀流を腰にベルトから下げて背中に身の丈はあるクレイモアを背負う。俺がユグドラシル時代から愛用する基本的な旅装備だが、ブレインからするとどうも奇妙らしい。

「鞘付きとは豪勢なことだ。刀と扱いが違うのに、いざというとき抜けるのか？」

「慣れだ。普通の剣の抜き方だって効率化すればすぐに抜けるぞ」

「オーケー、俺の常識は通用しないって理解した」

ひらひらと手を振るブレインに背を向けて広場を後にする。村の入り口に向かうと既に旅支度を済ませた男たちとヒビキ、それに村長夫妻とヘレンが待っていた。

「ユウくん、もういいの?」

「ああ、いいぞ」

目立つ格好はやめておけと言ったからか、ヒビキはヘレンのお下がらしい村娘風の服に着替えている。とはいえ妙に胸元が膨らんでいることから見て暗器は満載しているらしい。スカートも地味に見えるが風で揺れる際の動きに違和感があるため、そちら

にも何かしらの仕込みがしてあるのだろう。

「待たせたようですまないな村長殿」

「いえ、お気になさらないでください。朝の鍛錬というのは気持ちのいいものですからな」

「流石は元冒険者、か」

「昔取った杵柄と言うものです。では改めて紹介致しましょう。自警団のアラン、イエリック、メルケル。そして一つ前の村長をしていたビヨルンです」

「……あの見張りの時の」

どこかで見た顔だと思つたらブレインの見張りをしていたときの三人組だ。それがどうしてまたこんな遠征部隊に同行するのだろうか。

「アランだ。改めてよろしくな、大将」

「イ、イエリック、です！ よ、よろしくお願いします！」

「メルケル。今回の遠征、我ら三人が身の回りの世話や護衛を務める。よろしく頼む」

「改めて、ビヨルンじゃ。村長をしているサムエルとは同じ元冒険者でな。かつては共に白金級のチームである『グリユプス』で十年間戦ってきた。何か知恵が欲しい場合は農に尋ねとくれ」

顔ぶれは様々だ。アランという筋骨隆々の青年、イエリックと名乗った線の細い少年、

ビヨルンは大柄で大男と言うべき中年の男だ。そして枯れ木のような見た目でありながら覇気に満ちた老人、ビヨルンは年を召したとは思えないハキハキとした喋りと真つすぐ伸びた背筋を曲げて一礼をする。

「ルイス・ローデンバツハだ。護衛を務める。元は軍人なので戦事に多少通じている。困った場合は俺が応対しよう」

「ヒビキです！ ユウくんのお嫁さん第一候補者で——いたいっ！ 痛いってばユウくん！ わかった、マジメにするから——」

「なら最初からマジメにするんだ」

「うー、ヒビキです。ユウくんのいとこです。修めた職業クラスは主に斥候・偵察系で、森祭司ドルイドや錬金術師アルケミストもちよつとだけできます」

おふぎけや冗談なしでもできるじゃないか。わざわざアイアンクローでこめかみをギリギリとやられなくてもできるんだから最初からそうすればいいのに。

「ほう……まだ年若いというのに森祭司ドルイドを修めておるとは、才気に溢れておるのう」

「ちよつとした真似ができる程度だよ、おじいちゃん。本職にはやっぱり敵わないもん」「いやいや、その年でそれだけできれば上等なものさ。ゆくゆくはアダマンタイト級にもなれるだけのものがあるだろう。精進なされよ」

まあ、既にレベルは100なのでこれ以上鍛えようがないんだが。とりあえずヒビキ

は既に村娘として馴染んでいるらしく、他の三人とも顔見知りらしかった。挨拶もそこそこで済ませると出発しようとしたが、ヘレンに声をかけていなかったのを思い出す。

「ああ、ヘレン」

「は、はい！」

「行つてくる。レーナを頼む」

「——はい、道中お気をつけて！ あ、ルイス様、これを」

突然呼ばれたのにびっくりしたらしかたが、すぐに元の年ごろの少女に戻つて元氣な返事を返してくる。彼女が差し出した右手には手製のものらしい、木彫りの彫刻に麻紐を通しただけの簡単なつくりのお守りがあつた。

「お守りを作つてみたんです。大したものじゃないかもしれませんが、あの、道中の安全を祈念したものです」

「ありがとう、ヘレン。じゃあ俺からもだ」

「これは……クリスタルですか？ ……すごく、きれいです」

お返しにと小さな水晶がついたネックレスをヘレンの手に握らせる。麻紐に加工された水晶が一つくつついただけの簡素なものだが、こう見えて特殊効果が付与されたものだ。まあ、ガチャで大量に出てきたアイテムだが、効果はそこそこ有用なものだから損にはならないだろう。

「ずっと大事にします！ おばあちゃんになって死ぬまで、ずっと大切にします！」

「いや、そこまでしなくても……」

「じゃあ毎日欠かさずつけておきます！」

「あ、うん……それがいいかな」

ちよつと自然回復力が増す程度の、ノーマルに毛が生えたくらいのレアリティの首飾りだ。おそらくこの世界では「疲れがとれやすい」とか「よく眠ったらスツキリした」程度のものだろう。それでもヘレンがこれから自分だけでやっていかなければいけないことはたくさんあるのだ。少しでもその助けになるようなら幸いだ。

それにしても、一見すると使い道が無さそうなアイテムにも有効活用できそうな可能性があるのかもしれない。最後の最後に余ったポイントを使って引いたガチャのハズレがこんな形で役立つとは思わなかった。俺には使い道が無いが、ヘレンたちにはおそらく有用なアイテムだろう。

「皆が待っているし行くとするか」

「はい。あの、……い、いってらっしやいませ」

「ああ」

さて、ここからはしばらく歩きの旅になる。いろいろと考えることもあるし、検証するべきこともあるがまずは無事にエ・ペスペルへ到着することが最優先だ。護衛や監視

役を残してあるとはいえレーナー一人というのは俺としても不安が尽きない。さっさとエ・ペスペルの位置を記録して〈転移門〉で行き来できるようにしなければ安心するどころではない。

「き、今日は、て、天気……よきそうだね、ヒビキ」

「だよね！ 風が少しあるけど気持ちいいよね！ ねえ、エ・ペスペルつてどれくらいで着くの？」

「えっ？ あ、歩きだから、えーと、どれくらいだ……？」

「ええー……イエリク、知らないんじゃない？」

「しっ、仕方ないだろ！ 俺も初めて行くんだから！」

先頭を歩く二人組、うちのヒビキとイエリクと名乗った少年が先導するように歩きはじめる。その後ろから若者たちの微笑ましい様子を見守るアランとメルケル、そして護衛でもある俺が最後尾に立ってビョルン翁を護衛しつつ続いていく。

「ほっ、若者というのはいいいものだの。お前さん、年はいくつかね？」

「今年で34ですよ」

「なんと、とてもそうは見えぬのう。精々25くらいかと思うておったぞ」

「10歳の娘が居るんですからこのくらいでしょう」

「いやはや、お前さんも随分と晩婚であつたのじゃな。……まあ、位の高い家系となれば

しがらみとはいつでもついて回る面倒事の種じやろうから、さもありませんというべきか。

儂は冒険者をしておった故に30手前で嫁を取ったが、他の者たちは20になるかどうかでもう結婚しておったなあ」

「……まあ、平均的にはそのくらいでしょうね」

「だのう。儂にも年のそう変わらん甥っ子がおったしな。かつての戦の折に戦死してしもうたが……あやつとは楽しく酒を飲んだものだった」

「心中お察し致します」

「カカカ！ なあに！ 年寄りとなれば大概のものは踏ん切りがついておるよ！ 気にせんでくれ！」

ビヨルン翁は快活に笑うとにこやかに笑って軽く水筒の水を口に含んだ。やはり時代的にはこの世界はリアルでの中世以降の文明レベルだと推測するのが適当だろう。石や木で組んだ家屋や、家具や調理器具などを見てもおおよそその程度の文明レベルだとわかる。武具に弓矢や剣はあるものの銃が無いことから、この世界ではまだ火薬やそれに類するものが出来ていないのかもしれない。

とはいえそれは今この村の生活レベルを見ての判断でしかない。都市で情報を集められればよりこの世界についての詳しい知識を得られるだろう。

丘陵地に立つ村——グリプスホルム村というらしい——から下って森の中を走る街道を抜け、もう一つの丘を越えていくと一面に青い景色が飛び込んできた。どうやら丘陵地や森の影になっていて村からは見えないうらしく、結構な大きさの湖が東西にドンと横たわり、我々の行く手を阻んでいた。

青い空に白い雲。凪いだ湖面は鏡のように世界を映し、薄らと見える対岸はぼんやりと幻のようだ。

「へえ……いい場所だな。魚釣りでもしたら楽しそうだ」

「ああ、いえ……魚は釣れませんよ、大将」

「なんでだアラン？　これだけ立派な湖なら魚くらいは……」

「いえ、釣れるのは釣れるんですが、〃そもそも釣りができない〃んです。だって水中に棲むモンスターが居るんですぜ？　もしうかつに近づけば……」

「ガブリッ、というわけじゃよ。お陰で船も渡せず……ほれ、回り道する街道があるじゃろう。これを大きく迂回して進むしかないんじゃない」

なるほど、この湖が邪魔になっていて村へ行くにも出るにも大幅に時間をロスしているわけだ。しかも食料源として活用できるわけでもなく、水源として使えるわけでもない。

「しかも水棲のモンスターは他の地上のモンスターよりも強力な場合が多い。若いころ

の儂らも一度は挑んだものだが、数と力に圧されて結局は退くしかできなんだ。おそらく太刀打ちできるのはアダマンタイト級やガゼフ・ストロノーフ殿のような英雄と呼ばれる者たちくらいかの。

しかしそれでも数が圧倒的に足りぬ。囲まれてしまえば各個撃破されてしまうだけじゃし、万一水中に引きずり込まればそのまま魚のエサじゃ」

「面倒だなこれは……さてどうするか」

個人的には〈全体飛行^{マステフライ}〉でも使つて軽く飛び越えたいところだが、村人たちにとつては魔法など超常の力だろうし、空を飛ぶなど考えることもできないだろう。しかしショートカットができるのであれば使わない手は無い。我々の働き次第で村の運命が左右されるのだ。可能な限り早く到着したいところだ。

「とはいえモンスターをまずどうにかしなければな……」

「大将、こいつらを食い物にするってんなら後で考えましょうや。早くしねえと昼を回つちまう」

「……すまん、少しだけ見えてきてもいいか？」

「へい、構いませんが早めにお願ひしますよ」

「あつ、ボクも行くー！ ユウくんだけ面白そうなことするなんてズルいよ！」

「あ、危ないってヒビキ！」

「ヘーキヘーキ！ イエリクは待つてよ！」

ほんの少しの段差——膝より少し高い程度——を飛び降りるとそこはすでに砂浜だった。砂地は茶色でさらさらしているが、波で打ち上げられた水草や何かに捕食されたりしい菌型のついた50センチはあろう魚の死骸が打ち上げられていた。

「くうっ……冷たいけど気持ちいいー！ ユウくん！ ここに別荘とかあつたら最高じゃない？ 景色はいいしお水はキレイだし風はキモチいいし！ 何よりご飯に困らないって最高だよ！」

「ヒビキ、お前さっきの会話聞いてたか？」

すでに革をなめたブーツを脱ぎ去って砂浜を楽しむヒビキの姿に頭が痛くなる。スカートが濡れないように指先でつまんで水遊びをする様子はもはや童心に帰ってはしゃいでいるだけではない。

そのヒビキの後ろの水面で、黒く長細い影が駆け抜ける。どうやらさっそく嗅ぎつけられたらしい。

「ヒビキ！ 後ろだ！」

「え——うわあっ!？」

水面を飛び出し、跳ねるように突撃してくる青白い魚体。鋭くどがった顎が振り返ったヒビキの喉元へ突き刺さらんと伸びて——

「あつづがないなあもうっ！」

パシン、と何気ない素振りでヒビキにつかみ取られた。流石にこの展開は読めていなかったのか、ビチビチと体を暴れさせるもののヒビキの手はビクともせず、その鋭い上あごを掴んで離さない。

「ねえ、ユウくんこれどうしようっ？」

「とりあえず〈解析〉つと……」

ふむふむ、ブレードフィッシュねえ……属性は水でレベル25か。こりや村人じゃ無理だな。ブレインならどうにか捌けるかというレベルだろう。もしこれが最弱クラスなのだとしたらガゼフ・ストロノーフというヤツもレベルにしたらそう高いものではないだろう。ブレインが33、そのブレインに勝利したのがガゼフなのだから、おそらくレベル帯にして40手前という予測ができる。例えレベル差が15あろうと、囲まれてタコ殴りにされればガゼフとやらもこの魚には勝てないだろう。

おつ、食材アイコンがある。ということは毒なんかは無いから食えるということだ。久々にウマイ食事にありつける可能性が出てきたな。

「よし、こつちによこしてくれ。あとついでにもう一匹頼む。メてから昼頃に捌いて焼き魚にしよう」

「オツケー！ さあこいボクたちの昼飯！ ……………来たっ！」

またしてもヒビキを狙った一撃が水中から放たれる。まるでダツとかいう魚のようだ。鋭く尖った顎で時に人を殺すほどの魚がリアルでも生息していたのだからありえないわけではないのだろうが、おそらく現地人にとってこの世界の魚は軒並み凶暴なヤベーやつらでしかないだろう。

そりゃあ魚を食べる文化なんてそもそももあるわけがない。こんなのを相手にしていれば命がいくつあっても足りないだろう。

「獲ったど〜！ ユウくん、二匹目ゲットしたよー！」

「上出来。後は寄生虫が居ないかどうか……デァイテクト・ライフ生命感知………オツケー。これでアイ

テムボックスに放り込んで……ヨシ！」

わざわざ魔法も使って二匹のブレードフィッシュに寄生したものが無いか確認する。過去には寄生虫が大きな問題になっていて、古くはタタリや神罰などとされたほどのものさえあったらしい。現実に近いこの世界のことを考えるとあらゆるリスクを考えて行動しなければ。

殺人アメーバなんてものに当たりでもすればそれこそ最悪だ。この中世前後の文明レベルしかない世界では、脳を食いつくされて死ぬのを待つしかできないだろう。脳を食われればまともな思考などできやしないし、そんな状態になって俺やヒビキのようなレベル100のヤツらが暴れまわったらどうなることか。

「ふう、待たせたな。昼飯を確保した」

「すつごい気持ちよかったー！ 今度水浴びしたいなー」

「……お、おう」

ここを安全に渡る方法は後で考えるほうがいいだろう。俺が居なくても安全に渡れる方法を確立させれば、村の発展に寄与することはもちろんとして、食料事情や財政も潤うことになるだろう。良質の麦が育つらしく、酒造りを行えばいいものができあがるはずだ。

問題はそれらの酒が受け入れられるかどうかだが……今考えても仕方がないだろう。果実酒や醸造酒のほうが好まれるのならマーケティングを地道に行って販路を拡大するのでもいい。

移動が多い冒険者や街に住む兵士などに安値でウマイ酒があると風評していけば自然と噂は広がっていくだろう。そこに商人が食いつけばブランドとして高級品を売り出し、高位の身分の人々に広めていくのも手だ。

「ん、ユウくんまた何か考えてるでしょー？」

「そうだなあ……この湖を空を飛ばずに突っ切れる方法とか？」

「ふーん、それって役に立つの？」

「立つとも」

ほんの少しの寄り道ではあったが実りのある収穫だった。魚を手に入れられたし、グリップスホルム村の活性化のための方法もいくつか頭に浮かんだ。同時に交通の便が悪いという点や、街道沿いは野盗などが待ち伏せしやすいような地形をしている場所もあるという改善点も見つかった。

森の中は大きな岩が隆起してちよつとした丘のようになっていたり、窪地になっていたり坂道になっていたりと足場の悪さや視界の悪さが目立つ。森を抜けても雨風で侵食されたらしい地形が高低差を生み出し、奇襲や伏兵に向く地形が多く存在している。

おまけに橋が少ないのも難点の一つだろう。いくつか小川を超えてきたが、浅いものとはいえ馬車や荷車が通るには少しばかり酷な道のりだった。

再び歩き出して湖を回り込んでいくと、アランがぼつりとつぶやきを漏らす。

「しかしまあ大将は強いと知っちゃいたが、あの子まであんな真似ができるなんてな……」

「同感だ。ルイス様の實力はブレインとの戦いで見たが、あの少女があそこまでできるとは……」

「アラン、メルケル、二人とももう少し目を鍛えねばな。見た目で判断しておつては思わぬところで足を掬われるものでな、それで命を落とす冒険者も少なくないものじゃよ」「ビョルン翁の仰る通りだ。だが少なくともヒビキはまだ子どもだな」

十メートル先を歩く二人、ヒビキとイエリクは同じ年代ということもあってかすぐに打ち解けたらしい。ヒビキはユグドラシルでモモさんやヘロヘロさんと共に潜った生命科学研究所ダンジョンの話をしているらしく、語り口に熱が入っている。

「でね、そのときモンクの人が足止めして時間を稼いで、魔法詠唱者の人が大魔法でドーンツてそのキマイラを消し飛ばしたんだ！ ボクは暗器や忍術でモンクの人を援護してたんだけど、突然横からもう一体キマイラが出てきてさ。そこをユウくんがズバーツて一刀両断！

そのまま後ろから来たモンスターの群れに飛び込んで——」

「あ、ああ」

「ん——どうしたの？　なんかボーツとしてるよ？　顔も赤いし」

「な、なんでもないって」

「むむー……そうやって『なんでもない』っていうのは一番怪しいんだよね」

ヒビキがイエリクの顔を覗き込むとイエリクはさっと逃げるように顔を逸らす。とつか気づいてやれよヒビキ。時としてハッキリキツパリと相手を振るのも大事なことだぞ。恋愛なんて後腐れのないようにするのが一番大事なことなんだ。

……俺のように愛し合った元彼女が他国のスパイで、尋問の末に死亡するなんて後味の悪い終わりを迎えることの無いようにするんだ。あの時元妻の紗耶香に会っていな

ければ俺はきつと未だに立ち直れていないだろう。

「……カンペキに惚れてるな」

「だろうな」

「カカツ、いいぞ。青春じゃな」

「前途多難だけどなア。なにせライバルが大将だもんな」

「まだ無理だ。あいつを一人の女として見るには、ちよつとな」

「もし本気で来たらどうするんで、大将？」

「そのときは相応の対応をするさ。丁重に扱うとも」

「——イエリク、折れるなよ……強く生きろ」

もしも俺がヒビキを一人の女性として見れるようになったなら……迷うこともないだろう。今はまだ家族、妹のような存在としてしか感じられないが、あの子も成長すればきつともつと女の色香を身に着けることだろう。

エ・ペスベルへ

湖を回り込んで歩いていくこと数時間、最初に湖を眺めた場所のちようど反対側にようやくついたらしい。しかし湖から伸びる街道はさらに丘の向こうへ伸びていて、また上り坂を登る羽目になるのだろうかと考えると気が滅入ってきそうだ。この世界の文明レベルから見ても交通の便が悪いのは確かだが、何故あんな辺鄙な山奥に村人たちが住むことになったのだろうか。

「ビヨルン翁……一つ、尋ねたいのだが」

「なんですかな？」

「……グリプスホルム村だが、なんであんな僻地に村を興したの？」

「ううむ……そうじゃろうなあ、そう思うのも仕方がないじゃろう」

「交通の便は悪い。これといった名産品で潤っているわけでもない。麦は良質だそうだが、農地がそこまで広くないから量はあまり多く獲れるわけでもない。湖は村よりも低い場所にあるし、豊かな水源が近いわけでもないし、はつきり言ってしまうと村なんてものが形成されたのが不思議で仕方がない」

ううむ、とビヨルン翁は悩まし気に真っ白になった顎髭を撫でる。村が起きたからに

は何かしらの理由があつてのことなのだろうが、何故悩む必要があるのだろうか。

「ビヨルンのじい様、ルイス様になら問題ないかと」

「メルケル、しかし、これはどう説明したものか……」

「わかっていることを伝えてみりゃいいじゃないか、じい様よお。どうせ俺たちが考えたつてわかんねーことなんだし」

「……かもしれないなあ。少しばかり昔ばなしですが、構いませんか？」

「頼む」

「儂も伝え聞いた話、村の起こりは400年よりも以前……八欲王が現れ、世界を混沌に陥れたところであつたと言われておる。それ以前のヒトはビーストマン以外にも異形の者たちなどに追い立てられて世界の片隅へと押し込められ、緩やかに滅びの道を歩んでおつたらしい。ヒトの近縁の種の中には苛烈なまでに迫害され、遂には滅亡した種すらあつたそうじゃ。

だがそこに六大神が降臨しビーストマンや異形の者たちを打ち払い、今の人々が暮らす領域が形作られたという。その際に六大神に付き従う従属神たちが戦の折に主より命を受け、陣を敷いたのが今のグリプスホルム村だつたそうじゃ。我々の祖はその戦いに於いて六大神に助力した勇士たちから始まつたと伝わっておる。

しかし世界を手中に収めんとする八欲王との戦いに於いて六大神の最後の一柱スル

シャーナとその他の六大神の従属神、それに加勢した勇士たちは悉くが滅ぼされたとのこと。唯一生き残った若者とある従属神が子を成したそうですが、その従属神も色欲を司る八欲王によつて連れ去られ、若者がどうにか子を連れて命からがら逃げ延びた地がグリプスホルムの陣の跡だったとか。

彼らの子を逃がすために戦った六大神の最後の一柱と八欲王との戦いは天地が裂け、時も凍てつく激戦を繰り広げ、放たれた六大神の、或いは八欲王の剣や魔法によつて元は平野でしかなかったこの場所にグリプスホルム湖や丘陵地が作られたと言われている」

また知らない単語が山のように出てきたぞ。六大神に八欲王、従属神なんて聞いたことが無い。聞いた感じではこの世界の創世神話つてわけでもないだろうし、これが創世神話であるのなら5000年程度でこれだけの文明レベルを形作ったということになる。

ホモサピエンス……リアルでの人類は今のこの世界の水準の文明レベルに至るまでに何千年とかけているのだ。人類種が他の長命な種族たちと比較して世代交代や変化の速度が速いと言つてもたつた5000年でここまでできることはできないだろう。

「なるほど。大体わかった」

とりあえず今はおおよそ理解しました程度の返しでいいだろう。深い考察や推測はするべきじゃない。

「要するに神様の子なわけだ。しかし八欲王の目に留まるのを避けるために、敢えてこんな山奥の深い場所に住んでいたと」

「そうなりますな。まあ、その八欲王も既に滅んで久しいものですが」

「どうやら八欲王とかいうのはクソツタレだったらしい。まあ事実がどうなのかは実際に目にしたわけでもなく、詳細なかつ信ぴょう性のある記録を読んだわけでもないのだからないが、こういう話が伝わっているということは少なからず事実が含まれている可能性がある。」

そのまま素直に読み解けば、八欲王は六大神という人類種の味方——というか最後の一体であるスルシャーナ——を葬り去り、生き残った数少ない従属神とやりに恥辱の限りを尽くしただろうことは想像するに難くない。

あの隆起した岩や巨大な湖が六大神や八欲王の戦いの痕跡だと言うのなら、とんでもない戦いを繰り広げたのだろう。おそらくこの世界の住人では到底及びもつかないよ
うな……いや、まさか——

「プレイヤー？」

「ふれい、やー？」

「ああ、いや、少し深読みしすぎただけだ。おそらく俺の考えすぎだな」

危ない。思わず声に出しているとか何をやっているんだ俺は。

とはいえ考えてみればこの可能性があり得ないというのは「あり得ない」のだ。なんせ俺やヒビキ、果てはレーナやキリまでもがこの世界にやってきているのだ。レベル100のプレイヤーやNPCなら天地がぶっ壊れるようなド○ゴン○ールでやれと言わんばかりの超位魔法やワールドアイテムを行使していたって不思議ではない。

実際、俺もアイテムボックス内に入れてあるとはいえワールドアイテムをこの世界に持ち込んでしまっているのだ。効果は相手の状態異常耐性を無視して石化を付与し続けるのが第一にあり、第二に自身のスキル・魔法の持続時間や範囲や効力が上昇するつという程度の地味なもので、直接的な被害を及ぼすようなものではない。だが使い方次第では都市丸ごと灼熱地獄に変えるとかポンペイのように住人全てを石像に変えてしまふようなこともできるだろう。あとはオマケ程度に効果範囲が目に見えるようになっていくくらいだ。

もしも俺たち以外にもプレイヤーがこの世界に來ているのだと仮定すると、六大神や八欲王はプレイヤーに相当し、従属神はNPCに相当するだろう。そしておそらくだが、NPCも居るということは「ギルド拠点がそのまま飛んでくる」可能性があるというところでもある。

つまり、俺のホームである白の館がこの世界のどこかにあるかもしれないわけだ。しかし同時に他のギルド——アインズ・ウール・ゴウンのナザリックやネコさま大王国、2

ch連合など大手ギルドの拠点が丸ごとポンとこの世界のどこかに存在しているかもしれないのだ。

もし拠点すらない俺が高ランクギルド所属で拠点を持つヤツにかち合いでもすれば、不利どころか反撃すらできないままタコ殴りにされるかもしれない。引いてはその牙がヒビキやレーナたちにまで向くかもしれないのだ。せめてかつての所属ギルドである「夜の帝国」のホームである「紅き館」があれば、再加入申請をすることもワンチャンありえるのかもしれないが……望みは薄いかもしれない。

「しかしよく生き延びられたものだな。六大神の末裔ともなれば八欲王は血眼で探し出して「根切り」を行うはずだろう？」

「然りに。お考えの通り幾度も命を狙われたそうですが八欲王と竜たちの戦いが始まったことで難を逃れたそうだな。そして竜たちをも退けて世界を支配したと言われる八欲王も、最後には己たちの欲望によってお互いに殺し合うようになり、最後には滅び去ったと伝え聞いておるよ」

「……因果応報だな。やったのが善行であったなら、今頃にまで悪行を語られることもなかったろうに」

八欲王はお互いに殺し合った？ どういうことだ？ 同じギルドに所属していたわけではなかったのか？ それとも同じギルドのメンバーでありながら最終的に対立し

たということか？ ギルドごとやってきたのなら滅び去ったのだとしても世界のどこかにその痕跡があるかもしれない。時間が出来たら探し出して現実世界への帰還方法も見つきたいところだが――

「ねえおじいちゃん、その『六大神』っていうのは倒されたんでしょ？ 従属神ってどんなかんじだったの？」

「文字通り、六大神に仕える従者だったそうじゃ。しかし中には特定の分野に於いては六大神以上とさえ言われた従属神もおったという。」

我々の祖はその従属神の中でも、あらゆる病や怪我を癒したとされる女神だったと伝え聞いておる」

「へえー、神様と結婚するなんて結構すごい人だったんだ」

「まあ伝え聞いた話じゃから、そう真に受けるものでもないのう。あくまで言い伝えじゃからな」

「でもさ、やつぱり親近感湧いちやうよねえ。二人きりで愛の逃避行なんてさあ。ボクもユウくんも故郷には帰れなさそうだし……あ、でもボクはユウくんさえいればオールハッピーだから大丈夫だよ！

いつかは眺めのいい場所に家を建てて、毎朝行つてきますのチューをして！ 子どもも6人……いや9人くらい頑張つたりして……！ うへへへへ！」

「まあ始めやがったぞおい。保護者どこだよ保護者は。………ミサトさんに全ての責任を押し付けたいけど、今は俺しか保護者が居ないんだよなあ。ちくしよめ、あの青空の向こうの星空のどこかで満面の笑みでサムズアップ決めてやがるに違いな。」

「はいはい。もうちよつとおしとやかにしろな。」

「いつつだだだだ！ やめつ、アイアンクローはやめてよお！ ううつ……い、痛いよ、ユウくん……」

「お前の保護者はミサトさんじゃなくて、今は俺しかないんだぞ？ もうちよつと節度を持つんだ」

「……ちよつと涙目で恨めし気に見たつて態度は変わらんぞ。もうちよつと女の子だという自覚を持たないと、お前に淡い恋心を抱いているイエリク君がドン引きし――」

「………ちよつと泣いてるのも、かわいい……」

「――てなかつた。イエリクおめーさては上級者の素質あるな？ だが女の子の涙は嬉し涙であるべきなのだ。女の子を悲しませたり痛みで泣かせたりするのはするべきではないのだ。かのエロ伝道師、脳内ピンクのエロゲマニアバードマン、ペロロンチーノもこう言っていたのだ。」

『凌辱も鬼畜もやってきたし涙目の女の子って好きだけどさ、やっぱ純愛モノの心と涙』

腺にくる展開は王道だわ。その上でやる甘々なイチャラブックスはピンツとくるね。

——姉貴の声でなければな！』

『オオイイイイ？ 聞こえてんぞ愚弟』

『しゅ、しゅびばしえんでしひや……』

……いや、エロゲだから最後にはあれやこれやになるのは目に見えてるんだけどな。俺も女の子を悲しませる真似はしたくはないし、しないように心がけている。まあ実際は何度か病院に担ぎ込まれて妻に心配されまくったのだが。

「むうーっ、それでも女の子の顔にアイアンクローなんてひどいよ！」

「じゃあ突然妄想を口から垂れ流さないように仮面でもつけてみるか？ もちろん例の

嫉妬マスクをな！」

「げえっ、あれはヤダ！ 独り者にだけ贈られたあのクリスマスマスボッチ限定装備なんてヤダ〜！ ボクにはユウくんっていうステキなヒトが居るんだからそんなの絶対着けないもんね！ ……ボクもいつかユウちゃんとクリスマスマスクスしたいなあ……うひひ、うひえひえ……」

「よーし、ヒビキは村に戻るらしいからさつきとエ・ペスベルに行こうか」

「待ってゴメン！ 反省したから置いていくのだけはやめてよお〜！」

コイツ、日に日に性欲の籠たがが外れてきてるんじゃないか？ 夜中に時々音消しの忍術

使ってるのは完璧にバレてんだぞ。所持しているワールドアイテムのせいか、魔法やスキルの効果範囲がある程度だがぼんやりと見えているせいで、ブレインを見張っている間にも何度か一人でヤツてることくらい丸わかりなのだ。

「大変じゃなあ、ルイス殿」

「大変なんだな、大将」

「心中お察しする」

「……妬ましい。これが、嫉妬……?」

「俺を憐れむのはやめてくれ。というかやめろ。あとイエリック、勝手にひがむな」

丘を越え、小川が傍に流れる街道を歩き続ける。線路は続くよ……という出だしではないが、道はどこまでも真っすぐ続いていて村や畑が見えてくるわけでもない。周囲一帯は低木の生い茂る高原地帯の原っぱのようで、まばらに木々が点在しているばかりの平野が続いている。

時々視線や気配を感じるのにはモンスターか野生動物の類だろう。俺が顔を向けるだけですぐに離れていく。

「イエリック、このあたりって動物はなにが居るの?」

「野生のウマとかヒツジとかヤギとか……あとはオオカミとかヤマネコだよ。もつと小さいのならいっぱい居るかもしれないけど」

「猫かあ……ボクも猫欲しいなあ。レーナにはキリが居るし、ボクにも、こう、相棒的なのが欲しい!」

「じ、じゃあ……お……お、俺と………としてはい! お、オオカミよりも犬のほうがいいかもな! 従順だし、毛並みもいいし、頭もいい!」

「そう? うーん……へ口寄せで呼べる子が居るし、それもアリかなあ」

「あとは森の深い場所はゴブリンやオーガなんかも居るし、中にはオオカミを飼いなすヤツも居るって聞いたことがあるぜ。森に近づいた人を攫って食ったりするらしいし……」

なるほど。つまり村長の言っていた冒険者つてやつはイエリクが言うように人喰いなどで人間に危害を加えるモンスターを退治するわけだ。この様子ならアンデッド系のモンスターなども存在するかもしれない。

ヒビキには主にアンデッド系のモンスター狩りを行ってもらい、俺が生物系のモンスターを相手取ると棲み分けるのが一番いいだろう。特にヒビキの精神——善性は他者の命を奪う行為を嫌っているのだから、そもそもそういう事態にならない狩り場であれば何も問題は無いはずだ。

「さて、太陽もてつペンまで来たし昼飯にするか。じい様も疲れてるころだろうし」
「抜かせ童わらわが。アラン、魚を食いただけじゃろ」

「そりやー俺だつて魚なんて初めて食うんだ。どんな味か気になるだろ？　メルケルだつて食つたことないだろ？」

「二度だけある。昔エ・ペスベルからの帰り道で食料が尽きかけたとき、通りがかつた冒険者が魚を獲つて焼いてくれた」

「ほう、どうじゃつた？」

「美味だ。小骨が少々あるが、それに気を付ければどうということはない」

「……そりや楽しみだ。あーあ、酒がありやあなあ」

「まったくもつて同感だ。焼き魚があれば酒が数段ウマイんだ」

ああ、考えただけでも腹が減つてきた。これはもう飲んで食つてとやるしかないレベルの空きつ腹だ。

「おつ、あの大きい木の下でメシにしよう。他の場所より小高くて他の木が無いから見通しやすくもいい」

そんなアランの先導の下、大きく育つた広葉樹の木陰に腰を下ろす。近くから集めてきた枝木を組んで周りを石を積んで囲つた風よけをつくり、火を着けようとするもの

「ヘファイアーボール」で……いや……ダメだな、消し炭になるだけか」

「世の中にはモンスターに向けて撃つだけじゃなくて、小さな火を起こすだけの魔法もあるらしいですがねえ。まあ魔法の使えない俺たちにや縁のないものですよ」

「火は俺が起こそう。じい様は休んでいてくれ。アランとイエリクはもう少し薪を集めてくれ」

「あいよーメルケル。イエリク、いくぞ〜」

やる事が無いから仕方がない、俺たちは魚の下処理でもするか。料理道具の一つとして持っている『無限の水差し』を取り出し、適当な平たい岩をまな板がわりにして魚のウロコを片刃のサバイバルナイフの背を使ってはがしていく。サイズがそこそこあるだけにウロコも相応に大きく手ごわいが、このしっかりした身は焼けば食べ応えがあるだろう。

「よし……ヒビキ、水をかけて流してくれ」

「はい」

水差しから出る水の流量は少ないものの洗い流すには十分だ。……思えばどういう原理でこの水差しは機能しているんだろうか？

「これくらいでいいの？」

「ああ。後は内臓を取って……串を刺す。が、その前に消毒だな」

洗ったナイフの刃を焚火の中に突っ込んで直接炙ることで殺菌し、一度ナイフを自然に冷ましたら魚の腹を裂いて内臓を取り出し、若干離れた場所にそこそこ深く掘った穴に投げ込んでいく。野生動物が嗅ぎつけて俺たちに近寄ってくるのは避けたいし、食べ終えた骨なども処理したい。

適当に真つすぐな枝を切って葉を落とし、先端をナイフで削って尖らせて魚を刺せば準備は万端だ。あとは少し塩を振りかけて焼くだけで焼き魚のできあがりだ。

……教官に見せられたサバイバルの手引きとかいう映像教本では倒木の幹に就寝中のイモムシが昼食になっていたが、俺たちは魚を獲って昼飯にすることができた。貴重なタンパク源だとか言われてもイモムシを生で口にするのは、本当に命の危険があるほどの飢餓状態でなければ無理だろう。

「ほら、お待ちかねだ。ちよつとかかるが、後は焼けるのを待つだけぞ」

「おおく……こいつぁ……美味そうだ」

煌々と燃える焚火の傍に串を突き刺し、火でじつくりと焼き上げていく。皮が炎の熱で膨張し、その下にある身から湧き出る脂が焼けて芳しい香りを放ち始める。

「……むう、これはまた……腹が減る光景じゃなあ」

「ああ、でも待つこともまた料理つてもの……故にガマンだ。それにまだ今の状態じゃ生焼けだ。もっとしつかり火を通さないとな。俺は腹を下したくない」

「くうーっ……生焼けどころか俺たちが生殺しだぜこりや……」

皮に黄金色の焦げ目が付き、脂がさらに滴るようになったところで魚を回転させて満遍なく火を通していく。途中で少し塩を追加しておいたが、塩気が効いてさらにウマイことだろう。そういうえばサバイバルではバナナの葉で包んで蒸し焼きにするなんてのもあったな。昔の料理であれば塩釜焼きというのものもあるらしいが、この文明レベルでは塩は貴重品だろうから、オーソドックスな焼き方が一番だ。

「……いい頃合いだ」

「じゃ、じゃあ……!」

「イエリク、ガマンした甲斐があるぞ。ようし、食べるとするか!」

「待つてました大将オ!」

「ウム、この歳でこうも心躍る出来事に見えようとは……!」

「ちよつとだけ待つてくれよ………ディテクト・ライフ〈生命探知〉………よし、いけるぞ」

魚の身を丁寧にはぐしてとりわけつつ、寄生虫の痕跡が無いかを確認する。一応魔法で確認はしたものの、実際に目で見て確かめるのも大事なことなのだ。しっかりと火を通しているから寄生虫が居ても死滅している。とはいえそれはリアルでのお話でしかなく、ここでは火に耐える寄生虫なんてものが居ないとも限らないのだ。目で見て確認して、居たら排除する。そして再度魔法で生体反応が無いか調べる。

養殖でならそもそも寄生虫の対策を行うのが当たり前だろうが、俺たちが獲ったのは野生の魚なのだ。リアルでなら病院に行けば済む話ではあるが、ここにそんなものは存在しておらず、医者すらいるか怪しい。居たとしても対症療法くらいのものでらうし、細菌や寄生虫という概念すら存在していないだろう。

「では、僭越ながら儂がやろう。〃主よ、我が祖たる六大神よ、哀れな羊たちに一日の糧をお恵みくださったことを伏して感謝致します。我らの寄る辺、守りたる砦、我らを救い給うた御方よ。願わくば子らに遍く救済の道が開かれんことを祈つて……〃」

「〃主に、祈りを〃」

うーん……六大神は最早信仰の領域だったか。これほどまでに敬虔な信徒が居るということは、実在はともかくとして六大神という存在が生活の基盤になっている可能性もありうるか。

——ま、今はそれよりもメシだよメシ！ よく洗った大きな木の葉を敷いた岩の上に、焼きあがった魚を置いて身をほぐしていく。焼き上がりのニオイが鼻をくすぐり、きゆう、とヒビキの腹が可愛らしい音を鳴らす。

「よしつ、じゃあ……〃いただきます〃」

「いただきますっ！」

「——おや、ルイス殿は六大神の信仰はなさっておられないのですか？」

「ああ。不敬かと思うかもしれないが、我々のところでは六大神信仰はしていなかったよ」
 「やはり六大神信仰は珍しいじやろう。基本的に四大神……生の神と死の神は数えられぬからのう。このあたりでも六大神信仰といえはスレイン法国くらいなものじゃよ」

「あのスレイン法国、か」

「流石にこれはルイス殿もご存じじやろうな。人類の守り手を標榜する国としてかの竜王国と共にビーストマンの軍勢に立ち向かう勇士たちじゃ……あつふ！ 熱い！」

「じゃが！ うむ……ウマイのう！」

「いやまあ初耳なんですけどね。とりあえず “それ知ってる！” “感を出して言ってみたが納得はしていただけたようだ。というよりも魚の美味さに気を取られただけのような気がしないでもないが。」

「というか手づかみでよくいけるなこの人たち。まあ食器なんて無いから俺たちも手づかみでやるしかないんだが。」

「あつちち！ ほっほー、中までアツアツだが……脂が乗って美味しいぞこりや！」

「ああ、塩加減が脂の旨味を引き立ててくれる。そして何よりこの身の柔らかさとはのかな甘み……焼き上がりのこの香りとも相まって素晴らしいものだ……」

「……くっ、お、俺だっけいつかは魚くらい……！ チクシヨウ……うまい……！」

「ふっ、ご好評のようでは何よりだ」

「ねえねえ、ユウくん……あーんってしよ？ ほら、こう……指ごとぺろって舐めとつて……ほしいなあ？」

……ヒビキが自分の指先に乗った身を口に運び、舌を煽情的に動かして指をぺろりと舐めとつてみせる。しなやかな指の付け根から先へ向けて、舌先を動かしつつねつとりと舐めあげる様子にイエリクが顔を赤くしてガン見してるが、こいつ変な性癖に目覚めたりしないだろうな？

まあ、そんな色気づいた男女二人の熱を冷ましてやるのも俺たち大人の務めだ。

「ようし、俺からしてやろう。ほら、あーんだ」

「ちよ、それ目玉で……」

「DHA豊富なんだぞ。健康にいいんだぞ。もちろん美容にも！」

「……そ、それは、そうなのかもしれないけど……」

「ほら指ごと、あーんって、するんだろ？ 舐めたいんだらう？」

「う……あ、あの……その……ゴメンナサイ……」

どうやら4人とも魚の美味さに魅了されたらしいな。あつと言う間に二匹あつた焼き魚は骨と頭だけになってしまった。ヒビキは鼻息を荒げてここぞとばかりにイチャつこうとしたらしいが、俺の指先に乗った、抉りだされた魚の目玉を突き出されてしおらしく引き下がった。

一通りの食事を終えて軽く昼寝をしたあとは高原地帯を下る街道を再び歩き続けるだけだった。ヒビキは旅をしているというよりも物見遊山ものみゆざんという気分らしく、街道の傍らに咲く花や見慣れない木々、時折見かける小動物などに興味津々のようだった。

見つけるたびにイエリクが教えようと頑張つてはいるものの、ピョルン翁の知識の前になすすべなく、ヒビキの印象は今のところ「おじいちゃんって物知り！」という具合でイエリクの見せ場らしい見せ場は無かった。そりやまあ人生15年そこらの少年と人生60年近い元冒険者じゃ知識量が違いすぎるだろうよ。

「おお、見えるじやろう？ あれがマリエフレード村じや。あの大きな風車が目印なんじや」

「へえ……立派なもんだ」

「うわあ……！ 風車が三つもあるよ！」

「ここはあの湖から流れてきた川から水をくみ上げて下流の村に流してる場所だからな！ ここだけで三つの村に水を送ってるから、すごく大事な場所なんだ！ ……つてオヤジが言つてた」

へえ、と少し感心したが最後の最後で台無しだぞ。それを言わなけりや完璧だったろ

うに。

「大将、とりあえず今日はここで泊めてもらおうことになります。明日は平地に出て二ガード・ハガル村、その次でエ・ペスベルに着く予定ですぜ」

「あと二日か……レーナがぐずつてなければいいんだが」

「心配性じゃな。なあに、女は強いもんじゃ。いざというときはそこらへんの冒険者よりも肝が据わっておる。それにヘレンのお嬢ちゃんが見ておるのなら大丈夫じゃよ」

……ああ、でもやっぱり心配になる。さつさとへ転移門^{ゲート}の記録^{マーク}だけして村に戻ってレーナをすぐにでも抱きしめてあげたい。

一人で寂しくしてないだろうか。キリが居るとはいえ村に脅威が差し迫ったりしてないだろうか。ご飯はちゃんと食べれているだろうか。ヘレンに迷惑をかけたりしていないだろうか。ママのことを思い出して涙を流したりしているんじゃないだろうか。おトイレはちゃんとできているのだろうか。転んでけがをしたりしていないだろうか。ヘレンに文字の書き方を教わっているはずだがちゃんとやれているだろうか。近所のクソガキどもがレーナにすり寄ったりしていないだろうか。仲良くなった男の子が将来俺の前に現れて娘さんをくださいなんて言い出したりしないだろうか。

「とにかくさつさと終わらせて村に帰らないとな」

金を稼いで食料を買い付けて村に送り届ける。たったそれだけだというのに一か月

もかけてなどいられない。とつとと終わらせてレーナを抱きしめてあげないと。きつと寂しがっているころだろう。パパに会えなくてぐずっていることだろう。

だけどそれもすぐに終わらせる。必ずパパがご飯を持って帰るからな……！

三日間歩き続けてようやくたどり着いた城塞都市エ・ペスベル。その門には長蛇の……というほどではないが列ができていて、先頭には数台の荷馬車が止まったままだ。おそらく検問で差し止められているのだろう。

「ねー、ユウくんまだかな？」

待ち続けて早一時間。ヒビキは見た目通りの子どもっぽさ——しかし中身は18歳である——故かしびれを切らし、城壁に背を預けて足を投げ出して退屈そうに座り込んでいる。

この世界にはごく一般的な村娘の恰好をした、可愛らしさを魅せる黒髪のボブカットの少女。傍目から見ればその通りなのだが実際はレベル100の忍者プラス森祭司ドリイドの吸血鬼だ。吸血種という種族のお陰でおおよそ人間化しているためか、自分自身が吸血鬼なのだということなんてすっかり忘れ去っていた。そりゃ太陽を浴びても平気だし、鏡にも映るしニンニクも問題ないし流水だって渡れるのだから仕方がないのかもしれない

ないが。

「ヒビキも俺も鏡で自分の顔を見て鋭い八重歯があるのを確認してようやく、”そういえば吸血鬼だった”とようやく自覚した程度には吸血鬼要素が薄い。

「諦めろ。ただ単純に税の取り立てでっただけじゃなくて、街の中に運ばれてくる荷の出どころや出入りする人物を記録しておくことで、犯罪組織或いは他国の息のかかった間諜が潜んでいないか調べられるようにしてるんだよ。」

「加えて商人つてのは国を跨いで活動するから必然的に移動が多くなるし、それと同時に物資も移動する。自国の大事なもの……特に技術や軍事に関する情報を持ち出したりしていないか、また他所から危険な代物を持ち込んでいないか、犯罪組織のフロント企業だったりしないか、そもそも商人ではなく間諜だったりしないか、そんな風にいるんなことで疑われるものなんだよ。だからよりチェックが厳しくなるんだ」

「スキヤンシステムでパパッとできちゃえばいいのにな」

「それができる技術力があればとつくに俺たちは壁の中だ。というかわざわざ出向いたりせずに、メールや電話ですぐにでもアーコロジー管理機構に連絡してるぞ」

「そう考えるとリアルって結構便利だったんだね。ボクたちのご飯も手抜きするならば湯をいれたりすればできちゃうし、なんならそのままかじりつけばいいだけだし。」

あとテレビがあるしゲームもあるし、魔法なんて使わなくても自宅ならプライバシー

もそこそこ守られてるし」

いや、最後のは無い。完全監視社会を舐めるでない。どこの誰がラブホでヤツたとか程度は企業の上層部には筒抜けなのだ。インターネットの閲覧ページからお風呂のタイミングまで、AIに何もかもを監視されているのは一部の人間や反動勢力の人間くらいしか知らないことだろう。カメラで撮影されているわけではないが、電気消費量などのデータを読み取られ、どのような行動をとっているか程度はAIに常に監視されているのだ。

「おーい大将！」

「つと、ようやく出番か？」

「遅くなりました。今さつき荷馬車を通つたんでもうすぐ動きまますぜ」

「やつと？ もう待ちくたびれたよ……ねえユウくん——」

「おんぶはナシだ」

「えーっ!? まだ何も言っていないよ！」

「どうせ歩きたくないとかいうんだろ？」

「違うよ。ユウくんを抱っこしてもらいたいだけだよ」

「キリキリ歩け。まだ余裕だろ」

「ちえっ」

不貞腐れたヒビキを連れてビヨルン翁とメルケル、イエリクが並んでいる列に戻り順番を待っている。と数十分ほどしてようやく城砦の門の真下までたどり着いた。

鎧を着こみ、ハルバードを持った衛兵が脇を固める中で一人のスキンヘッドの官吏がビヨルン翁に声をかける。

「手形は持っているか？」

「(ハハハ)」

「ふむ……………確かに。今日はどのような用件だ？ 連れの人数、滞在日数はどれほどだ？」

「本日は領主殿への書簡を届けに参った。連れは世話役が三名、護衛が二名じゃ。およそ3日から5日ほどを予定しておるよ」

「……………おい、そこの後ろの剣を背負った男」

「俺か？」

「やばい、なんで俺が呼び止められるんだ？ 別段目立つようなものを持ってなどいはいはずなのだが。」

「貴様、冒険者か？」

「正確に言えば冒険者志望だ。これから登録に行く」

「なら街中では長物は気をつけろ。抜き身の武器を晒して街中を歩くようなことは禁止

されている。鞆があるなら鞆に入れてベルトをかけておけ。無ければ槍やハルバード同様に布を頑丈に巻き付けておくか、そもそも護身以上の武器を持ち歩かないかだ。街中で市民に怪我をさせかねないような真似はするな。いいな？」

「承知した。後ほど宿を確保したら布を巻くようにしよう」

ふむ、エ・ペスベルの市政に少しプラスというところか。モンスター退治を生業とする冒険者であっても、抜き身の武具を持つて歩いたのでは市民に対する威圧や恫喝に繋がるという判断だろう。

武具を鞆に収めたり布で覆うなどせずに歩いている屈強な冒険者たちというのは、市民からすればいつ斬られるかわからない恐怖を伴う存在ということだろう。おまけに闘争に身を置くだけあって血の気も相応に持ち合わせているはず。

そこで武具そのものの所持に制限をかけておくことで、市民に対して非暴力の姿勢を見せて安心させると同時に、街中で不慮の事故が起きることを防止しているわけだ。

「さて、それじゃ俺たちは冒険者組合で登録してくる。商会で買い取り依頼するのはそのあとだな」

「ではイエリク、メルケルは儂と代官の屋敷に向かうとしよう。アラン、宿は任せるぞ」

「あいよ。じい様は腰を痛めないようにな」

「舐めるでないわ阿呆めが。ああ、ルイス様……推薦状をちつとばかし張り切つて書い

てみたんじや。これを組合で提示するとよからう。引退した元白金級プラチナとはいえ何かしらの伝手があると示しておくほうが有利であろうよ」

「お氣遣い痛み入る。では後ほど」

なんとも強かだ。だが彼の言う通り伝手があるというのは大きなアドバンテージになる。特にランクの高かった元冒険者の推薦となれば、ランクアップ自体には影響せずとも加入時の手続きや信用度が段違いになるだろう。実力も伴うとわかれば優先的に仕事を回してもらええる可能性もある。

これは気合を入れておかなければ。彼の推薦があるということは、彼の名を貶める真似は絶対にできないぞ。俺を村の利益のために縛り付ける方法としては最上級だろう。人を縛り付ける最高の方法は「恩」だと言ったがまさしくというやつだ。本当に強かだ。

「さて、それじゃ早速——」

「あ、ちよつと待ってユウくん。ボクそろそろ着替えたいんだけど」

「別にいいだろう。メイド服とその平民の服じや大して違わないだろうし」

「あのメイド服、実は状態異常完全耐性に破壊属性完全耐性があるって言ったら？」

「よし、着替えろ」

「は〜い！」

なんつー高性能なオシャレ装備だよ。エンチャントするだけでも一苦労するだろうに、よくあんなものを手に入れられたものだ。

ヒビキが街中に入ってすぐの路地に入ったかと思えば一瞬で着替えて姿を現す。いつものちよつとえつちい感じのミニスカートなメイドだがへそ出しはやめたらしく、少しフオーマルさが増している。それでもミニスカートな時点で割と目の毒だが。

「しかし、頑張ったなお前……ただのメイド服にこんなに……」

「んふふ〜そうでしょ？ でも実は中身はただの聖遺物級なんだよね……本当は神器級にする予定だったんだけどお金が……」

「世知辛い事情だな」

とはいえ見た目はそこそこに重要だ。ゲーム内なら釘バツトだのふんどしだのとネタ装備を作ることでもできたが、ここでそれを使うのはアウトだ。基本的に西洋文化が中心になっているらしいことから見た目にも気を遣う必要があるとみるべきだ。

現状の装備は普通のシャツとズボンの上に革鎧を着込み、その上に胸や腹、関節部など部分的にフリューテッドアーマーの部品を組み込んだ装備だ。ローブを上から纏ったその見た目はさながら遍歴騎士と言わなければならない。これなら違和感はないだろう。

ただ後ろに控えているのがメイドというのが目を引くだろうことは間違いない。だがヒビキの安全に寄与する装備なのだから、外せとも言い出しにくいあたり悩ましいも

のだ。

「ええと……ここだな？」

「……ユウくん、読めるの？」

「〈言語解説〉のスキルでどうにかな」

ツヴァイヘンダーをアイテムボックスに放り込んでから中世の街並みが続くエ・ペス
ペルを散策していくと、見たことも無い文字の羅列が並ぶ看板の上にルビが振られるよ
うに「エ・ペスペル冒険者組合」と書かれているのが目に留まった。便利なのは便利だ
が、言語が違うのに会話は通じているのはどういう仕組みだ？

兎にも角にも入らないことには始まらない。稼ぎを得るためには働かなければいけ
ないのと同じだ。

「じゃ、いこつか！ ユウくん、組合に入ってまでお堅い喋り方しないですよ？」

「わかってるさ」

「村の人たちだつてちよつと萎縮しちゃうんだからね？ 特に受付が女の子だったら、
そう、気さくな感じで……」

「善処するつて」

そこそこ立派な三階建ての建物、その両開きの扉は開かれたままになっていて受付ら
しいカウンターと待ち構える受付嬢が目に留まる。

「失礼、ここはエ・ペスベル冒険者組合で間違いないかな？」

「……は、はいっ！ 当施設はエ・ペスベル冒険者組合でしゅー！」

受付で作業していた受付嬢に声をかけたところ、急に椅子から立ち上がって緊張した様子で答えが返ってきた。というか嘯んでたし。

「あ、あのっ、ほ、本日はどのような用件でしゅか!?」

ほんとよく嘯むなこの子。長い赤毛の髪まで揺れるほど緊張しているようだが、これで受付が務まるのだろうか。

よく見てみるとそう背丈があるわけではないらしい。踏み台をカウンターに置いてあるらしく、おそらくその段差を降りればヒビキと同年代くらいの背丈だろうか。年若い少女の持つ初々しき、気恥ずかしさが出ているのが丸わかりだ。

「実は——」

「私たち冒険者登録に来たんですけど、手続きは可能でしょうか？ ユウくん……怖がらせないでって言ったよね？」

それと、組合の責任者さんにこちらを渡すようにと預かっています」

「ひっ、しっ、失礼しました！ 冒険者登録ですね！ 登録は随時受け付けております！

まずは書簡の方から拝見させていただきます！」

ヒビキの笑顔がやけに怖い。言葉遣いまで変わってやがる。笑顔なのに俺の背筋に

氷が突つ込まれたような嫌な感じがしているのだが、気のせいだろうか。

「これは……少々お待ちください」

しかし手紙を受け取って中身を検めるや否や、彼女はすぐに受付を離れて背後の廊下へと入っていき、最奥にある扉を叩いて入室した。

受付嬢の姿が見えなくなつてちらりとヒビキを見るとむーつと膨れた様子でこちらをにらみ返してくる。

「……なんなんだ？」

「もー、また堅苦しい言い方して怖がらせて……」

「そ、そうか？ 別に普通に喋つてただろ……？」

「……『失礼』じゃなくて『すみません』って言えばもつと良くなったのに」

「それでもあそこまで緊張されると思わなかつただけだな」

「まあ、それはボクも思つたけど……それでもユウくんはもうちよつと言葉遣いを柔らかにしようね？」

「……すまん、気を付けるよ」

「そうそう、それくらい感じのほうがいいよ。それにボクの大切なヒトが怖い人だつて思われるのはヤダもん。ユウくんはちよつとお堅いけど優しく頼りがいのある人なんだから、ボクとしてはやつぱり笑顔のほうがカッコよくて好きだなあ」

八重歯をちよつとだけ覗かせるようにヒビキが屈託のない笑みを浮かべる。まずい、こんなに真正面からそういうことを言われるのは慣れないんだ。俺なんて軍人として戦い、時に命を奪ってきたし奪われるのを見てきた人間だ。人知れず戦うばかりで誰かから賞賛を受けたことなんて数えるくらいしかない。

「お待たせしました。奥の部屋へどうぞ。組合長からお話があるそうです」

「ヒビキ、変な妄想を垂れ流さないでくれよ。偉いさんと話すのは俺のほうが慣れてるんだから」

「……………じゃあ静かにしとく」

先ほどの受付嬢が戻ってきて俺たちに言った言葉は先ほどの動揺ぶりがウソのように真剣なものだ。

言われるがままに奥の部屋へ案内されるとそこには来賓者を迎えるテーブルと椅子が中央にあり、少し窓側には立派なゴシック様式の執務机があり、そこには白髪の混じった髭を蓄え、頭を短髪で揃えた筋骨隆々の男が椅子に座って羊皮紙にペンを走らせていた。

「ようこそ、エ・ペスベル冒険者組合へ。私が当組合の長を務めております、エルランド・ルーベンソンです」

「初めまして、ルイス・ローデンバッハだ。グリプスホルム村にて世話になっている」

「ヒビキです。初めまして」

書類の重なる執務機の簡素な椅子から腰を上げた組合長からごつごつとした右手が差し出される。すぐにこちらにも右手を差し出して握手を交わし、続いてヒビキもその小さな手で彼の手を取った。

「ではお二方ともどうぞ掛けてください。アリシア君、お茶を頼めるかね」

「承知致しました。ルイス様、ローブをお預かり致します」

「ありがとうございます」

身に着けていたローブを外して来賓者用の椅子に腰を下ろすと、エルランド氏も俺に対面する席へつく。じろ、と彼の視線が俺の全身を見るように走ったもののすぐに俺のほうに向きなおった。

「ふむ……致命になりうる部分と関節部だけを覆う軽鎧、ベルトは飛び道具に手投げナイフを収め、武器はショートソードとやや大振りのダガー。身軽さ……機動性を重視した装備のようですね。細かい所作にも隙が無い。なるほど、ビョルン先輩の言う通り手練れのようで」

「そちらこそ。未だ現役なのではと思うような鋭い気配が感じられる」

「ふふ、これほどの実力者が来ることは稀でして。少し昂ぶってしまいましたな。それらのお嬢さんは従者ですかな？」

「いや、従妹だ。メイドのような恰好はしているが、このメイド服自体がマジックアイテムになっている。そのお陰で毒や呪いといった人に害となるものに滅法強いらしい」

「ほう、そのようなものが。未知のダンジョンや遺跡では時折そのようなアイテムが見つかるといふ話は聞きますが、そのような類の出自なのでしょうか？」

「いや、何らかの魔法の研究中に偶然生み出された産物だそうだ。ま……故国が滅びたせいで最早再現は無理だろうがね」

「これは……失礼いたしました。お辛い記憶を呼び起こしてしまいましたな」

まあ出まかせと言えば出まかせではあるのだが、ユグドラシルが無い以上同じものを作ることはできないのは間違いない。ウソと真実の割合を見極めればそれっぽい話も通用するわけだ。

「お茶をどうぞ」

「ありがとうございます——」

「これは申し遅れました。私は受付を担当しております、アリシアと申します」

「ありがとうございます、アリシアさん。それと先ほどは怖がらせてしまったようで、すみません」

「いえ……私昔からちよつとあがり症なところがあつて……こちらこそ見苦しいところを見せしてしまいました。私のことはアリシアと呼んでいただいて結構ですよ。あ、ヒビキちゃん、お菓子もどうぞ」

「おぉー！ 見たことないお菓子だよウくん！」

「ハロングロットルというものです。ラズベリーのジャムを使ったクッキーみたいなお菓子です」

「んん〜！ おいしいっ！」

女の子が甘いものに目が無いのはどこの国でも変わらないらしい。一つ手に取って口に入れてみると、ラズベリーの甘酸っぱさと柔らかなクッキー生地カッパの組み合わせが素晴らしい。これはお茶菓子に最適だろう。

「さて、本題と参りましょう。私の先輩、ビョルン・ベントソンからの書簡のほうを拝見致しました。彼には私が駆け出しであったころに世話になりました。今回は村が危機にあるということで、食料の移送や融通、護衛の冒険者の派遣に関する依頼書のほうは確かに受領したとお伝えください。

それともう一つ書簡が同封されていたのですが、ルイス殿とヒビキさんは冒険者志望ということとで相違ないですか」

「無論だ。俺もヒビキもそこそこには腕が立つ。村には世話になつていたので、このまま見過ごすというのも後味が悪い。なれば少しでも稼ぎ手が必要であろうと思ひ、ここで冒険者として稼ぎ、村へ送る食料などを買い付けようと思つている」

「フム……規定がありますので銅級カッパからとなるのは避けられませんが、先輩の言葉通り

野盗を無傷で捕えるなど実力があることは確かだとわかります。少々難度の高い依頼クエストでも受けられるように昇格は早めに行えるように融通致します。昇格試験の内容は手抜きどころか割り増しですが」

「まあ、そうでしょう。手抜きのせいで人死にが出たのでは本末転倒だ」

「その通りで。書簡にありました通り元軍人というのもあつて荒事には慣れておられる様子。モンスター相手の討伐や護衛任務などであれば前職の経験も生かせるでしょう」

「元よりそのつもりだ。自身の経験が多くの人々にとつて役立つのなら、使わない道理はない」

「承知致しました。それではアリシアくん」

「はい」

「君が担当だ。誠心誠意、彼らのサポートをするように」

「——ええっ!? 組合長! わっ、私まだ担当の経験なんて無いですよ! 大事な案件なんですから他のベテランの方のほうがずっと……」

「だからこそだ。現在の担当たちは他の冒険者を複数受け持っているため、ルイス殿たちにつきつきりでサポートすることができない。キミが彼らの専任としてサポートについて経験を積むんだ。それにキミだっていつまでも新人のままでは居られないぞ。そろそろ担当する冒険者チームの一つくらいは持つべきだし、それができるだけのもの

も持っていると思ってるよ」

「……わかりました」

なるほど、まだ仕事を始めたばかりの新人だったのか。道理で緊張していたわけだ。銅級カッパという最低ランクというのもあって仕事の内容は高位の冒険者より危険度が低いだろうし、前職が軍人という程度実力が既に備わっている人物だから少々の荒事は問題なくこなせる……組合長は俺たちをそう見ているわけだ。

彼女が初めて担当を受け持つ等級として最低ランクである銅級は最適であるだろうし、組合長としては俺たちで経験を積ませていこうという腹積もりなのだろう。しかも元とはいえ白金級プラチナの冒険者から推薦を受けている俺たちがそここの冒険者に匹敵する実力があると見抜いた上で彼女を割り当てたのだから、彼女の実務能力も買っていると見ていい。

「さて、これからよろしく頼むよ。アリシアさん」

「よろしくね、アリシアちゃん。仲良色目くやつていこうね！」

「ひいつ!!? よ、よろしくお願ひしますう……」

ようやく冒険者家業がスタートできそうだな。しかし一か月のうちにどれだけ稼げるか……正直言つてかなり厳しいと言わざるを得ない。依頼が無ければ意味が無いし、元手になる資金も確保しなければいけない。後で不用品を買い取ってもらつてもりだが、

果たしてどれだけの金額になるか。

俺たちが不用品を売って金に換えて食料の買い付けを行ってもいいが、俺たちが村を出た後に稼ぎ手が居ないという状況になるのは避けておくべきだ。彼らにも自力で稼ぐ手段を模索してもらわなければ。俺たちの手を借りることなく自立できてようやく村が立ち直れたと言えるものなのだ。

「じゃ、すぐに登録といこう」

「はい！　すぐに書類を用意致しますね！」

何はともあれやってみせよう。基本はPMCと何ら変わらないのだからいくらか気楽だ。依頼を受けて遂行し、成功すれば報酬がもらえる。であれば、いつも通りに仕事をするだけだ。

今日も相変わらずな一日が始まった。冒険者組合を紹介してもらって仕事を始めて早半年となる、いつもの見慣れた組合の受付カウンターでの業務はいつも通りの平凡な時間が過ぎていった。

報酬の割合で揉める冒険者。依頼クエストの内容で揉める冒険者。どちらが受けるかで揉める冒険者。騒ぐようなら叩き出すぞと怒る組合長。いつも通りの変わらない、当たり前

に過ぎていく日常。お昼を過ぎて昼食を終え、午前中の業務を先輩から引き継いで受付の一番目立つ場所——新規登録者受付の席に座った。

今日も変わらず一日が過ぎていく。そう思っていた。……黄金の髪と赤い瞳の一人の旅の騎士と、このあたりでは珍しい黒髪の年若い——私と同じ年ごろのような——メイドが現れるまでは。

「以上が冒険者の規約に関するものです。ここまでで他に質問はございますか？」

「わかりやすいし、細かい複雑なところにも範例を用いて解説してくれて助かった。キミが組合長から期待されているだけのことはあるよ」

「そ、そんな、買い被りすぎですよ。私なんてまだまだ新米ですからー」

結論から言つて、私のこれからの日常に新しい業務が増えた。組合長への手紙を持ってきたらしい彼は冒険者志望だったらしく、組合長の旧友の推薦を受けているらしい。しかもその旧友というのが数十年前にエ・ペスperlで活躍した白金級プラチナの冒険者チーム「グリユプス」の元リーダーだと聞いたときには腰が抜けそうだった。

グリユプス、と言えば有名なものだ。曰く「エ・ペスperlの西にある森で行われている邪教の儀式をぶつ壊した」とか、曰く「アベリオン丘陵手前の湖で水棲モンスターを相手に互角に戦った」とか、曰く「20を超える人食オーい大鬼ガの集団をたつた4人で殲滅した」など話題に事欠かない。

ついでに「娼館で誰がどの女を抱くかで殴りあった」とか、「お手製の燻製肉を勝手に食われて殴り合いになった」とか、「カツツエ平野で奇声を上げて呪文を唱えながらアンデッド退治をしていた」とかそちらの意味でも話題が多い。

そんなチームからの推薦と聞いて胃が少し痛んだけれどそれは杞憂で済み、それどころか彼は実に素晴らしい人柄だとわかった。登録に際しての規約の説明を思っていたことだが、話は真剣に聞いてくれるし、わからない部分は質問してくれたし、なんと紙——それも羊皮紙ではなく手漉き紙！——にメモをとってくれるほどの優等生だった。

冒険者といっても元から戦う力がある人ばかりではなく、食い詰めて冒険者になったりする人が多いため「そんなこといいから依頼クエストだ！」みたいな人も多い。

そうでなくても字が書ける、読める人はそう多いわけではないので、ちゃんと理解させるまでにはそこそこの時間がかかるもの。ただルイスさんとその従妹のヒビキちゃんはちゃんとした教育を受けたことのある人だったらしく、ものの2時間程度で事が済んだ。

ただ意外だったのは二人して「字が書けない」という点だった。なんでも二人は故国を滅ぼされて流浪の身となつたらしく、ヒビキちゃんは十分な教育を受けられなかつたらしい。それでも冒険者の仕組みや規約などでわからない部分があつても、少しの助

言で理解できたのだから十分な知性がある。

ルイスさんは教育こそ受けていたものの、王国で使われる言語と形態が違うというところで筆記ができないそうだ。母国語なら扱えるのに、と愚痴を零した様子はどこか郷愁を帯びたような表情で、窓の外へ視線を向けたその横顔に不覚にもドキツとした。

「やつと終わつたー。あーあ、肩が凝つちやうよ。ユウくん肩揉んで」

「仕方ないな……ほらちゃんと座つてろ」

「はあく……そう、そこ……あつ！ んあつ！ すつ、すごいっ……イ、クツ……」

「気色悪い声出すんじゃない」

「いいいいつつつ！ ちよつ、まつ、痛いつてば！」

「痛いのは効いてる証拠だ」

まるで年の離れた兄妹のよう。距離感は近いけど別にやましいものがあるわけではなく、ただ純粹に家族としてのスキンシップらしい。

そこに狙いすましたように割り込んでくる影。折れた直剣を打ち直した短剣を持った、革鎧を着こんだ男。短く刈り揃えた茶髪の図体のかい大男がルイスさんの前に来て言う。

「よう、お二人さん……新人かい？」

あのニヤニヤとした顔、それに私やヒビキちゃんを見るねつとりとした舐めまわすよ

うな視線、いつ見ても気に入らない。気に入らない新人をいびって辞めさせたり、美人と見るや自分のものにしようとするとクソツタレめ。それに受付をしていた私の先輩をデートだとか言って無理矢理に連れ出して………なんでもこんなヤツが冒険者なんてやっているんだか！

「俺ア、ディックってんだ。ランクは金^{ゴールド}級だ、よろしく頼むぜえ、同業者サン」

「自己紹介痛み入る。ルイス・ローデンバツハだ。よろしく頼む」

ヒビキちゃんを庇うようにルイスさんが前に出る。凶々しくディックが差し出した手にルイスさんも手を差し出して――

「ふんっ！」

「ルイスさん!？」

ディックに軽く引つ張られるようにルイスさんの身体が宙を舞う。ローブが外れ、ルイスさんがギルドの壁に叩きつけられ――

「阿呆め」

ぞわり、と私の耳に底冷えするような声が走った。激突する――その瞬間にルイスさんの身体がくるりと一回転、地面にしゃがみこむような姿勢で壁に張り付いた。右手で石壁の隙間に指を差し込んで、たったそれだけで自身にかかる体重を支えているのだ。騎士なんてものじゃない、まるで軽業師やレンジャーのような身軽さだ。

赤い瞳が妖しく光を映す。まさに今の彼は敵を認識して獣を仕留めんとする狩人だ。脳裏に浮かぶ最悪な光景……そのまま彼がディックを殺してしまうのではないかという懸念が私の中で警鐘を鳴らす。

「ユウくん！ ストップ！」

「……ま、そうだな。初日から組合の床を汚すわけにもいかないしな」

「へっ、どうしたよお、怖気づい——」

「お前、ちよつと黙ってる」

「——!? ふっ、んぐっ！ ふんぐっぐっ！」

ガチン、と音が聞こえたかと思えばディックの口が閉じられた。うめき声のように声が出るだけで、上あごと下あごが縫い付けられたように微動だにしていな。この人、一体何をやったの？

「さて、冒険者プレートとやらはそろそろかな？」

「……あ、はい……多分そろそろ……」

軽く壁から飛び降りたルイスさんが何事もなかったかのように私に喋りかけてくる。強い人だと思っていたけど、想像した以上の強さだ。おそらくあのクソツタレのディックなんかより、よっぽど上の実力がある。

「待たせたな。できたぞ」

「組合長、それが俺たちの？」

「そうだ。これを以って二人はエ・ペスベル冒険者組合所属の銅^{カツパー}級冒険者となる。チーム名は決まっているか？」

「……名に恥じぬよう精進しよう。チーム名は……少々待ってくれ。戦事^{いくやう}に縁起のいいものを考える」

「フ、軍人氣質は抜けないようだ」

「生憎と性分だな」

銅級のプレートを受け取った二人は思い思いの場所にそのプレートを身につけた。ルイスさんは革鎧のベルトに、ヒビキちゃんはフリフリのメイド服の左胸につけようとしているがどうにも苦戦している。

「ほら、着けてやるから動くな」

「うん……………どう？ 変じゃない？」

「大差ないから大丈夫だろ」

「……それってどーいう意味なのかなあ？」

「さてな」

ヒビキちゃんはやはり見栄えが第一らしく、しきりにプレートと自身の衣装の組み合わせに違和感が無いか確かめるように落ち着きが無い。

「さて、ディック」

「!? ——!!!」

「また新人いびりをしようとしていたな? 次は放逐もありうる」と宣告したはずだ。にもかかわらずコレとは……: どうやら再教育が必要なようだな? ええ?」

組合長の怒気が膨れ上がる。既にパツパツだった上衣のシャツが筋肉の隆起で破れ、ガチガチの筋肉に浮かんた血管の生々しさと相まって更に威圧感を増していく。元々ディックよりも大柄な組合長がさらに大きく見える、というより物理的に大きくなっているのだから気圧されるのは当然だ。

「ではルイス殿、私はこのバカを再教育してきます。依頼の受領はアリシアが行いますので、彼女に紹介してもらおうとよいでしょう」

「懇切丁寧な対応に感謝する。ヒビキ、初クエストだぞ」

「オツケー! アリシア、実入りのいいやつ選んでよね」

「あ、はい。こつちにどうぞ」

テーブルに座って現在張り出されている依頼の中で銅級のをピックアップしていく。とはいえ銅級は一番簡単なものなので大したものはない。エ・ペスペル市街であれば城砦周辺のパトロールや街道の巡回など、遭遇する可能性のあるモンスターも低難度のはぐれのごブリンやウルフ系の魔獣それと稀に現れるスケルトンやゾンビ、グール

程度だ。

「むうー……討伐系は無いの？ ボクたちならちよつと強いくらいのモンスターは余裕だよ？」

「ランクがランクなので、受けられるのはこれくらいしかありません。でも街道警備はエ・ペスベルの商人組合から定期的に依頼されるので、こう見えて銅級でも貢献度の高い重要な仕事なんですよ」

「ま、駆け出しならこんなもんだろうさ。俺たちはどうあがいても銅^{カッパ}級でしかないだ。例え元白金^{ブラチナ}級の推薦があろうと、初対面の人間であることには変わらない。

俺の軍時代も最初は訓練と見回り、警備任務がほとんどだったさ。実績も信頼もないのにいきなり討伐系の依頼や要人や隊商の護衛なんてものは回されないもんだ。ま、依頼を完璧に、かつ回数をこなさなきゃ昇格なんぞあり得ん」

「やっぱリリスさんはよくわかってる。推薦があろうが国王の紹介だろうが、その人の人柄を知りもせずに高ランクにいきなり据えたりしたら冒険者組合は非難^{ひなんせうごう}轟轟だ。そりゃあ突然現れて自分たちが苦勞して上り詰めた階級をサクツと飛ばして胡坐をかかれたのではたまったものではない。」

「アダマタイト級やオリハルコン級、ミスリル級には自分たちが高位の冒険者になったことを自身が偉くなったかのように勘違いして傲慢な態度を取り始める者も居たと

いう。あのディックのようなヤツが最たる例だ。

高位の冒険者は強力なモンスターにも立ち向かう勇氣を持った勇敢な人たちだ。モンスターや敵対的な亜人種、異形種から人々を守ると同時に、戦う力を持たない人々にとつての希望とも言えるものなのだ。そんな人たちが守るべき民草に対して横暴を振るうようなことは絶対にあつてはいけない。

「ヒビキ、ひとまず俺たちはコツコツと積み上げていくことから始めよう」

「……初っ端から問題起こしかけたユウくんがそれを言うの？」

「可愛い妹分に手を出しそうなヤツに加減はいらん。で、その街道周辺のパトロールつてのはどういう内容なんだ？」

「ええと、こちらはエ・ペスペルからエ・ランテルへの街道を往復して、キャラバン隊商や旅人を襲うモンスター、野生動物などが居ないかを調査する任務です。周辺の森林などは高位の冒険者さんたちが定期的に討伐を行っているので、群れからはぐれたモンスターや獣が街道へ出没することが稀にあります。

そこでモンスターが街道沿いに現れた痕跡が無いかを我々が調査し、最終的にはエ・ペスペルの衛兵がその資料を基に街道を利用する人々へ注意を促すんです」

「そして隊商や旅人に注意喚起すると同時に、冒険者組合で街道での護衛依頼を出すようにオススメして受け付ける。よくできてるじゃないか。商人組合も冒険者組合もエ・

ペスベルの行政府も、いずれにも利点のあるいい協力関係だ。まあ、商人組合には裏などお見通しだろうが護衛が必要なには変わりないしな。

ともあれ商人個人からすれば、街道から脅威が消えるということは護衛を長期間雇う手間賃が必要なくなるし、雇ったとしても少人数で解決する。組合が依頼を出してくれるから自分の懐へのダメージが少なく、それでいて街道の安全を高めることができるんだから小さな商店は助かるだろうな。

商人組合としても所属する商人からの共同出資で依頼を出すわけだから資金繰りにあまり影響を及ぼさず、継続的に依頼を出し続けられるだろう。

それに比較的安全が確保された街道の定期的な調査依頼を出すだけなら、報酬が安くても仕事が欲しい銅^{カツバー}級の駆け出し冒険者に勧めればいい。安上りで済むし、駆け出しの下積みにもなるだろう。

そして安く上がった経費の余剰分を時折使つて鉄^{アイアン}級や銀^{シルバー}級の冒険者に街道に近い雑木林や森のモンスター討伐を依頼し間引きを行つてもらおう。ああ、実にうまく手を組んでる」

「……このくらいはお見通しですか」

「ついでに言えば冒険者組合としても、近場の街道付近に高ランクの冒険者を頻繁に駆り出す必要がなくなるからエ・ペスベル領内の遠隔地にも高ランク冒険者を派遣しやす

くなる。使える戦力が街道付近にずっと張り付く必要性がなくなる分、より広域に手を伸ばしやすくなるわけだ。そして領内の兵士たちは彼ら冒険者の調査資料などを基に野盗退治や巡回に出ることで無駄な支出を抑えることができる。

そうして村とエ・ペスペルを繋ぐ街道の安全が確保できれば、商人が扱える品物も増えるし、村は商人が落としていくカネで潤う。結果的にエ・ペスペル領の多くの地域に経済効果が波及する仕組みなわけか。

まず商人が潤う。次に冒険者組合は活動領域を広げることができるし、冒険者の育成が堅実に行えて、何より依頼達成の実績が出来る。その結果、エ・ペスペルの領民は安全に領内を行き来しやすくなる。商取引が増えることで村にある物資や商品がエ・ペスペルに集積されることになり、最終的に他の都市や諸外国との取引に結び付けばリ・エステーゼ王都とエ・レエブル、リ・ロベル、エ・ランテルを結ぶ中間集積地としてエ・ペスペル全体が潤うことになる。……というのが俺の私見んだけどどうだろうな。

エ・ペスペルの領主は街道の重要性和経済の発展が齎す影響をよく理解している人物だろうな」

……すごい……たった一つの依頼表と依頼主だけでこうまで推測ができてしまうなんて。最後のほうなんてもう政治の話だ。領内の経済にまで考えが及ぶなんて……

やっぱりこの人は只者じゃない。

「あー、うー」

対してヒビキちゃんは頭から煙を吹きそうな感じで依頼表を前に目を回している。私と同じ年ごろだし、いろいろと勉強させてもらった私でも考えが追い付かないんだから無理もない話だ。

「要するに、安全が確保されれば領民全員オールハッピーってことだ。実際はまだまだ手が届いてないのが現状のようだがな。おそらく政策としてコレが打ち出されたのはそう古い時代の話ではないんだろうさ」

「あう、うん、細かいところはわかんないけど、そこはわかったー」

「交易が盛んなエ・ランテルに続く街道ですから巡回の兵士も居ますので、早々モンスターに出くわすこともないでしょうけど油断は禁物です」

「しかし調査ということだが、具体的にどういうものを調査するんだ？ こう、痕跡とか？」

「概ねルイスさんの想像通りかと。調べるのは主にモンスターが街道に出没した痕跡です。足跡や体毛など、もしあれば糞便なども詳細を調べて報告してください。遺骸があれば詳細を調べてください。強力なモンスターが現れる可能性があるのですぐに高ランクの冒険者を派遣して周辺を調査します」

「うええ……モンスタアのフンなんて調べるの……?」

「ガマンしろヒビキ。腐乱死体を扱うのに比べりやまだマシだ」

　　どういう仕事してたんだろうこの人。腐乱死体を扱うって……彼の居た場所ではゾンビ狩りも軍の仕事だったのだろうか。それとも戦死者の回収? これだけのことを読める人が最前線で戦う一介の軍人で終わるようには見えないんだけど。

「まずはこの依頼を受けよう。いつ出発する?」

「受領から二日以内にはお願いします。この依頼はエ・ランテルの冒険者組合にも話を通してありますので、往路を終えたらあちらの担当か受付で報告を行ってエ・ランテル冒険者組合の組合長からサインをもらってきてください。」

　　復路での調査を終えましたらこちらで報告し、私か他の担当がサインをしますので、それを以って任務は終了となります。

　　歩きで往復して6日はかかる仕事ですので食料などは必要な分をこちらで用意します。これらはエ・ペスペルとエ・ランテル双方の冒険者組合で負担していますのでお代は必要ありません。必ず正門の兵士詰め所横の資材倉庫で受け取ってから出発してくださいね。

　　でも、タダだからって飲み食いせずに計画的に使ってください。いいですね?」

「食事付きとは豪勢だ。ヒビキが食べ過ぎないよう見張っておくよ」

「——あ、それともう一点重要なことが！」

「むあー、まだあるのー？」

「もうちよつとだから辛抱しなさい」

ぐでーつと机に突っ伏したヒビキちゃんがルイスさんに襟を掴まれて引き起こされる。こうして見ると保護者と子どものもようでもあり、微笑ましい気分になる。

「今回、ルイスさんとヒビキちゃんは初の依頼ということですので、こちらから先任の冒険者をサポートにつけます。現場のことは現場の人に聞くのが一番です。ええと、今手が空いてる人だと……つい先日鉄^{アイアン}級に上がったばかりですけど、確かな実力と信用のある人をサポートにつけますね。わからないことがあれば聞いてみてください」

「了解した。後ほど準備を済ませ、明日の明け方に出る」

「わかりました。先方にはこちらから日の出ごろに正門前で合流するように伝えておきますので、正門前で到着をお待ちください」

ルイスさんとヒビキちゃんが椅子から立ち上がって組合を後にするのを眺める。振り返ってこちらに笑顔で手を振ったヒビキちゃんに手を振り返すとヒビキちゃんは太陽のような笑顔を振りまいて、すぐにルイスさんと手を繋いで楽しそうにおしゃべりしながら去っていく。

「ふうっ……」

本当にすごい人たちだった。正直途中で伝え忘れたことや間違った説明をしていない気が気でなかった。理性的でありながら自分の力を過信せず、きつちりと説明を受けている間は静かなものだったけど、ずっとこちらが観察されているような気分だった。

「へえ、アリシアやるじゃん。あんなに賢い冒険者そうは居ないわよ。ああいう人に面と向かつて堂々と説明できるなんてスゴイじゃない」

「せ、先輩」

「そうそう。話はしつかり聞いてくれて、頭も切れる。そして何よりカツコイイ！イケメン！旅の剣士みたいな感じだけどお、孤高の剣士って感じの少しかけ離れた存在感があるとところとか最高！それにあの妹さんみたいな子に態度を注意してたけど、仕方ないなあ」って少し笑った感じですっごいキュンツてしちゃうわよね！

アリシアもドキツとしたんでしょ？ でしょでしょ！? 説明してるときとかすっごい張り切っちゃって〜！」

「ア、アンネまでっ！ そつ、そんなこと、ないんだから……からかわないですよ！」

「正直羨ましいわ……私もあの人みたいな落ち着いた知性的な人を担当できたら……いつかは付き合ったり結婚とか考えたりもしたんだらうなあ」

結婚………私とルイスさんが……えへへ……… きつと朝になって目が覚めた

ら「おはよう」って言いながら温かい紅茶を淹れてくれたり、長期の仕事に出る前や夜眠る前なんかはほっぺにキスしてくれたりとか……!!

「ふへえ……」

「いいわよねえ……理想的な旦那さんよねえ……」

「私にもそんな風に愛せる人ができればなあ……」

—— アリシア・フランソン、がんばります!